



↑
Keswick
ケズィック

Grasmere
グラスミア

Grasmere
グラスミア湖

Rydal water
ライダル湖

Rydal Mount
ライダルマウント

Ambleside
アンブルサイド

Windermere
ウインダミア湖

Windermere
ウインダミア

Esthwaite water
エスウェイト湖

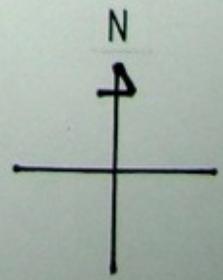
Hill top
ヒルトップ

Bowness-on-Windermere
ボウネス・オン・ウインダミア

Near Sawrey
ニアソーリー

1992年
イギリス
湖水地方

↓
Oxenholme
オクセンホルム





Noordzee
北海

Ijsselmeer
アイセル湖

Amsterdam
アムステルダム
Schiphol
スキポール空港

Natioanl Park De Hoge Veluwe
デ・ホーヘ・フェルーウェ国立公園

Den Haag
デンハーグ

Otterlo
オッターロー

Delft
デルフト
Rotterdam
ロッテルダム

Arnhem
アーネム

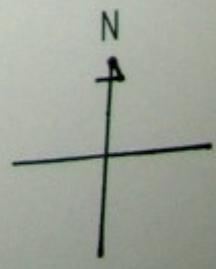
Spijkenisse
スパイクニッセ

ドイツ

Ouddorp
オウドオーブ

オランダ

1998年
オランダ



【登場人物】

亜見・・・日本人。23才。

広司・・・日本人。19才。

リズ&ティム・・・イギリス人。ナブ・コテージ（英語学校兼ゲストハウス）のオーナー夫妻。

エリー&ニッキー・・・リズ&ティムの娘たち。

アニカ・・・オランダ人。25才。

ロベルト・・・イタリア人。20才。

マグダ・・・オランダ人。レオの妻。

レオ・・・オランダ人。マグダの夫。

アランチャ・・・スペイン人。ワーカー。

アドルフ・・・ドイツ人。

ソニア・・・ベルギー人。

肌寒い秋風を抜け、地平線まで続く平らな草地を横目に眺めながら、バスは空港からアムステルダムへ向かった。夕陽が地平線にその燃える顎をつけている。見知らぬオランダ語の看板や標識が目につく。

市内に入ると、バスはフォンデル公園近くにあるホテルの前に止まった。

愛想の悪いフロント係りから部屋の鍵を受け取り、3階へ上る。

だが、部屋の鍵がうまく開かない。

悪戦苦闘し、やっとの思いで部屋に入る。

シャワーを確認しようと蛇口をひねると水がでない。海外では、こういうことはよくあることだ。だが、旅の疲れがとれないうちに、こういう状況になるとよけいに疲労感を感じるものだ。

フロントに電話し苦情を告げると、係りの女性が「今、水道管が故障中だから、水が出ないのは当然だ」と冷たく言い放った。こういう応対も、海外らしさを感じさせる。

亜見は苦笑した。旅の出だしは不調だった。

荷物を置くと、夕食をとり街へ出てみることにした。来る途中に見えた陽はすでに姿を消し、どんよりとした雲が街を覆い、ライツェ広場には、モノトーンの服装のオランダ人たちが闊歩していた。

亜見は、広場を眺めるハイネケン・フックのテラス席に座った。アイ스티ーを注文しようとしたが、店員は「そういう飲み物はない」と困ったように首を振った。

北海に面するオランダでは、紅茶やコーヒーをアイスで飲む習慣がないようだ。

パスタの夕食を取りながらも、周囲の雰囲気馴染めずにいた。

やはりここは異国の地だった。

夕闇に染まる街を足早にホテルに向かう。仲良く肩を抱き合いながら歩く、背の高いオランダ人男性二人とすれ違った。アムスでは珍しくないゲイのカップルだ。

亜見は、ジャケットのジッパーを上まであげ、キャメルベージュの柔らかい皮のショルダーバックを体の前でしっかり抱えなおした。一人旅はいつでも緊張する。

ホテルの部屋に戻ると、亜見は長いベッドに身を横たえた。しばらく身じろぎもせずじっとしていたが、やがて起き上がり、唯一の窓を開けた。

向かいのビルの灰色のコンクリート壁が見えるだけだった。

右下に目をやると、ビルとホテルの隙間から通りと街路樹が見えたが、それらはもうほとんど鉛色の闇に沈んでいた。

やっとな水が出るようになったシャワーを浴び、そのまま寝ることにした。どうせ明日チェックアウトするのだから、荷物を開ける必要もない。着替えだけを用意すると、スーツケースとスケッチブックの入ったナイロンバッグを足元へ置いて、ベッドに入った。

通りを走る車の音や路面電車の音が響いてくる。さらに耳を澄ますと、通りを歩く人のコツコツという靴音まで聞こえてくる。

それらの音を聞きながら、亜見は一人で佇んでいた6年前のオクセンホルムの駅を思い出した。

あの時も、どんよりとした雲が木の枝にかかるほど低く垂れ込めていた。

初めての海外一人旅に緊張しながら、重たいスーツケースをひきずり、人一人いない駅で、乗り換え列車が着くのを待っていた。しかし、あの時は早春のイギリスだった。草も木も新しい命を宿す祝福の季節だった。

ロンドンから列車で北上すること3時間。街を離れると、長閑な田園風景が広がる。広々とした草地で草をはむ羊や牛の姿が見える。車窓から流れる景色を眺めながら、亜見は新宿高層ビルの展望ロビーから見た最後の夜景を思い返していた。

展望ロビーの壁には、ラファエロ前派の複製画が数枚、掛けられている。

目にとまるのは、ロッセッティの『ベアタ・ベアトリクス』。ダンテの『神曲』のベアトリーチェを描いている。

芥子の花を手に、恍惚とした表情のベアトリーチェ。

彼女は、なにを感じているのだろう。

先に窓に向かったあの人のことを一瞬忘れ、亜見は絵に足を止めた。

「どうかした？」

あの人の声に我に返り、窓に近づく。

「あの暗いところが中央公園。あっちが新宿駅のほう。東京タワーも見える」

窓ガラスを指差すあの人の横顔は、近くて遠い。

亜見の視線に気づいて、あの人が亜見を見つめる。亜見は、視線をそらして黙って夜景を見つめた。

ビル群の明かりが、地上の闇の中でまばゆく輝いている。星々の光は大都会の街の明かりにかき消されて見えない。

ふと、赤い光が夜空を斜めに横切った。流れ星のような飛行機の光だ。

もうすぐ、あの光にのって飛び立つのだ。東京から。そして、日本から。

「元気で」

あの人が、ぽつりと言った。

「そちらも、お元気で」

「帰国したら・・・会社に顔を出さないか」

亜見は、黙ってかぶりを振った。

「そうか・・・。淋しくなるな」

会社に辞表を出したのは、1ヶ月前のことだ。

短大の英文科を卒業し、ソフトウェア会社の営業事務に配属されて3年。それが自分の望む仕事かもわからずに、社会の枠におさまった。

縦割りの人間関係の中で、お茶くみ、ゴミ掃除、コピー取りも文句を言わなかった。仕事を与えられるようになれば、顧客管理、データ入力、売上管理、営業マンの勤怠管理をこなした。決算期は多忙をきわめ、帰宅するのは、連日夜10時、11時を超えていた。

オフィスビルの四角い窓からは、どんより曇った空と灰色のビル群が見える。無機質な街並。

心の中にうごめくなにかを四角い枠に押し込めて、生きるために働く。

縦1.8メートル、横0.9メートル、寸分の狂いもなく正確に仕切られたオフィスの窓。その枠からはみだすことは、社会の枠からはみ出すこと。

—「野蛮人の子供は、ダメな人間」—

祖母の言葉が蘇る。

—「美大に進まないか。そのための指導をしてもいい」—

—「もう絵はやめたんです」—

高校の美術教師の薦めを断って、短大の英文科に進んだ。別にその学校に進みたかったわけではない。就職に有利な学校を選んだだけのことだった。

—「絵を諦めるなら、せめて英語だけはやっておけ。いつか役に立つかもしれない」—

美術教師の言葉を真に受けたのではない。いつかこの国を飛び出すため、それは自分で望んだ選択だった。

奨学金を得て入学した短大では、教授からの評判も良く、優等生と褒められた。誰かに認められる自分がある。

だが、祖母や親戚は、亜見を褒めるところか、亜見の存在そのものを疎んじた。彼らから認められることは、一生ないだろう。全ては血のせいだった。

せめて、他人から認められるには、あの四角い枠に自らを押し込めるしかない。

入社して出会ったあの人は、同じ課のひと回り年上の上司だった。美大を薦めた美術教師に少し面影が似ていた。

「内勤でも、営業の仕事を見ておいたほうが、仕事の流れを把握しやすい」

あの人はそう言って、亜見を外回りにも連れ出した。外回りの帰りには、必ず喫茶店で亜見にお茶をご馳走した。

「職場の連中には、内緒だぞ」

そう言って、あの人は笑った。

会社の飲み会の帰り、いつも遠回りをして亜見を家まで送った。

決算期の多忙な時期、残業している亜見に差し入れを買ってきたのも、あの人だった。

いつしか、亜見はあの人のことを兄のように慕うようになっていた。

四角い世界もそう悪くない。無機質だった毎日が少しずつ柔らかな色で彩られ始めていた。気づくと、視線はいつもあの人を追っている。

忘年会の帰り道、いつものようにあの人が亜見の家まで送る途中で、雪が降り始めた。駅から家までのアスファルト道は、うっすらと雪化粧をしていた。

「そっち、滑るよ」

坂道で、あの人が亜見の腕を引き寄せた。寒い外気の中、亜見の胸が熱くなる。想いの小さなかけらは、雪のように心に降り積もっていく。

音のない雪の中、あの人は亜見の肩を抱きながら、黙って歩きつづけた。

その頃から、自分の中に芽生えた感情に、亜見は困惑し始めた。この想いの行き着く先は、どこ

だろう。誰かに想いを寄せれば、相手からも同じように想われたいと願うだろう。もし、愛し愛されれば、別れたくないと願うだろう。一生、その人のそばにいたいと願うだろう。それは、何を意味するのか。結婚し、家庭を築き、子供を産み育ててゆくことに結びつくのだろうか。それはあまりにも、自分とかけ離れた世界に思えた。誰かを愛し愛される資格が、あるいは価値が、自分にあるのだろうか。自分が何者で、どこへ向かってゆくのかすらわからない混沌とした闇の中で。

亜見は、自分の中に芽生えた想いを押しとどめようとした。だが、押しとどめようとすればする程、押しとどめられない想いが溢れてくる。

外回りの帰り、いつものように喫茶店でお茶をしていたときのことだ。あの人は、いつになく無口で、コーヒーをすすっていた。タバコの本数もいつもより少ない。

やがて、あの人が口を開いた。

「結婚することにした」

突然の言葉に、亜見は言葉を失った。

「この間、郷里に帰ったとき・・・見合いしたんだ」

亜見とあの人は、恋人として付き合っていたわけではない。誰と結婚するのも、あの人の自由で、亜見とは関係ないことだ。にもかかわらず、結婚という二文字は、亜見の心を引き裂いた。恋人ができたと聞くほうがまだまだ。結婚は、永遠と同じ意味をもつ。永遠にその人を失うことを意味する。

「ただ」亜見は思った。信じようとする世界が足元から崩れていく。今まで、あの人が亜見にみせていた優しさは何だったのだろうか。亜見が彼に抱いているような感情のかけらさえ、あの人は、亜見に抱いていなかったのだろうか。全ては、亜見の独り善がりに過ぎなかったのか。心に渦巻く疑惑をどれひとつ言葉にすることもできずに、亜見はやっとのことで口を開いた。

「おめでとうございます」

あの人は亜見から視線をそらしたまま、うつむき加減でタバコをくわえた。

「・・・家庭をもって落ち着きたいんだ」

言い訳するか、独り言のように言った。

「私・・・」

私じゃダメですか。そう問いかけそうになって、亜見は言葉を呑みこんだ。

「・・・君は、まだ若い。もっと広い世界を見たほうがいい。自分を閉じ込める必要はない」
亜見の心を見透かすように、あの人が言った。あの人の言っていることは、当たっているのかもしれない。自分の奥に押しとどめている何かが、絶えず出口を求めて蠢いている。だが、あの人の人へ向けて流れ始めてしまった想いをいったいどうしたらいいのだろうか。受け止める海を失った川はどこへ流れていけばいいのだろうか。優しくされて、後で突き放されるくらいなら、はじめから優しくされないほうがずっといい。信じていた世界が崩れ去るのなら、なぜ人は人を信じてしまうのだろうか。

数ヵ月後、あの人の結婚を亜見は笑顔で祝福した。新婚旅行の土産物を渡すあの人の薬指に、真新しい指輪が光っている。全ては終ってしまったことだ。何度も自分に言い聞かせるが、職場で顔を合わせるたびに、忘れられない想いが湧き上がってくる。行き場を失った想いだけが溢れてくる。1年間、亜見は、あの人と同じ職場で働きつづけた。

だが、ものわかりのいい優等生の仮面を被って、自らを押しえ続けることは限界にきていた。四角い窓ガラスを叩き割りたい衝動に駆られた。

オフィスビルの窓を見つめながら、亜見は辞表を出すことを決めた。

—「会社を辞めてなにをするつもりだ。この時代、次の仕事なんてそう簡単には見つからないぞ」—

—「たかが数ヶ月、海外へ行ったところで身につく英語なんて、所詮帰国子女には、かなわないのよ。わかってるの」—

—「夢みたいなことばかり。勤めても数年で辞めてしまうなんて、やっぱりダメな人間だから」

—

—「血が悪いから、社会に適応できないんだ」—

祖母や親戚の非難も、もうどうでもいいことだった。

ただ、誰も自分のことを知らないどこかへ行きたい。単一民族を自負しているこの国から抜け出せればいい。

会社を辞める日、あの人は亜見を食事に誘った。高層ビルのワインバーで、ロゼワインで乾杯した。食事の後、あの人は展望ロビーに亜見を誘った。

「淋しくなるな」と言った後、

「妹がいなくなるみたいで」

あの人はぼつりと言った。

あの人の横顔が、グラスにゆれるロゼワインのように、東京の夜景に溶けてゆく。

列車の速度がゆるやかになり、亜見が目を開けると、人けのないオクセンホルムの駅に到着した。春まだ浅い田舎の駅は、ひっそりと静まり返り、裸の木の枝にとまるカラスだけが淋しげに鳴いていた。

オクセンホルムで湖水線の列車に乗り換えて、湖水地方最大の街ウィングミアに着いたのは、夕刻4時を過ぎていた。「最大の街」のはずだが、駅前には人もまばらで閑散としている。止まっていたタクシーに乗り込んで「アンプルサイドのナブ・コテージまで」と告げると、示した住所も見ずに、ドライバーは車を走らせた。

街を抜けると、なだらかに続く丘と林が見え、左手には湖水地方最大のウィングミア湖がなみなみと水をたたえている。まるでランサムのアマゾン号かツバメ号が帆走していそうだ。

ここ、カンブリアと呼ばれる湖水地方は、スコットランドとの境界に位置し、大小あわせて数十の湖と、高くても1,000メートル級程度の低い山々に囲まれた広大な国立公園だ。ピーター・ラビットの故郷といえは知る人も多いが、ワーズワース、コールリッジ、スコット、サウジー、ラスキンなどイギリスを代表する詩人達に古くから愛され続けた場所だ。現在は、ピーター・ラビットの作者であるビアトリクス・ポターはじめとする自然愛好家たちが創設したナショナル・トラストによって管理されている。

亜見がここを訪れることにしたのは、辞表を出すことを決めた日の帰り、立ち寄った書店で目にした写真集がきっかけだった。湖と林の牧歌的風景が映され、女性作家が、ナショナル・トラストの歴史と活動について報告していた。ロンドンから離れた、スコットランドとの境界に位置する桃源郷。古くから詩人や画家達に愛された湖水地方。

途中、アンプルサイドの町を通った。ウィングミアよりずっとこじんまりした町で、石造りの堅固な古い建物が立ち並んでいた。

アンプルサイドを通過し、再び丘と林の間を歩いていくと、小さな湖が見えてくる。ライダル湖だ。タクシーは、湖の前にぼつんと一軒だけ立つコテージの白い門を進む。ピーター・ラビットの絵本からぬけ出たような外観のコテージが見えてきた。

ナブ・コテージは、イギリス人オーナー夫妻が経営するゲストハウス兼英語学校で、かつてトマス・デ・クインシーに所有されていたこともある古いコテージだ。切妻屋根のついた漆喰のポ

一斉には、1702年と刻まれた石が嵌め込まれている。

車の止まる音を聞きつけて、オーナー夫人のリズが出迎えた。ウィンダミアから電話をしていたので、亜見の到着はすぐわかったようだ。リズは、金髪のショートヘアをした、年のころ40前後の小柄な女性だった。

「ようこそ、ナブ・コテージへ。今日から2ヶ月、ここがあなたの家よ。部屋を案内するわ」
リズは笑顔で言ったが、薄青色の瞳は鑑識するように亜見を見つめていた。

白い木製のドアから玄関を抜け、赤い絨毯の張られた狭い階段を上っていく。歩いたたびにギシギシ鳴る階段が、コテージの古さを感じさせる。途中、踊り場の白壁には、湖の反対岸から撮影した遠景のナブ・コテージの写真が飾られていた。

2階の床は斜めに傾き、部屋のドアの下部が床につかず、あて木で隙間をふさいでいた。さすが築300年のコテージだ。亜見は感心した。イギリス人は、石造りの家を自分達で補修しながら、何百年も住み続ける。

階段の正面の部屋をリズがノックしようとしたとき、急にドアが開き、中から背の高い白人女性が出てきた。

「アニカ、今日から同室のアミよ。日本から来たの」

亜見が「よろしく」と言いながら手を差し出すと、アニカは栗色の瞳で亜見を一瞥すると「ヤップ！」と言言言って、リズに早口で何かしゃべると、階段を下りて行ってしまった。リズは肩をすくめて、さすがに亜見に申し訳ないという表情で

「アニカは、あなたと、つまり・・・日本人と同室になるなんて聞いてなかったから、ちょっと驚いたみたい」と言い訳するように言った。

「でも、大丈夫よ。年もあなたの2歳上で近いから、そのうち仲良くなれるわ」

リズの安易な慰めは当てにならない。どうやらルームメイトとは、最初からウマが合わなそうだ。

部屋は、白壁に淡いグリーンの花模様ファブリックで統一されていた。ドアの真向かいが窓で、ドア側と窓側にベッドが一つずつ置かれていた。窓側のベッドをアニカが使っているようだ。

窓下のアルコーブには、小花模様のクッションが二つ置かれ、窓際に座れるようになっていた。それぞれのベッドサイドには円形のローテーブルがあり、その上にはアンティークなランプが置かれていた。窓側の壁には簡易洗面台もついていた。

ベッドの足元にローチェスト、ドアの横にハイチェストが置かれている。

アニカが出て行ってしまったので、どちらのチェストを使っていいものかわからず、開けずにおくことにした。

リズに連れられ、他の部屋を見てまわる。階上は生徒用のシェアルームと宿泊客用のゲストルームがあり、生徒用には共同のバス・トイレがあった。部屋はそれぞれ、淡いピンクやブルーの花柄のファブリックで統一されている。

階下は、玄関横に暖炉のある居間、玄関をはさんで反対側にゲスト用のダイニングルーム、その続きにクラスルーム、キッチン兼ダイニングルーム、食品貯蔵庫、キッチンの外には洗濯場があった。

洗濯場の古い木戸を抜けると、裏庭に出る。風雨にさらされた木のテーブルと椅子が半ば朽ちかけ佇んでいた。

リズは、裏庭にある別棟の建物を指して

「もう一つのクラスルームよ。アミは、アニカと一緒にあのクラスルームを使うと思うわ。明日の日曜日には、他の生徒も着くから、クラス分けはそのときにするわ」

アニカと英語のクラスも一緒だと聞かされ、亜見は半ば憂鬱になった。

そのとき、犬の吠える声が出て、前庭からボクサー犬が駆け込んできた。その後ろから、若い東洋人の男性が追ってきた。

「ベル！カモン！」

彼は犬の口からボールをとろうとしていたが、亜見に気づくと笑顔をむけた。こんな田舎の英語学校に日本人は来ていないだろうと思い「ハロー」と英語で挨拶をした。

「ハロー、俺、井上広司。広島出身の19歳。ヨロシクな」

いきなり日本語で挨拶された。日本人がほとんど来ない学校を選んできたはずだったので少々面食らったが、差し出された広司の手を握って

「私は、亜見。東京から来たの。よろしくね」と言った。

「ノー！」リズが手を振って「ノー、ジャパニーズ！ここでは皆、英語で話すのよ」

と笑った。

「ソーリー」広司は謝って、片言の英語で話しかけた。

「リズが、今日の午後、日本人が一人来るって言ってたんだ」

「あなたは、いつ来たの？」

「俺は、おとといの晩に着いたんだ。レッスンは始まるのは、月曜からだろ？まだほとんど人がいないから淋しくてさ。アミが来てくれて良かったよ」

広司の純朴そうな笑顔に、幾分、気分が和らいだ。

「コージ、アランチヤの仕事手伝ってあげて」

リズがキッチンの戸口から声をかけた。

「O.K」

広司は返事をしてから

「アランチヤは、スペイン人のワーカー。つまり、ここにアルバイトに来ている人さ。アランチヤが夕食の準備をするんで、野菜の皮剥き手伝わされるんだ」

そう言うと、キッチンへ走っていった。

亜見はコテージの裏庭を周って前庭へ向かった。到着したときの白い門のある前庭だ。庭の低い石壁沿いには、白や黄色の水仙が風に揺れていた。亜見は水仙のそばに屈んだ。

突如、眼の前に

黄金に輝く水仙の群れが

現われた

湖の岸辺で

木々の緑に映え

そよ風にゆられ、踊っていた

ワーズワースの詩の世界だ。しばし水仙の踊る様を見つめてから、目を上げると、道を隔ててライダル湖の煌めきが見えた。湖を囲む小高い丘は、芽吹き始めた木々の薄萌黄色に染められている。

ふと気づくと、アニカが自転車に乗って通りから走ってきた。ナブ・コテージに戻ってくると、亜見の視線に気づいたが、そのまま自転車を押して裏庭へ行ってしまった。

「夕食ー！準備できたぞー！」

広司がフライパンをカンカンたたきながら、コテージ中に聞こえそうな声で叫んだ。

戸口からひょいと顔をのぞかせた広司は、亜見を見つけると

「早く来いよ。ここじゃ弱肉強食だぞ」と日本語で言った。

急いでダイニングへ向かうと、暖かなオレンジ色のランプに照らされたダイニングの大きな木

のテーブルには、パンとパテとサラダが大皿に盛られていた。

「ハイ、アミ。アミはそこに座って」

と初見の金髪の女性が声をかけた。広司が言っていたアランチャだろう。スペイン人にしては珍しく金髪の小柄な女性だった。年のころは、アミと同じくらいだろうか。アランチャは、広司にあれこれ指示しながら、忙しく動き回っていた。アランチャが示した席は、ひよろっと背の高い男性の横だった。男性は、亜見を見つけると人懐こそうに笑って

「ハイ、アミ。ようこそナブ・コテージへ」と言った。

「彼はティムよ。そして、こっちが私達の子供、エリーとニッキーよ」

リズがティムの横から言った。10歳と6歳くらいの二人の子供がテーブルで遊んでいた。そこへアニカがやってきて、子供達の隣に座った。

「これで全員揃ったわね」

アランチャがアニカの隣に座り、広司が亜見の隣に座った。

「じゃあ、みんな、手をつないで」

リズムの掛け声で、隣同士手をつなぐと

「Eat Smakelyk！（イーツマカリーク）」と一斉に言って、食事が始まった。

「な、何？」

亜見が広司に訊ねると

「ここじゃ、食事のとき、みんなで手をつないでこう言うんだ」

パテをのせたパンをほおばりながら広司が答えた。

「“Eat Smakelyk”は、オランダ語だよ。アニカの国の言葉さ」

ティムが横から口をはさみ、亜見に説明しながらアニカを見ると、アニカもふっと笑った。ここにきて初めてアニカの笑顔を見た。でも、それは亜見にむけられたものではなく、明らかにティムにむけられたものだった。

「おいしい食事を、という意味なんだ。英語には、食前にそういう言葉を使う習慣がないから、オランダ語を借りてきてるんだ。そのうち、君もナブの習慣に慣れるよ」

手腕のリズとは対照的にティムが気さくに話した。食事を取り分けるカトラリーと食器の触れ合う音と英語の会話が響いている。アニカは、随分、流暢な英語でリズと話していた。

「アニカとアミは同室なんでしょ。クラスはどうなるの？」

アランチャがリズに質問した。話題が亜見に触れられると、アニカは黙って下をむいて、パテにフォークをさした。

「クラスも一緒よ。私が受け持つわ。アランチャとコージはティムのクラスね。明日、生徒がくれば、もっと人数は増えるけど」

「あれー、アランチャも授業に出るんだ」

広司が素っ頓狂な声を出した。

「一緒じゃ嫌なわけ？私は、ここで半分ワーカー、半分生徒なのよ。大変なんだから、コージと違ってね！」

「俺も、半分ワーカーみたいなもんじゃないか！アランチャの仕事手伝ってるぞ」

コージの反論にみんなは笑った。

「そうそう、言っておくけど、ここでは、生徒も皿洗い当番があるのよ。共同生活の場ですからね」

リズがきっぱりと言った。なるほど、ロンドンの英語学校より費用が安い理由は、単に田舎だからという理由だけではなさそうだ。

食後、部屋に戻るとアニカが先に戻ってきていた。気まずい雰囲気を感じながらも、声をかけてみる。

「あの、アニカ・・・さっき聞けなかったんだけど、チェストはどっちを使ったらいい？」

「私は、こっちを使ってるわ」

亜見のほうも見ずにアニカはローチェストを指差した。アニカは亜見に背を向けてベッドに腰

掛け、サイドテーブルに置いてあったミネラルウォーターをのんだ。

亜見が荷物を取り出しハイチェストにしまっていると、アニカがふいに振りかえって

「スーツケースが邪魔ね。ベッドの隙間に置きましょう」と言った。

「そうね・・・」

アニカに言われるままに、二つのベッドの間にスーツケースを押し込んだ。一つの部屋を完全に仕切る境界線のような。アニカも自分のスーツケースを押し込むと、無言のまま部屋を出て行った。透明なピアノ線のように、目に見えない境界線がアニカの心にも張られているようだ。

亜見は溜息をつく、タオルと着替えを持って、バスルームへ向かった。

服を脱ぎ、髪をほどき、ピアスを取る。自分を締め付けている全てのものを取り去って解放していく。バスタブの中でシャワーの栓をひねった。熱い湯に体をうたせていると、体の芯から疲れが湧き上がり、湯とともに流れ落ちていくのを感じる。

チクリと手首が痛んだ。

左の手首を見つめる。

幾筋もの傷跡が、時折疼く。

傷はすっかり治ったはずだった。

だが、時折、神経を痛める傷が、心もチクリと刺してくる。

亜見は茶色く脱色された髪を洗った。髪を傷つけるのは、若者の流行のためだけではない。ピアスをするのは、おしゃれのためだけではない。

ただ手首を傷つけるのと同じこと。

心に巣食う痛みを忘れるために必要なことは、より大きな痛み。

流れ落ちる鮮血が、心を浄化していく。血を見るのは気持ちがいい。もうあの痛みを感じないですむ。新しい傷は、古傷を癒す唯一の鎮痛剤。

シャワーの後、部屋へ戻ったが、アニカはまだ戻っていなかった。階下でリズたちと話をしているようだ。アニカのベッドサイドのランプをつけ、電気を消して、ベッドにもぐりこんだ。階下の話し声が小さく響いてきた。いつ終わのかと思いながら、亜見はそのまま眠りに落ちていった。

1992年 イギリス

(2)

翌朝目覚めると、アニカはすでに起きてシャワーを浴びたらしく、濡れた髪を部屋の小さな洗面台の前で乾かしていた。

「グッドモーニン（おはよう）、アニカ」

声をかけると

「モーニン（おはよ）」とぶっきらぼうな返事が返ってきた。

「昨夜は、遅かったのね。あなたが戻ってきたのを知らずに寝ちゃったわ」

わざと明るく話し掛けてみたが返事はない。会話は途絶えたまま、支度を終えたアニカが「先に行ってる」と言い残して部屋を出て行った。

ダイニングには、キッチンの窓から清々しい朝の光が差し込んでいた。

テーブルには、三角に切られた焼きたてのトーストが、トーストスタンドに立てられ、ヨーグルトやシリアル、ジャム、バター、果物が並んでいた。

亜見はトーストを取ってバターを塗った。周りを見ると、みんな、ヨーグルトにジャムを入れ、トーストにもジャムをたっぷり塗っていた。ヨーロッパ人は甘いもの好きなのだろうか。

食後に、フルーツ皿からオレンジを一つとって剥くと、柑橘のさわやかな香りが広がった。

「アミ、オレンジが好きなの？」

アランチャが目ざとく見つけて聞いた。

「ええ、柑橘類は好きよ」

亜見の答えに、アランチャは笑みを浮かべた。その笑顔の意味を問う間もなく、リズが話しかけた。

「今日の皿洗い当番は、コージとアミでお願いね」

食事の後、食器をシンクに運ぶと

「アミ、こっちだよ」と広司が言った。

シンク下の扉を開けると、食洗機になっていた。

こんな古いコテージにも食洗機がついているものなのかと感心しつつ、亜見は皿やカトラリーを入れていった。

「まったく、ここに来てから、一生分の家事をやった気がするよ」

「何よ、それ」

「日本にいた頃は「男子厨房に入らず」って親父に言われてたのにさ」

広司は、ふくれ面をした。

「いまどき、そんなこと言っているとモテないわよ」

「そうかな。親父が見たら仰天するよ。おふくろは喜ぶだろうけどな」

そう言いながら、広司は、ナベやフライパンを食器洗い機に詰め込んだ。

「今日は生徒や宿泊客も増えるから、夕食の片付けは覚悟しといたほうがいいぞ。今日は俺のルームメイトが着くんだ。楽しみだな。どんなヤツなんだろう。アミはいいよな、初日からルーム

メイトがいてさ」

広司の言葉に、亜見は少し沈黙した。

「アニカは・・・私と同室じゃないほうが良かったのかも。私も一人部屋にしたほうが気疲れしないですんだし」

「何言ってんだよ。友達つくるいいチャンスじゃないか。アミは何のためにここに来たんだよ。

レッツ・コミュニケーションだぞ」

「変な英語」

「うるさい。言葉なんて通じりゃいいんだよ。

あ、玄関のほうに車が止まる音がしたぞ。誰か来たんだ」

広司は、亜見の腕をパンとたたくと、キッチンの木戸から走っていった。

裏庭から前庭へ回っていくと、ちょうどタクシーから40代くらいの男性が降り、リズと挨拶をしているところだった。

「こちらがコージとアミ。日本人よ」

リズが紹介すると

「よろしく。私はアドルフ。ドイツのベルリンから来ました」

と背の高い口髭をはやしたその男性は言った。丁寧だが、どこか冷たそうだ。笑みのうしろに人を蔑んでいるのが見える。

「あなたは一人部屋希望だったわね」

リズがアドルフをコテージの中へ案内した。

二人が言ってしまうと、広司が亜見にささやいた。

「良かった。あの人がルームメイトだったらどうしようかと思ったよ。なんか感じ悪いよな、あのおっさん」

思っていたことを広司が言ったので、亜見は思わず笑ってしまった。

午後、亜見は裏庭にある小屋へ向かった。アニカが自転車を返していたところだ。

小屋では、ティムが鼻歌を歌いながら自転車を整備していた。

「自転車を貸してもらえる？」

「ああ、どうぞ。好きなのを決めたら、乗る前にタイヤとブレーキをチェックしてあげるよ」

好きなのをといても、どの自転車も亜見にはサドルとハンドルの位置が高すぎた。

「サドルを低くできる？」

「ああ、だけど、長いこと高さを調節してないから動くかな」

確かにサドルのスチール部分が錆びついて、なかなか動かなかった。

やっとのことでサドルを一番低くできたが、それでも乗るとつま先立ちしなければ、足がつかない。亜見が苦心している姿に、ティムが笑い出した。

「君を見ていると、エリーが初めて自転車に乗ったときのことを思い出すよ。

あ、そうだ。エリーの自転車を試してみるかい」

ティムは奥へ行って、子供用の自転車を引いてきた。

子供用の自転車なんて恥ずかしいと思ったが、高さはちょうどだった。

「今はその自転車使っていないから、君がいる間は専用車にしたらいい」

ティムは笑いながら言った。

「バカにしてるでしょ。これでも、日本では平均身長なのよ」

「バカになってしてないよ。キュートだって思ってるのさ」

「さあ、どうだか」

「怒らないで、機嫌直して行っておいで。ここらへんは、熊が出るから気をつけるんだよ」

「まさか！」

「本当さ、ゴールディロックスちゃん」

ゴールドロックとは、イギリスの古い童話で、3匹の熊の家に迷い込んだ女の子の名前だ。
やはりからかわれているとしか思えない。
ティムの笑顔に送られて、亜見はナブを出た。

ライダル湖を目の前にして、西へ行くか、東へ行くか考えた。

東へ行けば、昨日通過したアンプルサイドの町がある。西へ行けば、逆隣の町グラスミアがあるはずだ。

亜見は、まだ見たことのないグラスミアの町を目指すことにした。

湖に沿って走ること数分、一台のバスがグラスミア方向に亜見を追い抜いていった。

列車の乗り入れない湖水地方では、バスは大事な「足」になるのだろう。

そんなことを考えながら走っていると、バスが停車した場所から、旅行者らしき若い白人男性が地図を手に歩いてきた。

男性は亜見を見つけると、嬉しそうに手をふって英語で話しかけてきた。

「すみません。ここはどこですか？」

唐突の質問に、亜見は一瞬絶句した。

「ここ・・・ですか？」

亜見は、あたりを見回す。一本道がある以外は、林と草地が広がっているのみだ。

絶句している亜見を男性も黙って見た。周囲の林を見回してから、再び互いの顔を見ると二人は吹き出した。

「ここは、どこかしらね」

亜見が笑いながら言うと

「君が自転車に乗ってきたから、ここに住んでる人かと思ったんだけど違うんだね」

男性も笑いながら言った。

「僕の聞き方が悪かった。あそこのバス停の名前はわかってるんだ」

男性は持っていた地図で、ホワイト・モスと書かれた場所を指差した。

「ウィンダミアからライダルにあるナブ・コテージに行きたいって、バスの運転手に言ったら、あそこでおろされちゃったんだ」

「ナブ・コテージ！」

「知ってるんですか？」

「ええ、だって私は、そのナブ・コテージから来たんだもの」

「本当に？そりゃ、良かった。ここら辺は、ほとんど人が通ってないから、君に会えてラッキーだったよ」

「あなたは、ナブに滞在するの？」

「ああ、生徒としてね」

「じゃあ、私と同じだわ」

「なんて奇遇なんだ。僕はロベルト。イタリアのローマから来たんだ」

「私はアミよ。日本から来たの」

差し出されたロベルトの手を握った。

「そうか、君は日本人なんだね。サクラ、フジヤマの国だね」

「ええ、よく知ってるわね」

「でも、日本の女性がこんなに綺麗で親切だなんて知らなかったよ」

嬉しそうに言うロベルトのお世辞も、そう嫌味には聞こえない。

ロベルトは、ティムやアドルフに比べると小柄で、黒髪に親しみのある黒い瞳をしていた。年のころは亜見よりやや上に見える。

亜見は自転車を押しながら、ロベルトをナブへ案内した。

「ここがナブ・コテージか。きれいなところだ。案内してくれてありがとう。そういえば、君はどこかへ行く途中だったんじゃないの？」

「ええ、隣町のグラスミアまでね。でも、いいのよ。別に用事があったわけじゃないから。リズを・・・このオーナー夫人だけど・・・呼んでくるわね」

リズにロベルトの来訪を告げると

「コージもいらっしゃい。ルームメイトの到着よ」

リズは広司に言った。

「ずるいぞ、アミ。俺より先にルームメイトに会ったんだな」

広司は笑って、亜見の肩をたたいた。

広司とロベルトは会うやいなや、すぐに意気投合したようだった。広司はロベルトのスーツケースを運ぶのを手伝っていた。

アドルフやロベルトの他にも、その午後には何人もの客が到着した。アランチャと同じくワーカーとしてやってきたベルギー人のソニアや、フランスやスイスからの宿泊客たちだ。

その日の夕食はにぎやかな顔ぶれだった。キッチンダイニングでは、イギリス人、日本人、オランダ人、ドイツ人、イタリア人、スペイン人、ベルギー人がひとつのテーブルに集まっての食事だ。

「まるで万国博覧会だな」

広司が亜見にささやいた。

「コージ、ノージャパニーズ、ヒア！」

リズが目ざとく見つけて注意した。

「ソーリー」

広司が謝った。

夕食は、イギリスの代表的な料理フィッシュ&チップスだった。白身魚のフライにフライドポテトを添えたものだ。イギリス人は、これにお酢をかけて食べる。とびかう英語は、それぞれの国のなまりのある英語だ。初日の夕食よりにぎやかな雰囲気でもアニカとの気まずさも感じずにすんだ。

食後、紅茶を飲みながら、お互いの自己紹介やナブに来るまでの話をした後、皆はそれぞれの部屋に戻っていった。

亜見はアニカのいる部屋に戻る気になれず、一階の居間に向かった。

茶系の落ち着いた花柄のソファと猫足の肘掛け椅子、こげ茶の木のネストテーブルが置かれ、ソファと共布でできたカーテンがかかっている。

ここでは4月といえど、陽が落ちると冷え込む。暖炉の中には、薪がくべられている。

亜見は、小さく切った新聞紙にマッチで火をつけ薪の底に入れた。パチパチと小さな音をたてて火が燃えた。火かき棒でかくと、火が大きくなり薪を燃やし始めた。

木の燃える匂いがする。どこか懐かしい匂いだ。

じっと見ていると、緋や朱の服を着た小鬼が薪の上に一人二人現れて踊りだした。伸びたり縮んだりしながら、仲間を増やし、手をつなぎ輪になって、しだいに激しく踊りまわる。

コンコンー

小鬼のダンスから我に返り、音のする窓に目を移すと、外の暗がりの中から大きな黒い輪郭が浮かび上がっていた。

ふとティムの言葉が頭をよぎる。

—「ここら辺は、熊が出るから気をつけるんだよ」—

一瞬、体が硬くなった。ティムの言葉は冗談ではなかったのかもしれない。おなかを空かした熊が人里離れたコテージに迷い込んだのだろうか。

黒い影は窓ガラスをたたいた。

目が暗がりに慣れると、その影は熊ではなく人影だとわかった。

初老の白人男性で、玄関のほうを指差しながら何かしゃべっている。

「ドア・・・開けて」

よく見ると男性の後ろに、不安そうな表情をした年配の女性も立っていた。

こんな時間に来客かと訝ったが、強盗でもなさそうだ。

亜見は玄関へまわりドアを開けると、男性は安心した表情になった。

「ありがとう。ドアに鍵がかかっていたから、今晚は寒空の下、コテージの前で野宿かと思ったよ」

「そうね、誰かが鍵を閉めてしまったみたい」

「今日の夕刻につく予定だったんだが、列車が遅れてしまって、やっと着いたら、ドアが閉まっている。外から電話しようにも、こちら辺には公衆電話なんてないだろう？」

亜見は、男性の言葉に「確かにそうね」と笑った。なにしろ、山と湖と、熊しかいないのだから。

「一階の他の部屋は、みんな真っ暗で、唯一、君のいた部屋に灯りを見つけてノックしていたんだ。君がいてくれて良かったよ」

「お役に立ててよかったわ。みんな二階の部屋に行ってしまったから」

「ああ、自己紹介が遅くなった。僕はレオ、彼女は妻のマグダだ。オランダから来たんだ」
オランダといえばアニカの国だ。少しためらいつつも

「私は亜見。日本人です」と、挨拶した。

「よろしく」

レオは、青灰色の瞳を優しく細めて手を差し出した。レオの大きな手は暖かく、父親がいたらこんな手なのかと亜見は思った。

内気そうなマグダも手を差し出した。深い海のように静かな青い瞳が、優しく亜見をみつめた。

カーテンの細い隙間から、光が差し込んでくる。いつのまにか眠ってしまったようだ。カーテンを開けると、まぶしく透き通った秋の空が広がっている。冷たい水で顔を洗うと気分も引き締まる。身支度を整え、レストランで軽く朝食をすますと、ホテルをチェックアウトした。短い滞在だった。

タクシーでアムステルダム中央駅に向かった。レンガ造りの重厚な駅舎は、どこか見覚えがある。そう、東京駅だ。東京駅は、このアムステルダム中央駅をモデルに設計されたと言われている。妙な気持ちだ。東京から十数時間離れたこの異国の地で、最も東京らしい建物が目の前に建っている。そして、ここを行き交う人々の誰も、この駅舎とそっくりの建物が、極東の地にあることなど知りはしないのだ。

駅の窓口で、亜見はロッテルダム行きチケットを買った。ホームへ行くと、すでに列車が止まっている。車掌をみつけて

「すみません。この列車はロッテルダムに行きますか？」と訊ねた。

「行きますよ。早く乗って」

車掌にせかされ慌てて乗り込むと、列車はすぐに発車した。

列車で移動すること約40分、ロッテルダムの駅に着いた。アムステルダムも大きな駅だったが、ロッテルダムも大きな駅だ。

改札を出て右手に大きな花屋がある。待ち合わせ場所の花屋だった。人ごみをかきわけ、花屋に近づいていく。行き交う人々の顔の中を探す。

背の高い細い婦人が立っているのが見えた。亜見が近づくと、女性の懐かしい青い瞳が、6年前と変わらずに亜見をみつめた。

「マグダ！」

「アミ・・・」

興奮と緊張の入り混じった表情で互いをみつめ、それから二人は抱き合った。

マグダの家は、ロッテルダムからさらに列車で20分ほど行ったスパイクニッセという町にあった。スパイクニッセは閑静な住宅街だ。駅から歩いて数分のところにマグダの家があった。戸建てではなく、一棟に数件の家が隣り合っている。前庭には青々とした芝生が刈り込まれ、つるバラが玄関のレンガ塀をつたっていた。

家の中に入ると、広々としたリビングにはインドネシア製のライトや異国風の置物が置かれていた。ダイニングからは明るい黄色の清潔なキッチンが見え、そこから庭へ抜けるドアがあった

ドアを抜けると、こじんまりした庭にアプリコットピンクのイングリッシュ・ローズが豊潤な香りを漂わせ、薄桃色の紫陽花が光を映し、青紫色の可憐な鉢植えの花々が咲き、木々は赤い実を葉の間からのぞかせていた。

「ヘリテイジは、私も好きなバラだわ」

アプリコットピンクのバラに目をやりながら言うと

「毎年このバラが咲くと、庭でレオとお茶をしていたわ。子供達が大人になって出て行くまでは、家族一緒に休日をここで過ごしたの」

マグダは、ヘリテイジを一輪切ると、ガラスの花瓶にさして、ダイニングテーブルに置いた。

「お茶をしましょう。きっとあなたも好きだと思うわ」

マグダは黄色いキッチンでお湯を沸かすと、茶葉を入れたポットに注いだ。ウォーマーをかぶせ、テーブルに運ぶ。バラの香りが漂った。

「バラのお茶・・・」

マグダは静かに微笑んだ。バラの花びらのお茶は、魔法のように旅で疲れた亜見の心と体に溶けていった。

お茶の後、荷物もそのままに、マグダと亜見は家を出た。ガレージから車を出して乗り込む。緑色の小さな車、トウインゴだ。トウインゴは二人を乗せて、海へ向かった。二人は海へ行かなければならなかった。それが、亜見のオランダへやってきた理由だったからだー

海からの帰り、マグダは「モレンを見に行きましょう」と言って車を走らせた。

亜見の目に飛び込んできたのは、海岸線に続く巨大な風車群だった。

「モレンはオランダ語で風車のことなのよ」

マグダが言った。

日本でイメージする昔風の風車ではなく、背が高くすっきりとスマートな現代風の白い風車で、その姿はまるで背の高いオランダ人のようだった。

海岸線にそびえる真っ白な風車が北海から吹く風に羽を回している姿は、ちょうどカモメが今しも空に飛び立とうとしている姿にも似ている。

「オランダ人は、昔から風をエネルギーに変えて生活してきたの。風車で干拓地を造り、運河を造り、運河からの増水を防ぐために、ダイクという堤防を築き、風と共に生きてきたのよ」

マグダはオランダ人の生活の歴史を語った。

「『世界は神が創ったが、オランダはオランダ人が創った』という言葉があるほどよ」と笑いながら言ったときは、亜見も笑ってしまった。言いえて妙だと思った。

マグダの言うとおりに、オランダは、人工的な国だけに自然の景観には乏しく、平地が多い。平地が多いので、オランダ人は自転車で移動することが多い。学生もスーツを着たサラリーマンもOLも、さっそうとペダルをこいでいく。亜見は、ナブ・コテージでサドルの高さに苦心したことを思い出し、オランダの自転車はさらに乗りづらいだろうと苦笑した。

帰り道、車を運転しながら、マグダが黒い飴を亜見に手渡した。

「ドロップェよ。オランダ人は皆好きなんだけど、オランダ人以外は誰も食べたがらないの」その言葉に恐る恐る口に入れてみると、飴とは程遠い味に思わずむせた。しょっぱいような、苦い薬のような味だ。亜見の顔にマグダは

「好きになれなかったら捨てていいのよ」と笑った。

我慢して少し舐めてみたが、とても口の中に入れていられず、こっそりティッシュに包んだ。

しばらく車を走らせると、古いこじんまりした町に入った。車道は石畳だ。

「息子の住んでいる町よ。10月には今住んでいる家売って、ここに引っ越すの。あの家は息子が生まれた時から住んでいた家だけど・・・」

思い出の詰まった家売ることに、マグダはどんな思いでいるのだろう。マグダの気持ちを本当の意味でわかるには、亜見はまだそれだけの人生を生きてはいないと思った。

「息子さんは何をしているの？」

「レックスは自動車会社に勤めてるわ。娘のアンカは、あなたと同じ年よ。ツアーガイドをしていて、今はケニアにいるの。三ヶ月は帰ってこないわ」

「そんなに？」

「ええ、オランダ人は旅行好きで、だいたい一ヶ月から三ヶ月くらいかけて旅をするわ」

「信じられないわ。日本人も旅行好きだけど、そんなに休暇をとったら会社をクビになっちゃうわ」

そう言った後から、亜見は自分も同じことをしていると思い直した。

「確かに私も会社を辞めて、ナブに行ったし、今回も仕事を辞めてきたんだけど」

「日本人は、数ヶ月の旅行のために会社を辞めなくてはならないなんて、もったいないわね。仕事は何十年も関わっていけるものなのに、どうして一、二ヶ月の休暇をとらせてもらえないのかしら」

マグダにそう問われると、答えに窮する。日本とヨーロッパの労働体制の違いは、いったいどこからきているのだろう。

マグダは一軒のログハウス風の建物の前に車を止めた。

「パネクックの美味しいお店なの。入りましょう」

「パネクック？」

「オランダのパンケーキのことよ」

マグダと入った店内は、木のテーブルや椅子、木のバーカウンターがあり、地元の人でにぎわっていた。

日本人が来ることが珍しいのか、客の何人かは亜見にちらりと視線を投げた。

オランダ人はめったに外食しないという話だが、軽食はするものなのかと思いつつ、亜見はメニューにあったリンゴとシナモンのパンケーキを注文した。

パネクックがくると、亜見は

「Eat Smakelyk!」と言った。

「覚えていたのね」

マグダは懐かしそうに微笑んだ。

パネクックは、クレープのような薄い生地で、そこにフルーツやハム、チーズ、野菜などを入れ、おやつがわりにも、サンドイッチがわりにもできる。

軽食を終え、会計で亜見が自分の分を払おうとすると、マグダがそれを制した。

「私のところにいる間は、あなたは何も払う必要はないわ」

「でも・・・」

「いいの、あなたは大切な友人だから。あなたは、もっと自分に必要なことにお金を使ったらいいわ」

英語で割り勘のことを「ゴー・ダッチ（オランダ流にいこう）」あるいは「ダッチ・アカウント」というくらい、オランダ人は金銭面でシビアだと言われているが、亜見はそれは正しくないと思った。いったん親しくなった友人に対しては、精一杯のもてなしをする。彼らの質素な生活は、決して「けち」ということではないのだ。「儉約家オランダ人」の気前を見せてもらった気がした。

家に着くと、リビングに置いたままの荷物を運ぶことになった。

「荷物が多いでしょうから、2階の私たちの部屋を使ってちょうだい。」

マグダの部屋は、広々とした清潔な部屋で、ダブルベッドの上の作りつけ棚には、家族の写真が飾られていた。レックスやアンカの幼い頃の写真、成長してからの写真、ナブで撮られたレオとマグダの写真もあった。その中に一枚、亜見の目をひきつけた写真があった。重い雲に覆われた灰色の海を崖から眺めているレオの後ろ姿の写真。

他の家族写真とは、あまりにも対照的だ。じっと佇むレオの後ろ姿は、いまにも鉛色の波にさらわれそうだ。

「去年、キプロス島に二人で旅したときの写真よ」

マグダがぽつりと言った言葉に、亜見は何も言えなかった。黙っている亜見に、マグダは気を取り直したように

「夕食の支度をするわね。あなたは、ゆっくり荷物の整理をされていてね」
と言って、部屋を出て行った。

荷物を整理し終えてリビングに行くと、テーブルに料理が並んでいた。

「ハッツポットよ」

「ハッツポット？」

「ええ、オランダの家庭料理よ。オランダでは、よくじゃがいもを食べるの」
食事をしながら、マグダからハッツポットの作り方を聞いた。ひき肉を炒め、塩・胡椒で味付けし、じゃがいもと人参、玉葱をゆでてマッシュしたものを合わせた料理だ。これに特製ソースをかけて食べる。食べ方のコツは、ハッツポットを皿にリング状に高く盛り、円の真中を開けておく。円の真中にソースを入れると、まるでダイク（堤防）に囲まれた運河のようになる。ハッツポットの堤防を円の内側から崩しながら、ソースをからめて食べる。さすが運河と堤防の国オランダの料理だ。

食後、亜見が皿を洗おうとすると

「いいのよ。きっと夜中に皿洗い妖精がやってきて洗ってくれるわ」

マグダはいたずらっぽく微笑んだ。

オランダへ来て2日目の夜が静かに更けていった。

初めての授業の後、昼食もほとんど口にせず、亜見は一人リビングルームのソファに座っていた。部屋に戻っても、相変わらずアニカは必要以上のことは口をきかない。

居場所がないことは、日本にいてもここにいても同じことだ。どこにいても、いつも知らない土地にいるように感じていた。異質な空気の中に身を置きながら、いつも探していた。自分が自分でいられる場所。それがどこにあるのか、果たしてそれがあつたのさえ亜見にはわからなかつた。ソファで眠っていた猫のソルティがあくびをして伸びをすると、亜見に擦り寄つてきた。亜見が手を伸ばすと、撫でてくれというように、喉をならして顎を亜見の手のひらにのせた。動物はいい。人間は拒否するが、動物は拒否しない。差別も偏見もない。

「ほら、立ち上がつて！もっと明るい顔をして！外に出て、ひわの鳴き声を聞いたらいい」
突然、リビングの入り口から声が聞こえた。見ると、レオが顔をのぞかせていた。

「それはワーズワースの詩ですね」

「ああ。君もワーズワースを読むのかい？」

「ええ、少し」

「よければ、あなたにこの詩集をお貸しするわ」

レオの隣から、マグダがそつと差し出したのは『レイク・ポエツト』と書かれた詩集だつた。

「湖水詩人の詠つた詩の世界を見れば、気晴らしになるかもしれないわ」

「ありがとう」

「ワーズワースも言っている。こんないい天気にも部屋に閉じこもつてちゃいけないね、お嬢さん」

レオも言つた。

「そうかもしれませんね」

「今、グラスミアの町へ行つてきたところだよ。君はもう行つてみたかい？」

「いいえ、まだ・・・」

「こじんまりした可愛い町だよ。行つてみたらどうだい」

「そうですね」

亜見はレオのアドバイスに従うことにした。部屋にこもつていても気分が晴れるわけではない。

ティムに借りた子供用自転車に乗つて、昨日行き損ねたグラスミアを目指すことにした。風は肌寒く、ジャケットを着てこなかつたことを少し後悔した。

ナブの前を伸びる石堀に沿つて自転車を走らせる。湖水地方は、この板状のスレート石を積み上げたドライ・ストーン・ウォールという石堀が山道、湖畔、牧草地をとわず、至るところに途切れることなく続いている。もし地図がなくても、石堀沿いに歩けば必ずどこかの町には着くだろう。この果てしない石堀をいつの時代、どれだけの人々が、どれくらいの歳月をかけて築き上げたのだろうと亜見は考えた。人と自然の共存する場所、それが湖水地方だつた。

ロベルトと出会ったホワイト・モスのバス停も過ぎ、右手に山、左手に林を望む坂道を登っていくと、坂の上に見晴台があり、ベンチがひとつ置かれていた。

自転車を止めベンチに座ると、ライダル湖からグラスミア湖に水流を移した湖面が望める。高台から眺める湖は眼下に広がり青い空を映している。湖の周りには山肌をみせた小高い丘がなだらかに続いている。しばらく景色に見入っていると

「アミ！」

ふいに自分を呼ぶ声がした。ふりむくと、ロベルトが自転車を押してやってきた。

「やあ、またグラスミアの途中で会ったね」

「そうね、あなたもグラスミアに行くの？」

「うん、昨日君が言っていたからね。ここに座っていい？」

亜見の隣を指した。

「どうぞ」

「なんだか元気がないね」

ロベルトは、亜見の隣に座りながら言った。

「・・・」

「どうしたの？」

ロベルトの黒い瞳が、亜見を覗き込んだ。

「昼食もあまり食べてなかったし、ちょっと気になってたんだ」

「人のことよく見てるのね」

「誰のことでもって訳じゃないよ、アミ」

ロベルトは真面目な顔つきで亜見を見つめた。

「え？」

ロベルトの真剣な眼差しに、一瞬、亜見は動揺した。

「冗談だよ」

ロベルトは、吹き出した。

「ロベルトったら、人のことからかって」

「からかってないよ。でも、君みたいな反応する女の子は好きだな」

「・・・嫌いな人もいるわ」

「え、誰のこと？ナブの誰かのこと？」

「なんでもない。ねえ、ロベルト、あなたは授業楽しい？」

「まだ始まったばかりだから、何とも言えないけど、おもしろいよ。みんなでディスカッションしたり、それぞれの国の違いとか、知らないことがわかっておもしろい」

「そう、そのディスカッションよ。私には難しくてついていけないわ。日本では、英語の授業でディスカッションなんて、ほとんどしないもの」

「じゃあ、どんな授業をするんだい」

「文法を勉強したり、単語や熟語を覚えたり、まあ、英文学も読んだりするけど」

「じゃあ、会話の時間はないの？」

「あまりないわね」

「それじゃ、せっかく勉強した英語が生かせないじゃないか。なんで使おうとしないんだ？」

「そういう教育システムなのよ」

「だったら、教育システムを変えればいい。どうして誰も変えようとしらないんだい」

「そんな簡単に換えられないわ」

「そんなことを言っていたら、いつまでたっても換えられない。誰かが始めなくちゃ。君が始めたらいい」

「そんな簡単に言わないで。私一人でそんなことできないわよ」

「一人の力は小さくても、二人三人集まっていけば、大きな力になる。民衆が歴史を動かしたことだって何度もある」

ロベルトは熱くなって話をどんどん展開させていく。

「ちょっと待って、ロベルト。私が今言ってるのは、日本の教育システムをどうこうしたい話じゃないのよ」

「ああ、ごめん。ナブの授業が難しいってこと？」

「ええ、私の英語力では、リズのクラスについていけないんじゃないかと思うの。アニカなんて流暢に英語を話すわ」

「アニカは確かにクラスでは一番うまいよ。でも、君の英語力だって、そんなに変わらないと思うよ」

「そんなことないわ。わからない単語だって多いし。でも、その度に授業を中断させるわけにいかないし。一つの単語につまづくと、そこから先の授業がわからなくなっちゃうのよ」

「ねえ、君、もしかして完璧を求めているんじゃない？」

「完璧？」

「ああ、僕らだって、わからない単語はいっぱいあるよ。そう、例えば、あの“飛んでる物”（フライング・オブジェクト）って、英語でなんていうのかわからないけど」

「え？虫（インセクト）のこと？」

「なんだ、君のほうが単語を知ってるじゃないか。えーと、“虫”（インセクト）だっけ？その言葉がわからなくても、さっき僕が言ったみたいに自分の知ってる単語を総動員して伝えればいいじゃないか」

「“飛んでる物”（フライング・オブジェクト）なんて聞くと、UFOかと思っちゃうわ」

「ははは。だったら、それに“羽が生えてる”とか“花に集まる”とか“小さい”“生き物”って言ってみたら？」

「わかるわ」

「さっきも、コージとティムがベルを相手に“ペット”の話をしていたんだ。僕が“ペット”って何だと聞いたら、ティムが“家で飼ってる動物”（ドメスティック・アニマル）のことだと教えてくれたんだ。それで、僕はわかったけど、今度はコージが“ドメスティック”って何だと聞くので、ティムが“家の”という意味だと教えてたんだ。コージが僕に“ドメスティック”の意味を知っているのに、どうして“ペット”なんて簡単な単語を知らないんだと聞いてきた。イタリア語には同じ意味で“ドメスティコ”という単語があるんだ。だから、ティムの言ったことは、僕にはすぐにわかった。逆に、日本では“ペット”という言葉は、日本語のように使われているんだってね」

「ええ、そうよ。ここでは、色々な英語の背景で学んできた人がいるから、よけいに難しいわ」

「難しいけど、楽しいよ。英語ってイギリスの言葉だけど、単にイギリス語じゃない。君はイタリア語を知らないし、僕は日本語を知らない。お互いがそれぞれの言語をマスターするには何年もかかる。でも、英語を共通言語にすれば、こうやって意思の疎通ができる。だから、僕は日本語がわからなくても、君をデートに誘える」

ロベルトは、おどけるように笑った。

「からかわないで」

亜見が言うと、ロベルトは

「からかってなんかないさ。真面目な話、一緒にグラスミアに行かないかい」

「あ、ええ、いいわ」

ロベルトに誘われ、再び自転車に乗った。亜見の自転車を見て、ロベルトが吹き出した。

「もしかして、これって子供用？」

「そうよ！笑えばいいでしょ」

「あはは、可愛いね」

「仕方ないでしょ。イギリスの自転車はサドルが高すぎて合わないんだもの」

「まあまあ、君って、怒った顔も可愛いんだね」

「またからかって！」

亜見はロベルトを置いて走り出した。ロベルトも笑いながら後を追ってきた。

グラスミアの町は、古いスレート石造りの家が立ち並ぶ、おもちゃのようにこじんまりした町だ。車も町中に乗り入れることは禁止されている。

道の両側には、郵便局、雑貨屋、ウール製品を売る洋服屋、香水店、ピーター・ラビットの商品売る店などが並んでいた。

その中に「ヒートン・クーパー・スタジオ」と書かれた店があった。ギャラリー兼画材屋のようだ。入り口から見える奥の白壁には水彩画が掛けてある。グラスミアのなだらかな山並みと静かな湖面が、柔らかなタッチで描かれている。立ち止まった亜見に

「入ってみる？」ロベルトが聞いた。

「いいえ」

亜見は店から目をそらし、自転車を押して歩き出した。ふと、高校の美術教師のことを思い出した。

「絵の基本は、デッサンだ。どんな天才画家だってデッサンをやらなかった画家はいない。土台のないところにいきなり家が建てられないように。描くことだ。描きつづけることだ」
絵を描かなくなって久しい。もう手が動かないだろう。

亜見が黙って歩いていると

「ここ、何かな」

ロベルトがそう言って立ち止まった。

緑色の柵のある白い漆喰の家の前だった。柵の中に立っている緑色の看板には、年配の婦人の顔が描かれ、「サラ・ネルソンのグラスミア・ジンジャーブレッド」と書かれていた。

「ジンジャーブレッド？」

「入ってみようよ」

ロベルトに誘われ中に入ってみると、狭い店内にガラスケースがあり、店員はみな病院の白衣のような服を着ている。ブレッドという名前からは程遠い、四角く薄いビスケットのようなお菓子を白い薄紙に包んで売っていた。

ロベルトが二つ買って、一つを亜見にくれた。割って、かけらを口に入れてみる。生姜の味が広がった。

「美味しい！」

「うん、美味しいね。さっき店員さんに聞いたんだけど、140年くらい前からやっている店だそうだよ」

「じゃあ、ワーズワースも食べたかしら」

「え？ワーズワースって・・・さっきホテルの看板にも書いてあったな」

「そうよ、ワーズワース・ホテル。ああ、そうだわ、確かグラスミアにワーズワースのお墓があるはずよ」

亜見は地図を取り出して調べた。

「今、通った道にある教会だわ」

二人が来た道を少し戻ると教会はあった。灰色の石壁の古い教会は、隔ててきた歳月を感じさせる。教会の裏庭の墓地にまわると、古い墓石がひっそりと悠久の時間を刻んでいた。草地の石版の前に立てられた墓碑銘を読んで、ロベルトが言った。

「ワーズワースの墓だ」

神妙な顔つきで胸に手をあてた後

「ところで、ワーズワースって誰だい？」

とロベルトが言った時は、さすがに垂見は絶句した。

「知らなかったの？」

「さっきホテルの看板にも書いてあったし、グラスミアにくる途中のコテージにも、同じ名前が書いてあったから、有名な人なのかなとは思ったけど。ここら辺の地主？」

「違うわ。19世紀のイギリスを代表する詩人よ。この湖水地方で暮らしながら詩を書いて、湖水詩人と呼ばれた人。あなたも『水仙』とか一つくらい詩を聞いたことない？」

「さあ、残念ながらイギリスの詩については詳しくない」

湖水地方を訪れる日本人観光客なら、ピーター・ラビットの作者ビアトリクス・ポターやワーズワースは周知のことだ。イタリア人は知らずにここへくるのだろうか。

「あなたって、おもしろい人」

半分呆れ顔で、それでも笑いながら垂見が言うと

「僕に興味を持ってくれたってこと？」

嬉しそうにロベルトが言った。

「興味ね、ええ、興味はあるわよ」

「よし、じゃ、僕がご馳走するからお茶しよう」

グラスミア湖の分流・ロゼイ川を眺めるカフェのテラス席で、二人は紅茶とスコーンを頼んだ。イギリスらしいティータイムだ。プレーンのスコーンにクロテッドクリームをぬってジャムをつけて食べると、サクサクとした食感にクリームの濃厚さとジャムの甘味が口の中に広がった。

「ロベルトはどうしてナブに来たの？やっぱり英語を勉強するため？」

「それも勿論あるけど、イタリアにはないここの景色を見に来たんだ。ワーズワースは知らないけど、ここを訪れれば誰でも、この自然の虜になるさ。柔らかな曲線を描く山並みに点在する湖。古いスレート石の家々が自然に調和している」

ロベルトは目を輝かせて話した。なんだかロベルトが少し違って見える。

「でも、今もう一つ、ここへ来た理由がわかった」

「何？」

「こうして君とお茶をするため」

ロベルトの言葉に、亜見は危うくスコーンを喉に詰めるところだった。

「よくそんな恥ずかしいセリフ言えるわね」

「そう？僕は思ったことを言うだけさ。なにも恥ずかしいことなんてない」

「あなた、彼女はいないの？」

「いるよ。でも、遠距離恋愛なんだ。彼女は今、ミラノにいるから」

「ごめんなさい、ローマとミラノの位置がわからないわ」

ロベルトはペンを出して、カフェのペーパーにイタリアの地図を書いた。

「ここが僕が住んでいるローマ。そして、ここがミラノさ。彼女はファッションの勉強をしにミラノへ行っちゃった。休暇にならないと会えない。もう2年もそんな生活さ」

「何年、付き合ってるの？」

「16歳のときからだから、4年になるな」

「え？ロベルトって今20歳なの？」

「そうだよ。なんで？」

「いえ・・・てっきり私より年上かと・・・」

「というと、アミはいくつなの？」

「女性に年齢を聞くのは失礼なんじゃない？」

「僕はそうは思わない。年にはその年の良さがあるんだから」

「そういう老けたこと言うから、年より上に思っちゃったんだわ。コージとほとんど同じ年なのね。随分、違うけど」

「ははっ、コージはいいヤツだ。僕は好きだよ。僕からすれば、僕とコージは似てる気がするんだけど」

「性格的にはそうかもしれないわね。考え方はあなたのほうが老けてる気がするけど」

「大人とってくれよ。ところで、アミは、彼氏いないの？」

「さあ、どう思う？」

「何でも秘密なんだな。わかったよ、きっと湖水地方で素敵なイタリア人を探してるってところ？」
ロベルトはそう言って自分の胸を指差した。

「ね、当たったでしょ？」

ロベルトは自信たっぷりに言った。

「からかってばかりね」

亜見は呆れ顔で言った。

「からかってなんてないよ。大真面目だよ」

「そう言って作った女友達は何人いることやら」

「そんなに多くないよ」

「やっぱりからかっている。さあ、もう行きましょう」

カフェを出て自転車に乗って走り出すと同時に、雨粒がパラパラ落ちてきた。

「早くナブに戻らなきゃ」

亜見はロベルトをせかした。雨が本降りになる前に戻ろうと思ったのだ。

ところが、しばらく走ると、山を覆っていた雲が引き始め光が差し込んできた。晴れた空から、小さな雨粒がポツポツとまだ落ちている。

「ほら、アミ、見てごらん！」

ロベルトが湖を指差した。

雲間から差し込む光が、黄金の階段となって湖に降りている。

湖面は、床に落ちた金の糸くずのような細い光の波に覆われている。

光の金の糸と湖の紫の糸が織りなす光景。

これが誰をも虜にする湖水地方の景色なのだ。

亜見はしばらくその光景に見入った。

雨に洗われた風をきりながら坂道を下り、亜見とロベルトはナブに戻った。

「じゃあ、また夕食で。雨に濡れたから風邪ひかないように」

ロベルトはそう言って部屋に戻ろうとした。

「ロベルト」

「何？」

「今日はおかげで楽しかったわ。・・・それから年齢のことだけど、私は23歳よ」

「そう。じゃあ、もうひとつの質問のほうは？」

ロベルトが悪戯っぽく笑う。

「彼氏のことだったら、想像にまかせるわ」

亜見はそう言って部屋に入った。

ナブでの生活も二週間が過ぎた。相変わらず、アニカは亜見を避けているし、授業についていくもの難しい。だが、それも次第に慣れてくるものだ。ロベルトとコージは、アンブルサイドのバレーボールチームに入って練習に参加している。アランチャはソニアが来たおかげで仕事を分担しながらやっている。アドルフはナブの誰とも一線を画して、一人でいることを好んでいるようだった。

亜見は、授業の後、一人でナブの周辺を散策した。湖畔の牧草地は私有地で、柵で仕切られている。しかし、柵は誰でも自由に通り抜けられるようになっている。そこに続く小道は「パブリック・フットパス」と呼ばれ、誰でも通ることができる。ただし、羊が逃げないように、きちんと柵を閉めさえすれば。

草地では、薄茶色に汚れた毛の羊たちが草をはんでいる。ここの羊は、ハードウィック種という種類の羊だ。ハードウィックとは、ナショナル・トラストの創設者ハードウィック・ローンズリーの名前からきている。ビアトリクス・ポターも愛した羊だ。

ごわごわした毛並みの羊は、想像していたような可愛いものではなかったが、湖水地方の厳しい冬の寒さに耐えられるように、こういう毛並みになっているのかもしれない。

亜見は、アンブルサイドに向かうフットパスを横道にそれ、ライダル湖の東岸に佇んだ。湖に向かって斜めに幹を伸ばしている太い木に腰掛け、景色を眺めた。

常緑の木々と若葉に萌え出ずる木々に囲まれた湖。

風がなく湖面が凪いでいる。

周囲を囲む山々が鏡のような湖面に映し出され、どちらが真実の世界かわからなくなる。

自分が立っている世界が真実なのか、それとも足元の世界が真実の世界で、自分は鏡に映された幻影にすぎないのか。幻影であったほうがいい。この世のものは全て、誰かの思考が作り出した幻であったほうがいい。

思考を浮遊させながら、ふと見ると、草地の間に人影が見えた。岩に腰を下ろし湖のほうを眺めているようだ。

よく見るとレオの後姿だった。

近づく亜見の足音に気づいてレオが振り返った。

「絵を描いていたんですね。ごめんなさい。邪魔をしてしまいました」

「ああ、見られてしまったね」

レオは、ライダルの東岸から見渡す湖と山を淡い水彩で描いていた。

「素敵な絵ですね」

「ありがとう。素人の絵だけどね」

「いいえ、うらやましいです。そんなふうに描けるなんて。柔らかな色合い・・・」

「湖の水で絵の具を溶かしたからかな。ここの自然の一部が絵に入り込んだのかもしれない」

「私には、こんな絵は描けないわ・・・」

亜見がふと漏らした言葉をレオは聞きのがさなかった。

「君も絵を描くのかい？」

「あ、いえ、今は描いてません」

「今は、というと、以前は描いていた？」

「・・・ええ、まあ、ほんの少し」

「どうしてやめてしまったのかな」

レオは亜見に質問するというより、つぶやくように言うと、絵筆をバケツの水に浸した。

亜見の脳裏に幼い頃の記憶が蘇る。

両親が離婚した後、亜見は母親と一緒に祖母の家へ移った。母親は亜見を祖母に預け、働きに行くようになった。厳格な祖母は、亜見に厳しく接した。祖母は、亜見を近所の小さな公園に連れて行くと、亜見を残して帰っていった。

「私は、家事で忙しいの。あなたの服を洗濯したり、あなたの食事を作ったりしなくちゃならないのよ」

祖母はそう言っていた。

子供の少ない都心の公園で、亜見は一人で遊んだ。木ぎれを拾っては地面に絵を描いた。お父さんがいて、お母さんがいて、真ん中に自分がある。今日はお弁当を持ってピクニックに行く。山がいいかな？それとも海？想像の世界は広がっていく。現実にはありえない想像の中だけの世界。絵を描いているときだけは現実を忘れられる。

ふと我に帰ると、祖母が厳しい顔で迎えにきている。夕日が亜見を現実にひきもどす。家に帰っても話す相手はいない。祖母は淡々と家事をこなしたが、亜見の話を聞く余裕はなかったのだ。やがて母親に恋人ができた。夜遅く帰る母親を待ちながら絵を描いていた。画用紙がなくなっても、まだ描き足りない。白い壁いっぱいクレヨンで絵を描いた。そして、祖母に見つかり、ひどく怒られた。

「これだから野蛮人の子供は、厳しく育てないとだめなのよ」

そう言って、亜見からクレヨンを取り上げた。

ーヤバンジンノ コドモハ キビシク ソダテナイト ダメナノヨー

それからは、祖母に隠れて絵を描いた。とにかく描いていた。描こうと思わなくても、手が自然に白い紙をなぞっている。何を描こう。どう描こう。そんなことを考える必要もなかった。ただ自分の中の世界を紙になぞるだけだった。自分が自分でいられる場所。誰も踏み込めない世界。それが絵を描くこと。

だが、いつの頃からか、亜見は自分の描く絵が嫌いになった。上手く描けない、才能がない、という理由だけではなかった。もっと深い何かが絵に表れている。

絵を描くたびに、どんどん自分の絵が嫌いになる。描いては破り、描いては破った。こんな絵ならもう描きたくない。もう描けない。二度と絵は描くまい。

ー「絵は、もうやめたんです」ー

美術教師にそう伝えた。

「絵では食べていけないもの」

亜見の言葉に、レオは突然笑い出した。

「はっはっは、厳しいことを言われてしまった」

「あ、いえ、違うんです。あなたのことじゃなく、私のことを言っただけで・・・」

「君の言うとおりでよ。僕はそれで諦めた」

「え？」

「僕は天才じゃない。絵で食べていく才能なんてない。若い頃の僕は、それで画家になる夢を諦めて、美術の教師になった。まあ、それも5年前に定年退職して、こうして絵を描いている。人に絵の描き方を教えるより性に合ってるみたいだ。僕は、画家じゃないが絵描きとして生きたいんだ」

「画家と絵描き？」

亜見がつぶやいた言葉に、レオはちらと亜見を見た。

「君はゴッホを知っているだろう？」

亜見は頷いた。

「もし、描いた絵で生計をたてていけるのが画家だとするなら、彼は画家ではなかった。少なくとも、彼が活着している間は。でも、彼は確かに絵描きだった。生前は彼の絵に見向きもしなかった人々が、その死後、こぞって高い値をつけて絵を買いあさっている。おかしいものだ」

「ええ、日本でも、数年前、ゴッホの絵がオークションで、50数億円で落札されて、美術館に飾られているわ。“ひまわり”の連作の一枚よ。本当はオランダにあるべきものなのに、日本がお金にものをいわせて買い付けたことを申し訳なく思うわ」

「それは、どこの国でもやっていることさ。オランダにも日本の浮世絵がある。僕が残念に思うのは、その中に、芸術的真価をわかっていない人もいるということだ。彼らが見たいのは、絵そのものではなく画家のサインさ。肩書きに値をつけている。でも、芸術は貨幣価値で測れるものではない。その時代にもてはやされることでもない」

レオの言葉に亜見は

「では何のために絵を描くの？」

と聞いた。レオの言う意味は亜見にもわかる。だが、その答えが欲しかったのだ。

亜見が探し続けた答えを。

レオは一呼吸置いて言った。

「絵描きとしての生を全うするため、ただそれだけさ・・・」

突然、亜見の心に言いしれない感情が沸きあがり、細波となって押し寄せてきた。

水鳥が、つと湖面に舞い降り、鏡のような水面が細波立った。

水仙の季節が終わり、日差しも少しづつ暖かくなってきた。授業の後、庭に出るとティムが庭仕事をしていた。

「チューリップがもうじき咲くわね」

亜見が声をかけると

「ああ、湖水地方は、これからが春本番だ。沢山、花が咲き始めるよ」

そう言ってから、ティムは思いついたように

「そうだ、君をミステリーツアーに招待しよう」

と言った。

「ミステリーツアー？」

ティムはいたずらっぽく笑うとポケットから紙を取り出した。手書きの地図のようだ。

「ここが、ナブ・コテージ。アンプルサイド方向に歩いていくと、左手に坂道がある。そこを上って教会を過ぎたところにライダル・マウントという館がある。中に入って庭を歩いていくと、高台にベンチがある。そこに宝物があるんだ」

「宝物？」

「ああ。でも、その宝物は誰にも盗めない。だから、宝物を拝むためには、そこへ行かなくちゃならないんだ」

ティムの話に、キツネにつままれたように思いながら、亜見は教えられた道を歩いていった。

途中、目が覚めるような濃いピンクの花を満開に咲かせた木があった。

遠いイギリスの地にあって郷愁を誘う花一株だ。

桜といっても、ヨーロッパで見られる桜は、日本に多い染井吉野ではない。丈夫でどこの土地にも馴染みやすい「関山」という種類の八重桜だ。

鮮やかなピンクのぽってりした花を枝いっぱいにつけている。

しばらく八重の花に見入った後、坂道を登った。

ティムの言った古い教会を過ぎると石壁に「ライダル・マウント」という看板が見えた。正確には「ライダル・マウントー1813年～1850年ーウィリアム・ワーズワースの家」と書かれていた。ワーズワースの家といえば、グラスミア近くの「ダブ・コテージ」が有名だが、ナブの近くにもワーズワースが住んだ家があったのだ。しかも、1850年といえば、ワーズワースの亡くなった年。終の住処となったところということだ。

入り口脇には土産物屋らしき建物があり、中に入ると白髪の上品な老婦人が二人、カウンターにいた。

「チケットをお願いします」

「はい、どうぞ。よければパンフレットもいかが」

老婦人に薦められて、パンフレットも買うことにした。すると、一人の老婦人がパンフレットを開き、ワーズワースの家系図ののっているページをめくった。家系図の下のほうにしるしをつけると「メアリー・ワーズワース」と名前を書き込んでから

「私はここ。ワーズワースの子孫のメアリーよ」

と微笑んだ。

期せずして、ワーズワースの子孫と出会うこととなった。ここライダル・マウントは、その子孫が管理しているのだった。

「ちょうど、今日からフラワー・フェスティバルが始まったのよ。ゆっくり見て行ってちょうだい」

老婦人は、にこやかに亜見を見送った。

入り口から道沿いに歩くとすぐに白い二階建ての家が見えた。緑の蔦に覆われた漆喰のポーチには、「スラワー・フェスティバル」と書かれた看板と花が飾られていた。

亜見が入ろうとすると、中から見知った顔の老夫婦が出てきた。

「レオ、マグダ！」

「やあ、アミ。君もフラワー・フェスティバルに来たんだね」

「あ、いえ、知らずに来たの。ティムに手書きの地図を示されて・・・」

「ああ、きっとそれは僕らにここを教えてくれた地図だ。ティムにライダル・マウントの行き方を聞いたんだ」

ようやくミステリーツアーの地図の出所がわかった。

「館内を見たら、是非、庭も歩いてみるといいよ」

「ええ、そうするわ」

「じゃあ、また後で」

レオとマグダは手を振って歩いていった。

館内はワーズワースが住んでいた当時の様子が再現され、1800年代の家具や調度品が置かれ、白やピンクや青の花々で飾られていた。広々とした書斎には暖炉があり、その上の白壁には、ワーズワースの肖像画が金の額縁に飾られている。サンルーム風の出窓からは広大な庭が望める。

館をひととおり見た後、庭に出た。館が小高い丘に建っているのだから、その広大な庭は傾斜面になって、上ったり下ったりしている。庭の途中にスレート石を積み上げて作った東屋があった。ワーズワースが散歩の途中に休憩し、詩作をした場所とプレートに書かれている。東屋のベンチに腰掛けると、遠くから小鳥のさえずりが響いてきた。

再び、斜面を下っていくと小さな滝が流れている。下ってから、また上る。

上りきった高台の石のテラスにはベンチが置かれてあった。

ティムが言っていたのはこのことだろうか。ここに宝物があると言ったが、ベンチの下にも、そのまわりにも何も置かれてはいない。

ティムにからかわれただけだと思い、ベンチに腰掛けた。

見晴台から望む眼下には、ライダルの湖水が無数のダイヤモンド粒のように輝き、周囲の山々がエメラルドとアメシスト色に萌えている。ベンチの周りには、ピンクダイヤやルビー色の花々が咲き乱れ、蝶が集まっている。まさに地上の楽園だ。

これが、ティムが言っていた誰にも盗めない宝物なのか。

景色に心を同化させていたとき

「チャオ、アミ！」

突然、名前を呼ばれた。

「ロベルト！」

「君とはよく会うね。二人は運命で結び付けられているのかもしれない」

「またからかって。どうせレオとマグダに聞いてきたんでしょ」

「惜しい！ティムに渡された地図でここにきた」

ロベルトは、ティムが亜見に見せた地図を持っていた。

「じゃあ、あなたもミステリーツアーに？」

「ああ、ティムに言われた」

「まったくティムったら」

「で、君は宝物を発見した？」

「あなたもここに座ってみればわかるわ」

ロベルトは亜見の隣に腰掛け、視線を遠くに投げた。

しばらくものも言わず、きらめく宝石の輝きを眺めつづけた。

カシャッ

突然の音に亜見が振り向くと、ロベルトがカメラを手に写真を撮っていた。

マニュアル式の古いカメラだ。かなり使い込んでいるらしい。本体に刻まれたライカのロゴが消えかかっている。ロベルトは、慎重にピントを合わせて何枚も撮っていった。

「写真が好きなのね」

亜見の言葉も、夢中に撮影を続けるロベルトの耳には届かないらしい。

しばらくそっとしておくことにした。

近景の庭、遠景の山々を角度を変えて撮っていく。

やっとロベルトがカメラをおろしたところで、亜見がもう一度さっきの言葉をかける。

「え？ああ・・・」

亜見の言葉など、うわの空といった様子だったが、少しするとようやく亜見の存在を思い出したように

「そう、以前、君が何故ナブに来たか聞いただろ？これがその理由さ」

「写真を撮るために？」

「ああ、実はローマの美術学校で写真のコースに通っているんだ。いろいろな場所で撮影するけど、湖水地方の景色を一度撮ってみたくて来たんだ。叔父さんがフリーのカメラマンで、湖水地方の写真集を出したんだ。それを見てからずっと、ここにくるのが夢だった。叔父さんみたいになれたらいいけど、腕はまだまだだって言われる」

「景色の写真を撮るの？」

「今はまだ模索段階だから、いろいろなものを撮るよ。心に響くものなら何でも。景色、動物、花、子供、老人、ああ、ヌードもいいね」

「本当の目的は、それなんじゃないの？」

亜見が呆れて言った。

「わかった？君、モデルになる気ない？」

「ふざけないで」

ロベルトが笑った。やっといつものロベルトらしさが戻ってきた。

庭をめぐり、ライダル・マウントを出て、ナブへ戻る途中、湖畔の草地に、ロベルトが何かを見つけた。

「アミ、見てご覧よ！」

草地には、あの薄汚れたごわごわした毛の羊が草を食んでいた。

よく見るとその羊の足元に、生まれたての白い毛の子羊が弱々しい足を踏ん張りながら母羊の乳を吸っている。母羊の毛並みと違って、ほわほわと柔らかそうな毛並みだ。

「かわいい。初めて見たわ。生まれたての子羊なんて」

ロベルトは親子羊にカメラを向けた。羊は臆病な動物だが、一定の距離を保っていれば逃げることはない。

「子羊がメーメー鳴いている。五月はもうすぐそこだー」

「え？なんて言った？」

ファインダーをのぞきながら、ロベルトが訊いた。

「ハードウィック・ローンズリーの詩よ。マグダが詩集を貸してくれたの。そこにのっていた詩の一節」

「君は詩が好きだね。でも、アミ、詩は言葉で表すだけじゃないと思うよ。他の方法でも詩的な表現はできるってね。」

「例えば、写真で？」

「そう。写真はただ景色をありのまま写し取ってるわけじゃないんだ。ファインダーを通すことは、カメラのファインダーを通してただじゃない。撮る側の内面のファインダーを通して撮られるものなんだ。だから、同じ景色でも、撮る人によって違った雰囲気の写真になる。絵みたいなものだよ」

「絵みたい・・・」

「ま、英語では両方ともピクチャーだけどね。詩を詠むか、写真を撮るか、絵を描くか、どれをとるかは、人によって表現方法が違うだけさ」

写真の話になると、ロベルトの瞳は生き生きしてくる。ライダルのきらめく湖のように。

スパイクニッセから車で30分ほど北へ行くと、デルフトに着く。デルフトは古い街並を残した小さな町だ。

車を運河沿いに止め、並木道を歩く。運河に枝葉を映す街路樹が晴れた空に映えている。道沿いのレンガ造りの建物は、どれも間口の狭く細長い3、4階建てだ。上部の切妻破風は釣鐘型の優美な曲線を描いている。窓辺には赤やピンクのゼラニウムの花。ヨーロッパでは虫除けとして窓辺に飾られる花だ。

「デルフトの名前は、運河を意味する“デルフ”というオランダ語からきているのよ。12世紀に水路網の一部としてここに運河が掘られたからなの」

マグダが歩きながら言った。

「デルフトというと、デルフト焼きとフェルメールをイメージするわ。ここはフェルメールの住んだ町よね」

「そう。そして、レオとマグダもね」

マグダはそう言って、懐かしそうに目を細めた。

「え？」

「デルフトは、私たちが出会った町なの」

「そうだったの。知らなかったわ。それなら、なおのことこの町に興味がひかれるわ」

運河にかかる小さなアーチ型の石橋を渡ると、デルフトの中心部であるマルクト広場に出る。広場を中心に北東端に新教会、南西端に市庁舎がある。広場のまわりには、カフェや土産物屋、そして当然のことながら陶器店が軒を連ねている。

広場の一角のショーウィンドウには、藍色の繊細な絵柄の壺が白い棚に飾られている。店の入り口には「ロイヤル・デルフト・ウェア」と書かれていた。

「デルフト焼きには二種類あって、ひとつは、普通のデルフト・ブルー、そして、もうひとつは、ロイヤル・デルフト・ブルーという高価なものよ」

「その違いはどうやって見分けるの？」

「残念ながら、私にはよく見分けがつかないわ。でも、ロイヤル・デルフトの看板を出しているお店には、高価なデルフト焼きが置いてあるわ。ロイヤル・デルフトは、この町にある王立工場で作られているのよ」

亜見は、マグダと店内に入った。中では、職人が白い陶器に絵付けをしていた。下絵もなく、陶器にじかに繊細な絵付けをしていく様に思わず見とれる。職人は、伝統的なオランダの風車を描いている。

亜見の様子に気づいた店主らしき男性が近づいてきた。マグダが店主と一言二言、言葉をかわし、亜見が日本から来たことを告げた。

「絵付けに興味があるみたいだね」

店主は、英語で亜見に話しかけた。

「ええ。日本の焼き物にも藍色の絵付けがあるし。でも、絵柄が違くと雰囲気もだいぶ違うわ」

「こっちに来てごらん」

店主に示されたほうへ行くと、白地に赤で二羽の鳳凰と牡丹の花が描かれている東洋的な花鳥文様の皿が飾られていた。

「デルフト焼きというと、デルフト・ブルーが多いが、こういうデルフト・レッドもある。デルフト焼きは、古くから日本と関わっている陶器だよ。17世紀には、デルフスハーフェンの港に、東インド会社の支部があったんだ。東インド会社って知ってるかい？」

「ええ」

亜見は、湖水地方でのアニカの話を出した。あの時、アニカの話を知っていれば、日本に帰った後、そのことに関する書物を読むこともなかっただろう。

店主は、亜見の言葉に、よろしいというようにうなずくと

「そこから世界の品々が輸入され、中国から大量に陶器が入ってきた。この白地に藍色で絵付けされた陶器に人々は魅了されてしまった。当時は、この町の四分の一の人が製陶業に携わっていたといわれるほどだよ。中国の陶器だけでなく、日本の“イマリ”焼きの影響も受けているんだ」
日本からはるか遠く離れた地に、日本の伝統工芸が伝わり、そこに根付き、数百年の時を隔てて、今、亜見の目の前にある。

一僕らが何人であろうと・・・感じることは人種には関係ないだろう。ボーダレスだ一

ふとレオの言葉が蘇る。イギリスの湖水地方で出会ったレオ。今、レオの故郷であるこの国へやってきた。レオの住んだ町を歩き、レオの見た景色を見るために。

「本当に鮮やかな青だけど、この色は何からできているの？」

「ウルトラマリンの粉末顔料をもとにしているんだよ」

店主は、白い小皿に入っている鮮やかな青の顔料を見せた。

「ウルトラマリンはゴッホの好んだ青ね」

マグダに向かって言うと

「ええ、そうよ」と微笑んだ。

店主の話では、絵付けされた陶器に錫の釉薬をかけて焼き上げるということだ。しばらく職人の絵付け作業を見てから、店主にお礼を言って店を出た。

広場を見守るように立つ新教会の前になると、ゴシック様式の細く尖った尖塔が、空に突き刺さるようにそびえている。

「この教会の建立の由来は、14世紀にさかのぼるわ」

「新教会という名前の割に古いのね」

亜見の言葉にマグダも笑いながら

「ええ、そうね。でも、町にはもうひとつ、旧教会という13世紀に建てられた教会があるからなのよ。アウデデルフトという旧市街にあるわ」

新教会の中へ入ると、石造りのひんやりした床と壁が重々しい空気を醸し出している。

「この教会の建立の由来って？」

「ええ。14世紀のある冬の日、男がこの広場で物乞いをしていたの。そこへヤン・コルという人物がやってきて、彼に食べ物を与えると、物乞いはこう言ったの。「ごらんなさい。天国が開かれています」と。二人が空を見上げると、聖母マリアを奉っている黄金の教会が見えたの。そして、輝く光が広場の一点を示したので、ヤン・コルは、そこに教会を建てるべきだと確信したの。でも、これはあくまでも伝説よ。その後、一世紀以上かかって建てられたのよ」

「一世紀以上も。気の長い話だわ」

亜見は溜息をついて上を見上げた。木造の交差式天井が、頭上はるか高くを覆っている。壁面や柱は石造りでありながら、天井だけが木造という変わった造りだ。

「どうして天井だけ、木造なのかしら」

「それは、ここの土地が低湿地帯で、地盤が沈下しやすかったからよ。教会を建てる時基礎となる床や柱は石造りにしたけど、天井は重い素材で造らないようにしたのよ」

いかにもオランダらしい理由だ。干拓地である土地に負荷がかからないよう考えられているのだ。

マグダと教会の長い身廊を歩く。西洋の教会の造りは、十字架を模って設計される。十字架の縦と横の交わる点を境に奥を内陣、入り口に近いほうを外陣とし、横に張り出した廊を翼廊と呼ぶ。

「この教会が建てられるとき、柱の数に聖書的な意味が加えられたの。外陣を支える柱は両側に8本ずつ、計16本あるけれど、これは旧約聖書の16の預言書を現しているの」
身廊の柱を数えながら歩くと、翼廊のある交差点までくる。

「内陣を支える12本の柱は、なにを意味するかわかる？」

マグダは、内陣の柱を指差した。

「12といえば、十二使徒？」

「ええ、その通りよ。そして、中央の4本の柱は、新約聖書の四つの福音書を現しているの」

「教会建築って、ただの建築物という役割だけじゃなかったのね。その内部にまで聖書のモチーフがシンボライズされているのね」

「そうね。聖書のモチーフを形にすることで、無形のものが有形化されて、よりリアルに人々の心に届いたんだと思うわ。絵画も、宗教画から始まっているし。ここにあるステンドグラスも、キリストの誕生やモーセの十戒を視覚的に現しているわ」

ステンドグラスは、熱く溶かしたガラスに酸化銅や二酸化銅などを混ぜて色を作る。

窓枠にはめ込まれた、鮮やかな青や赤や黄、紫、緑、オレンジと数えきれない数のガラスのかけらが一枚の絵を生み出している。

マグダの言う通り、ステンドグラスはただの装飾ではなく、宗教画と同じように、その昔、文盲だった人々のために、聖書の物語を表現している。光によって、微妙に輝きを変えるステンドグラス絵画は、会堂内に高く響き渡るパイプオルガンの音色と調和して、荘厳な空気を醸し出していた。

「数百年たっても色褪せずに存続するって、すごいことよね」

「でも、残念ながら、今あるステンドグラスは、オリジナルのものではないのよ」

「そうなの？」

「1654年に、デルフトにあった火薬庫が爆発して、全部吹き飛んでしまったのよ。爆発はすさまじいものだったらしく、デルフトの北東部四分の一が消えてしまったのよ。その様子は、デルフトの画家ファン・デル・プールの絵に描かれていて、当時の爆発の凄さが読みとれるわ。今あるステンドグラスは、今世紀前半に嵌められたものなの。ステンドグラスの絵の中には、聖書から題材をとったものだけではなく、オランダを独立に導いたオラニエ公ウィレム一世のステンドグラスもあるわ」

「オラニエ公・・・ああ、イギリスの国王にもなったオランダの王様ね。英語では、オレンジ公ウィリアムと言っていた気がするけど」

「そうよ、オラニエはオレンジの意味のオランダ語よ。オレンジの領土を持っていたからそう呼ばれているの。だから、オレンジ色は今でも、オランダのシンボルカラーなのよ」

亜見は、ふとナブのワーカーだったアランチャのことを思い出した。そして、アランチャがくれた明るい太陽のようなオレンジのことを。

「ウィレム一世は、城壁のあるデルフトに居を構えることにしたのだけど、結局暗殺されてしまったわ。ウィレム一世の住居で、暗殺場所にもなったプリンセンホフは、今は博物館になっていて、そこにファン・デル・プールの絵もあるのよ。あなたを連れて行きたかったんだけど、ち

ようど今日は休館日だから残念だったわ。プリンセンホフから運河をはさんだ向かいに、旧教会があるんだけど、今は修復工事中で入れないから、旧市街のほうへは、今日は行かないことにしましょう」

新教会の地下墓地には、ウィレム一世とその一族の眠っている。会堂内に置いてある訪問者用ノートに名前を記して、亜見たちは外に出た。

改めて、その高い鐘楼を見上げる。

「まるで町のランドマークね」

「ええ、デルフトだけでなく、オランダでも三番目に高い塔なのよ」

教会を後にして、お茶をするために、広場のカフェのテラス席に座った。マグダのお薦めは、ポッファチースというおやつだ。小さなパンケーキが、いくつも皿にのったものだった。生クリームののったポッファチースに、好んでチョコレートソースなどをかけて食べる。フォークでポッファチースを切り分けながら、人々の行き交う石畳の広場を眺めた。マグダは、亜見の向かいの席で懐かしそうに目を細めながら

「このお店はね、レオのお父さんが晩年働いていたお店なの」
ぽつりと言った。

「そうだったの。レオのお父さんが・・・」
レオの父親が働いていた店が、今もこうして存続している。わずかな糸がレオと亜見を結びつけている。

「レオとはどうやって出会ったの？」
「ダンススクールだよ。私がまだ16の頃。若かったわ」

そう言うと、マグダは少女のように頬を赤らめた。

「結婚はいつ？」
「私が20才、レオは25才だったわ。もう36年も昔の話よ。あそこの市庁舎で結婚したの」
マグダは、新教会の反対端の市庁舎を指差した。

「教会ではなくて？」
「教会でも結婚式をしたわ。でも、オランダでは、教会だけでなく、市庁舎でも手続き上の結婚式を挙げないと、正式な婚姻と認められないのよ」
「二人の結婚した部屋を見てみたいわ。市庁舎の中には入れないのかしら」
「たぶん入れると思うわ」

二人はカフェを出て、市庁舎へ向かった。ルネサンス様式の重厚な石造りの建物だ。鉛の棧の入ったガラス窓の上半分ははめ殺しで、下半分は赤い木製の鎧戸がついていて、建物全体の微妙なアクセントになっている。玄関ホール壁には、17世紀のデルフト市街の古地図が掛けられている。

「町の作りは、この頃とほとんど変わっていないわ」
亜見は、ふと湖水地方のナブ・コテージを思い出した。そして、あの景色を思い出した。湖水地方の自然。デルフトの町並。数百年の時を隔てても変わらないものが確かにある。

市庁舎の二階に上がると、現オランダ女王の大きな肖像画が、ホール正面に堂々と飾られている。白黒の格子模様の大大理石の床は、フェルメールの絵を髣髴とさせる。壁に並ぶ重厚な木製の扉が、それぞれの部屋の所在を示しているが、どの部屋にも鍵がかかっていた。

「残念だけど、中には入れなさそうね」
マグダの言葉に仕方なく諦めることにしたが、36年前にレオとマグダが歩いた同じホールを亜見は歩いている。わずかな糸を手繰りながら、亜見はレオの軌跡をたどっているのだった。

市庁舎を出て、広場を散策した。観光地らしく、土産用の木靴が大量に店先に並べてある。赤や白、黄色と色とりどりの木靴に絵柄がペイントされている。サイズも子供用のものから、日本にはないような大きな大人用のものまで取り揃えてある。

「色々な色の木靴があるけれど、この黄色いのが、オランダの伝統的な色なのよ」

今は、観光客用にカラフルになっているということだろう。

しかし、木靴は、昔、農家の人々にとっては実用品だった。冬の寒さから足を守り、ぬかるんだ泥道でも歩け、通気性もある、多少の履き心地の悪さを我慢しさえすれば、便利な靴だったのだ。

その隣の店先には、何枚か絵のポスターが並べられていた。モダンな絵が多い中、一枚だけ風景画があり、亜見はその印象的な雲に惹かれて手に取った。

画面下四分の一は、起伏のない平らな田園風景が広がっているが、その上部は空と雲が覆っている。

「ライスダールの絵ね」

マグダの言葉に、絵の右下を見ると確かに画家のサインが読めた。

「フェルメールと同じ時代に生きた画家よ」

「雲が印象的ね」

「ええ、ライスダールは風景画が有名だわ」

広場の一角にくと、一軒のデルフト焼きの店を指して、マグダが

「フェルメールの家よ」と言った。

店の建物上部の壁にフェルメールの名が刻まれたプレートが貼られている。

「といっても、フェルメールが子供の頃暮らした家で、結婚後、絵を創作した家はもう残っていないの。彼は、デルフトで生まれ育って、一生をこの町で過ごした画家。でも、死後は世間から忘れ去られてしまうの。彼の絵がようやく認められたのは、没後200年たってからだったわ」
人の命は一世紀にも満たない。だが、その人が残したものは死して尚、数百年の時を存続しうる。成功した画家が忘れ去られ、無名の画家の作品に光があたることもあるだろう。だが、画家が絵を描くのはそのためだろうか。

湖水地方で聞いたレオの言葉が、亜見の心に蘇る。

—「絵描きとしての生をまっとうするため、ただそれだけさ・・・」—

再び、トウインゴに乗り、スヒー川を渡り対岸の道を川沿いに走る。マグダは、二対の門の見える場所で車を止めた。まるで、とんがり帽子をかぶった二人の小人が並んでいるようだ。車から降り対岸の門を眺める。スヒー川をはさんだその門の向こうには、ランドマーク的存在のあの新教会の鐘楼が望める。

先ほどまで晴れていた空に、厚い雲がかかっている。

だが、眺めている数分のうちに雲の合間から光が差し込み、町の中心部を照らしはじめた。一番高い新教会が光に照らされ、黄金色に輝いた。あたかも、かつてヤン・コルが目にした黄金の教会のように。

五月も一週間が過ぎ、ナブの庭も赤や白のチューリップに彩られている。授業の後、リズが亜見に声をかけた。

「アミ、ソニアが車でヒル・トップまで連れて行ってくれることになったわ」

「本当に？ありがとう」

ビアトリクス・ポターの住んだヒル・トップ農場に行くことになった。湖水地方に来たら必ず訪れようと思っていたところだ。

当初は、一人でバスに乗ってウィングミアまで行き、そこから船で反対岸に渡って、ニア・ソーリー村にあるヒル・トップまで行くつもりだった。

その計画をリズに話すと「他にも、行きたい人がいるかもしれないから、聞いてみましょう。人数がそろえば、車で行けるかもしれないわ」と言った。

リズはヒル・トップツアーが決まった報告をした後

「どうして日本人はそんなにピーター・ラビットが好きなの？ただの子供の絵本でしょ」

と呆れ顔で聞いた。

「ポターの水彩画は、繊細で色合いも淡くて美しいからよ」

「でも、日本の絵とは全然違うでしょ」

リズは、湖水地方を訪れる日本人観光客が、ピーター・ラビット狂だということがどうしても理解できないようだ。

「それは、そうだけど・・・でも、日本の水彩画の色調と似ているところもあるわ」

亜見の返答に、リズはやはり解せないといった表情で首を振ると、紅茶を入れにキッチンへ向かった。

午後になり、ソニアの運転する車にレオとマグダと一緒に同乗した。アンブルサイドを抜け、ウィングミアの西岸を走る。

エスウェイト湖を右手に見ながら走ると、静かな佇まいの村に入る。牧草地の間に、農家が点在し、羊がのんびりと草を食んでいる。湖水地方では、どこでも見られるめずらしくない景色だが、小さな村ゆえ、静かな時の流れを感じる。

やがて「ヒル・トップ」と書かれた小さな看板が見えた。あまりに目立たない看板なので、見過ごしてしまいそうだ。

車を駐車場に止め、石段をのぼり花壇の間の小道を行くと、灰色の壁の質素な家が建っていた。他の農家と別段変わったところのない造りだが、その三角屋根のついた石版の入り口は、『こねこのトム』の絵本そのままの佇まいだ。入り口の脇壁には、藤の枝がつたい、つるバラが這っている。

家の中は、ナショナル・トラストによってポターが暮らした当時のままに保存されている。しっかりと落ち着いた茶色の木壁に囲まれた部屋には、焦げ茶色の木のテーブルや布張りの椅子が置かれていた。白い枠飾りのある暖炉の上には、調度品が置かれている。

キッチンの鉄製のオーブンや飾り絵皿の並べられているカップボードは、『ねずみとねこ』の絵本を思い起こさせる。

二階は、ポターの寝室や書斎があり、風景画やドールハウスが飾られ、そこで絵や手紙を書いたであろうライティングビューローが置かれていた。

全てが当時のままで、この昔ながらの小さな村に溶け込んで、時が止まったように感じられる。昔も今も、そしてこれから先も、ここは変わらないだろう。

ひととおり見学を終えて、脇のショップに入ると、所狭しとピーター・タビットグッズが並んでいる。日本語版の絵本が堂々と並んでいるところからも、日本人観光客の多さが伺える。気づくと、ショップにはソニアとマグダの姿しかない。

「レオは？」

マグダに訊ねると

「外のベンチにいるわ」と言った。

レオは、入り口の脇にあるベンチに座って、パイプをふかしていた。煙がゆるゆると昇っては消えてゆく。

「もう見終わったのかい」

亜見に気づいて、レオが言った。

「ええ。あまりにも、ポターが暮らしたそのままに保存されているから、ふっとどこからか、庭仕事を終えたポターが姿を現しそうな気がするわ」

「かもしれないね。彼女は亡くなってしまったが、彼女の想いは、まだここに生きているかもしれない」

「ええ」

「アミは知ってるかな。彼女が、絵本作家以上に、ナチュラリストとしての仕事をしたことを」

「絵本の印税で土地を購入して、ナショナル・トラストに寄付したことは知ってるわ」

「そう。でも、彼女は絵本作家になる前は、キノコの研究に熱心だったんだよ」

「キノコ？」

「ああ。自然の不思議に魅せられたんだらうね。彼女の描いたキノコの絵だ」

レオは、ショップで買ったポターのスケッチ集を見せてくれた。何種類ものキノコが、植物図鑑の絵のように精密に描かれていた。

「キノコ学者への夢は、女性の学者を認めない当時の世相によって断念させられてしまったが、絵本のほうで成功したんだね」

「ポターの描く絵はなぜか惹きつけられるわ。自然の観察眼が鋭かったのね」

「そう。でも、それ以上に、ここの自然を深く愛していたんだらうね。彼女にとって、自然を愛することは、単に自然を愛でることだけではない。自らの手で守りつづけていくことだったんだらう」

レオの言う通り、ポターは、少女の頃に出会った牧師ハードウィック・ローンズリーの影響を強く受けた。ローンズリーは思想家ジョン・ラスキンや社会活動家オクタビア・ヒル、弁護士ロバート・ハンターとともにナショナル・トラストを創設した。産業化による自然破壊の進んだ19世紀後半に、自然を自らの手で守りつづけていくことを実践した人々だ。彼らのおかげで、数百年経っても変わらないこの景色を見ることができるのだ。

湖水地方を歩いていると、どこにもゴミ箱は見当たらない。だが、どこにもチリーつ落ちてい

ない。

日本にいた頃、都心から一時間ほどのところにある山に登ったことを亜見は思い出した。山道や山頂にはゴミ箱が置かれ、入りきらないゴミがゴミ箱から溢れ出していた。また、ゴミ箱にすら投げ入れられなかったゴミが、木々の間に落ち、川の水止まりに溜まっていた。逆に、本当に景観を守ろうとすると、その地区にロープなどを張り、立ち入り禁止区域にしてしまう。

ここでは、立ち入り禁止の場所はひとつもない。私有地ですら柵を開け閉めするだけで、自由に出入りすることができる。それでいて、ここの自然は昔も今も変わらない。

亜見は、ポターが手入れした庭を眺めた。咲きはじめて淡いピンクのオールドローズが、五月の陽射しに輝いていた。

授業の後、亜見は一人で、ナブの裏手の丘に登ろうと庭を横切っていた。ちょうどアニカが、自転車小屋へ行くところだったが、いつものようにアニカは、亜見を無視して歩き去った。

「アミ！」

振り返ると、ロベルトが亜見を追って草地を登ってきた。

「どうしたの？」

「どうしたの、じゃないよ。ずっと気になってたんだけど、どうして君とアニカは、いつも別行動ばかりなんだい？せっかくのルームメイトなのに。どうしてもっとコミュニケーションしようとしなんだ。コーデを見てご覧。君より英語は上手くないけど、一生懸命話しかけてくる」

「コミュニケーションしようとしなのは、私じゃなくてアニカのほうよ」

ロベルトに自分が責められるというのは、お門違いだ。亜見は、ムツとして答えた。

「アニカが、私を避けてる。日本人が嫌いなのよ」

「アニカがそう言ったのか？」

「そんなこと、聞かなくたってわかるわ」

「それは、間違ってる。避けられているのなら、何故そうなのかを聞かなくちゃ。誤解ってこともあるだろ？一度、アニカと話し合ったほうがいい」

「余計なこと言わないで。会った最初から挨拶も返さない人に、何を誤解されるっていうの？単に白人がアジア人を差別してるだけなのよ」

亜見の言葉に、ロベルトも語気を強めた。

「白人だからアジア人を差別するっていう君の考えこそ偏見だ。僕は、人のことを肌の色で差別したりなんてしない」

「絶対に？」

「絶対に」

「なら、なおさら、差別される側の気持ちなんて、あなたにはわからないわ」

亜見は足早にロベルトから立ち去った。

ロベルトにはわからない。日本にいてさえも蔑視される人間の気持ちなど。優位に立つ人間は、いつも上からものを言おうとする。ネガティブなのは、弱い人間だからだと決めつける。

ロベルトの言っていることもわからないではない。ロベルトは、いつもまっすぐだ。そして、そのまっすぐさが、亜見には時々重くなる。光のあたる場所に咲く花は、路地裏に咲く花のことなどわかりはしないのだ。

草地に腰をおろすと、ブルーベルの花が咲いていた。釣鐘型の小さい紫の花をいくつもつけている。その先にも、ブルーベル。目で追っていくと、無数のブルーベルがひっそりと静かに咲いている。草むらにひっそりと目立たなく、それでいて、いったん目にとまると、紫色の洪水が亜見のまわりに渦を巻き、奔流のように緑の中を流れている。その流れに身を横たえ目を閉じると

、まるでミレイの『オフィーリア』の絵に同化していくようだ。

どれくらい時間が過ぎただろう。紫の奔流から身を起こし、眼下のライダル湖を眺めた。ロベルトと顔を合わせづらいが、いつまでもここに居るわけにもいかない。亜見は腰をあげると、草地をおりていった。

ナブの玄関を入ると、右手の居間から聞きなれない言葉が響いてきた。声からすると、レオとアニカの声のようだ。二人は、オランダ語で会話をしているのだろう。

ちょうど、アドルフが階段を降りてきて、居間に入っていった。レオとアニカの声がやむ。亜見が居間をのぞくと、アドルフがネストテーブルに置いてあった新聞を取り上げ、すぐに出てきた。アドルフは、いきなり亜見の肩に手を置くと

「まったくオランダ語ってのは、フガフガ言って犬みたいな言葉だな」

二人に聞こえよがしに、大声で亜見に話し掛けた。

アニカの顔色が変わった。アドルフは、アニカを見てフンと鼻で嘲るように笑うと行ってしまった。

アニカが大股で歩いてきて、亜見の鼻先でドアをバンと閉めた。

決してアドルフの言葉を肯定したわけではないが、アニカの心象がさらに悪くなったのは確かだろう。何故、事態は往々にして望まない方向に向かうのだろう。

堅く閉ざされたドアの中からは、アニカの怒ったオランダ語が聞こえる。レオは、アニカをなだめるような口調で、何かしゃべっている。

その晩、アニカは完全に亜見と口をきこうとしなかった。見えない糸が、いつも亜見に対して張られているのはわかっていたが、必要最低限の会話はしていた。しかし、その夜は違った。アドルフの一件があったから当然だろう。アドルフの言ったことに同調していないと言いたくても、アニカは聞く耳をもたないだろう。無言の拒絶が、それを物語っている。

レオは、どう思っているのだろう。アニカと同じように、亜見に腹を立ててしまったのだろうか。アドルフが居間に入る前、二人は何を話していたのだろう。同じ国の人間しかいなければ、自国語で話すのは不思議ではないが、何か他の人の聞かれたくない話題でもあったのだろうか。今となっては、何もわからないし、聞く相手もない。

アニカとの関係は仕方ないにしても、親切だったレオとの関係が悪くなるのは辛い。

レオの亜見に対する印象が悪くなれば、マグダとも友好的ではいられなくなるだろう。

こんなとき、ロベルトがいてくれれば。

そのロベルトとも、うまくいかなくなってしまった。

亜見は、ベッドの中で、解決の糸口のない思考の迷路をさまよっていた。

翌日の午後、亜見が階段を下りていくと、ゲスト用のダイニングルームから、ロベルトの話し声が聞こえた。イタリア語だ。ダイニングルームにある電話で話しているようだ。感情的な声色だった。

しばらくすると、激しく受話器を置く音が聞こえ、ロベルトが足早に出てきて、亜見にぶつかりそうになった。亜見を見て、一瞬驚愕の表情をみせたが「失礼！」と荒々しく一言謝ると、玄関を出ていった。

やはり、まだ亜見に腹を立てているようだ。

皆との関係をどう修復したらいいのかわからない。いったい何をしにイギリスまで来たのだろうか。自分の居場所は、ここでも見つからない。亜見は、根無し草のようにあてどなく彷徨うばかりだ。

亜見は、ロベルトが出ていった方向とは反対に、ゲスト用ダイニングルームを抜け、キッチンへ向かった。

キッチンでは、アーガと呼ばれる調理レンジの上で、いつものようにポットに湯がチンチンと沸いている。サーモスタットで温度を一定に保っておけるので、常に天板は暖かく、その上でいつも湯が沸いている。

亜見は、茶葉を入れたティーポットにポットから湯を注いだ。待つこと数分で、カップに紅茶を注いだ。やわらかな湯気と共に紅茶の香りがたちのぼる。香りを十分味わってから、カップに口を近づけた。茶色の液体が暖かく喉を通り、体中をめぐる。心のささくれだったところが熱い液体で溶かされていくようだ。

コンスタブルの『干草車』の絵柄がついたカップを眺め、カップを包み込むように手で覆うと、冷えた指先が温まっていく。紅茶を飲み終わると、キッチンから木戸を抜けた。

裏庭のベンチでは、広司とアランチャがタバコを吸っていた。

「ハイ、アミ」

「どうしたんだい？元気なさそうだね」

「ええ、ちょっと・・・ね」

昨日から起こったことを全て説明する気はとても起きない。亜見が黙り込んでいると、アランチャがタバコを消して立ち上がり、キッチンへ入っていった。

キッチンの戸口から「アミ！」と呼びかけると、何かを投げてよこした。

受け取ると、それはオレンジだった。

「アミ、“アランチャ”が好きでしょ」

アランチャの言葉の意味がわからずにいると

「“アランチャ”は、スペイン語でオレンジの意味なのよ」と言った。

「ああ、そうだったの」

ナブに来た頃、アランチャがオレンジを好きかと訊ねた理由がやっと理解できた。

「アミ、スマイル！元気出して」

アランチャが笑った。その笑顔は、まるで春先に突然差し込んだ真夏の太陽のようだった。

「ありがとう」

まだ自分を拒絶しない人がいた。

「ロベルト、荒れてただろ？」

広司が、タバコをもみ消しながら言った。

「え？どうして、それを？」

「彼女と別れたんだ」

「うそ」

「ホント。さっき電話で話したらしい」

亜見が聞いてしまったあの電話だろう。

うつむいている亜見を横目で見ながら、広司が続けた。

「彼女に、他に好きな男ができたから別れてほしいって言われたってさ。ま、その前から疎遠にはなっていたらしいけど。俺が話したって、ロベルトには言うなよ。亜見に話したければ、本人が言うだろ」

「そうだったの・・・」

「だから、ロベルトが荒れてても、あんまり気にすんな」

「いえ、別にそのことじゃなく・・・」

「それより、アランチャのオレンジ、俺にもちょっとくれ」

広司がいたずらっぽい笑みを浮かべて言った。アランチャそのもののような明るい色のオレンジ。その皮をむくと、あのさわやかな香りが広がる。

胸いっぱい吸い込んで、香りを堪能していると、横から広司の手が伸びた。

オレンジをひと房、口に放り込みながら

「それから、もう一つ、ロベルトが怒ってることがある」と言った。

「え、なに？」

「実は、ロベルトの名前はイタリアでは“ルオベルウト”に近い発音なんだって。「コージもアミもRとLの発音の区別ができてない」って怒ってたぞ」

広司はわざと怒った表情を作ってみせた。

「広司ったら！怒ってるなんて言うから」

「あはは、ドキッとしただろ」

「もう」と言いながら、亜見もつられて笑った。

「やっと笑った」

「広司って、本当は“Cozy（コージー）”なのかも」

「なんだよ、それ」

「居心地がいいってこと。一緒にいると楽な気分になれそう」

「はっ、俺は安楽椅子か！」

広司が呆れ顔をした。

「ヘイ、煙突屋さん（チムニー）！」

キッチンからアランチャの声がする。

「げっ、コージーの次はチムニーかよ」

「未成年のくせに、タバコをスパスパ吸ってるからでしょ」

亜見の一言に、広司は頭をかいた。

「チムニー！タバコ吸い終わったら手伝って」

アランチャが呼びかける。

「O.K」と返事をしてから

「今日は、ソニアがアンプルサイドまで行ってるから、戻ってくるまで、アランチャの夕食の準備、手伝う約束なんだ」

「へえ、親切なのね」

「そうさ。亜見も、やっと俺のことがわかったな」

そう言うと、キッチンに向かって走り出した。振り返りながら

「本当は、タバコ一箱で、アランチャに釣られただけ」と言いたした。

「まったく！」

亜見の言葉に、笑いながら広司はキッチンへ姿を消した。

アランチャも広司もいなくなったので、前庭をまわって玄関へ戻った。玄関脇の居間からマグダが出てきた。

「あら、アミ」

マグダは、いつもと変わりなく微笑んだ。レオから何も聞いていないのだろうか。

「マグダ、あの・・・レオは？」

「中にいるわ。私は、ちょっと眼鏡を取りに部屋まで行くけど」

そう言いながら、居間のドアを亜見のために開けてくれた。居間をのぞくと、レオがロッキングチェアに座って本を読んでいたが、亜見の気配に気づいて本から顔をあげた。

「やあ、アミ」

レオも、ふだんと変わらない様子だ。

「あの・・・昨日は、ごめんなさい」

レオは、亜見の謝罪に見当がつかないといった表情で

「何のことだい？」と言った。

「昨日、ここでアドルフが・・・」

亜見は、そこまで言うと口籠もってしまった。

「ああ、“犬みたいな言葉”のことか」

レオは、やっと思い出したように言った。

「そんなふうには私は思ってません」

「わかってるよ、君がそう思っていないのは。彼は、僕らがオランダ語で会話していたのが気に障ったんだろう。なんといっても彼は“アドルフ”だからね」

レオはそう言って、「ハイル・ヒットラー」のポーズで敬礼する真似をした。それから、吹き出しながら

「いや、今のは悪い冗談だ。忘れてくれ。僕のほうは、何も気にしちゃいない」

と笑った。

「でも、アニカは・・・」

「ああ、アニカは・・・彼女なりに色々あるのさ・・・」

さすがのレオも、話題がアニカのことに及ぶと歯切れの悪いもの言いになった。

「でも、アミ、君は気にすることは無い。気にすることは無いんだよ」

レオは、二度くり返した。

その言葉から、昨日、レオとアニカが何か深刻な話題をしていたのではないかと察した。しかし、「気にすることは無い」とくり返された以上、もうレオに聞くことはできなかった。

デルフトから北西へ車で十分ほど行ったところに、デン・ハーグの街はあった。デン・ハーグは、現オランダ女王の住むハウステンボスや国会や総理府、外務省などの入っているビネンホフがある政治の中心地である。ホフフェイファ池の前にはレンガ造りのビネンホフが威厳のある顔で佇んでいる。

「ビネンホフは、中庭という意味なのよ」

マグダの言う通り、ビネンホフは重厚な建物が中庭を囲む形で建てられている。中庭では、ガードマンがものものしく行き交い、黒塗りの車が何台も建物に横付けしては、VIPらしき人々が入り出している。だが、一般人の中庭への出入りも自由で、この国の自由と寛容の精神がうかがえる。

再び、ホフフェイファ池の側に歩くと、ビネンホフの北側角にはバロック様式のマウリッツハイス美術館が瀟洒な姿を池に映していた。イオニア式柱頭のある片蓋柱に支えられ、浮き彫りの施された三角切妻壁が、建物全体を優美に装飾している。ここは、17世紀にオラニエ公の甥、ヨハン・マウリッツの屋敷だったところを、後年、美術館にしたのだ。

美術館正面にまわり、中へ入ると一階の大広間に出る。寄木細工の床と装飾の施された木の壁に包まれている。壁の浮き彫りは黄金で箔付けられ、シャンデリアの光が飴色の床と金箔装飾を照らし出している。

「ここは、“黄金の間”と呼ばれているの。十八世紀の火事で内装が焼けてしまった後に、イタリアの画家が壁画と天井画を描いたの」

確かにイタリア風の壁画が描かれている。

イタリアといえば、ロベルトを思い出す。亜見の胸に説明のつかない感情が湧いてくる。懐かしさと切なさ、そしてそれ以上のなにかが。

大広間を抜け、階段を上り、最初の部屋で目にしたのは、フェルメールの『真珠のイヤリングの少女』の絵だ。1660年に描かれたとは思えないほど、生气に溢れている。

背景の黒から浮かび上がるように、ターバンを巻いた少女が振り向き加減にこちらを見つめている。ターバンの鮮やかな青と頭頂部から肩まで垂れ下がる黄色い布の色彩のコントラストが目につく。が、それ以上に印象的なのは、少女の澄んだ瞳と少し開いた唇、片側だけ見える真珠のイヤリングに反射する光だ。

少女の瞳と唇に遊ぶ光は、真珠の輝き以上に若さという輝きに満ちている。

その輝きは少女のなめらかな肌を陶器のように美しくみせる一方で、移ろいやすい若さは、はかなげな不安にも満ちている。少女は、笑うでもなく、悲しむでもなく、かといって無表情でもなく、なにか深い神秘を宿している。

なにかを憂えているのだろうか。あるいは、なにか深い思いにとらわれているのだろうか。だとすれば、その思いは喜びに溢れたものではなく、恐れや不安といった、とらえどころのない不確

かさに揺らいでいる。

それを表すかのように、少女の視線は、絵を見る者から微妙にずれ、彼方を彷徨っている。その謎に満ちた神秘に引き込まれるように、亜見はその絵を見つけた。

少女の絵からやっと視線を移すと、フェルメールのもう一枚の絵『デルフトの眺望』が目に入ってきた。

絵を見た瞬間、亜見は動けなくなった。

そこには、亜見の脳裏の記憶がまるでスクリーンに投影されたように、完璧な姿でもってキャンバスに映し出されていたからだった。

画半分を覆う厚い雲、そして、雲に覆われたデルフトの町並みが、スヒー川対岸から描かれている。画右端には、とんがり帽子の小人が並んだような門が描かれている。雲をわって差し込む光が、町の中心部にあたり、新教会を黄金色に染めている。

「これは、昨日見た景色そのものだわ」

亜見の驚きに

「あの景色を見た後に、この絵を見てもらいたかったの」

マグダが笑った。

「すごいわ、フェルメールが描いた景色と全く同じ景色が残っているなんて」

「いいえ、ちょっと違うのよ。実は、この絵の門は南門で、19世紀に取り壊されてしまったの。だから、昨日見たのは東門のほうなのよ。でも、景色はフェルメールが描いたときとあまり変わっていないわ」

「この光の当たっている塔は、あの新教会の塔でしょ？」

「ええ、そうよ。フェルメールが洗礼を受けたところよ。そして、こっちの茶色っぽい塔が旧教会。フェルメールが埋葬されたところよ」

マグダは、画左の塔を指しながら言った。

厚く覆う雲が、差し込む光を効果的に川面に反射させ、町の中心を劇的に浮かび上がらせている。

フェルメールがその生涯を過ごした町。

天からの光が未来永劫、デルフトの町を照らしつづけるようにと祈りにも似た画家の思いが読み取れるようだ。

ヤン・コルが見た光を画家フェルメールも見たのかもしれないと亜見は思った。

マウリッツハイスは、フランドル絵画の珠玉の作品が数多く集められている。続く部屋には、フランツ・ハルスやヤン・ステーンの絵画が飾られてる。

ハルスの少年の絵は、流れるような大胆なタッチで描かれているが、他の貴族の肖像画は、黒い服にかかるレースの微細な柄までも、緻密に描かれていて、画家の技法の探求過程がうかがえる。

「黒が、深みのある黒ね」

亜見の言葉に

「そうね。ハルスは、黒の魔術師と言われるほど、多くの種類の黒を描き分けた画家よ。ゴッホも、「ハルスは27色の黒を持っている」と記したそうよ。彼も、死後忘れられてしまうけど、19世紀に再評価されるようになったの」

マグダが言った。

画題が聖書や神話をモチーフにしたり、貴族の肖像画が描かれる時代に、ヤン・ステーンは、オランダ庶民の飾らない日常生活を描いた。酒に酔う男達、喧嘩する夫婦、騒ぐ子供たちの声まで聞こえてきそうだ。当時の庶民の生活が、コマ割の記録映画のように生き生きと描かれている。

ふと亜見は、壁に小鳥がいるのに驚いて立ち止まった。

白壁に取り付けた餌箱の上に止まった小鳥は、今しも飛び立ちそうだ。

もちろん、それは絵だった。

「一瞬、本物の小鳥かと思っちゃったわ。バカね、美術館に小鳥がいるわけないのに」

亜見の言葉に

「これは、カレル・ファブリティウスという画家の作品よ。彼は、「トロンプイユ」という騙し絵が上手かったのよ。あなたが本物かと思ったのは彼の技術がそれだけ本物だったということね」

マグダは微笑んだ。

「ファブリティウスも、デルフトの画家なのよ。彼は、この間話した1654年の火薬庫爆発で、若くして亡くなってしまったから、作品は多くは残っていないわ」

「残念ね」

「そうね。デルフトの火薬庫爆発の絵を描いたファン・デル・プールとは、家が隣同士だったらしいわ。ファブリティウスは、レンブラントに学んで、フェルメールにも影響を与えたと言われているわ」

「レンブラントといえば、確か『ニコラス・トゥルプの解剖学講義』がここにあるのよね」

「ええ、行ってみましょう」

マグダと向かったレンブラント室は、この7月に再オープンした部屋だ。

ところが、期待のニコラス・トゥルプ氏は、不在だった。その絵が掛けられているはずの壁には「イギリスの美術館に貸出し中」と小さなプレートが掛けられていた。

「亜見より一足先にイギリスへ向かったようね」

「私が行く頃には、絵がここに戻っているかもしれないわよ」

亜見が肩をすくめると

「イギリスとオランダなら、そう遠くないから、また見にいっちゃい。絵を見る口実にして」
マグダも肩をすくめて笑った。

トゥルプ氏のかわりに亜見が目にしたのは、レンブラントの『シメオンの賛美の歌』という一枚だった。

聖書のルカによる福音書から題材のとられたこの宗教画は、レンブラント独特の光と影の手法で描かれている。

会堂内の暗闇の中から、光のあたった幼子イエスとヨセフ、マリアが浮かび上がり、シメオンが彼らを祝福している。

この光は、自然光ではなく、天から降り注ぐ啓示の光、暗きこの世界に投げかけられた救いの光を暗示している。

と同時に、全てのものは、光によって見ることができるという絵画の基本を表している。光を表すには、光の当たったものを描くことだ。そして、光の当たったところを描くことによって、逆に光の当たっていない部分を見ることができる。

ヨセフのマントに当たる光と影。

影の部分はほとんど暗く沈んでいるが、光の当たっている部分から、見るものの想像力で、マントのひだ、形を見ることが出来る。全てを描くことなく、全てを表現する。

それが、25才の若き画家が見出した画法だった。

光があるから影ができる。暗闇があるから、光が光としてより輝く。

光と影は、対極にありながら、決して離れることのできない双子児のようなもの。

絵画における光と影が、その後のレンブラントの実人生にも映し出されている。

若きレンブラントの肖像画と最晩年の肖像画を眺めながら、亜見は自らが踏み出そうとしている世界に身震いするようだった。

早い夕食後、ロベルトの運転する車に、亜見は広司、アニカ、アランチャと共に乗り込んだ。この日は、ティムとロベルトの発案により若者組と年長組に分かれて交流を深めようということになった。

ティムは、レオとマグダ、アドルフ、ソニアを連れて地元のパブへ行った。

ロベルトは「古代遺跡ツアー」と銘打って、皆を車にのせた。

パブの前を走る国道を北上し、グラスミアを超え、ケズィックの町から南東にはずれたところにストーンサークルがあった。

イギリスでは、各地で巨石群が見られる。最も有名なものは、イギリス南部にあるストーンヘンジである。ストーンサークルは、その小型版といったところだ。

建造の歴史は、紀元前二千年とも三千年とも言われる。キャッスルリッグの荒野に30数個の巨石群が円環に連なっている。まるでトマス・ハーディの小説のラストシーンのようだ。

傾きかけた夕日が薄灰色の雲に見え隠れしながら、フラミンゴ色に空を染めていく。なだらかな山並みが、パノラマとなって巨石群のまわりに広がっている。その輪の中心に座り、ロベルトがギターを弾き始め、アランチャが「パフ」の歌を歌いはじめた。

やがて夕日が山の頂きの向こうに隠れ、残照が巨石群を巨人の影のように浮かび上がらせた。それぞれ、思い思いに石に登ったり、寄りかかったりしていた。暗くなった荒野で、誰がどこにいるのか判別できなくなっていた。

「ストーンサークルの中には、生贄の死者が埋められているって話だよ」

亜見の近くで、ふいにロベルトの声がした。

「ほら、君の足元にも！」

「やだ、ロベルト。脅かさないで」

「しっ。ここは謎のストーンサークルだ。僕は君の姿が見えないし、君も僕の姿が見えない。僕が誰で、君が誰かわからない」

「声でわかるけど」

「そんなこと言わずに。謎の闇に包まれているほうがいいだろう？」

「わかったわ」

ロベルトの口調が、ふだん通りなので、幾分ほっとした。

「古代の人は何の目的でストーンサークルを建てたんだろうな」

「さあ、天体観測をするためとか？」

「スルドイね。ストーンサークルは、月の運行に関係があるらしい。あるいは、宗教的な儀式のためかもしれない。煌々と照る月夜の下で、生贄の死者が埋葬される。月は死の世界に通じる入り口と考えられていたらしい」

「死の世界・・・」

「生界と死界をつなぐリングの内側には未知のエネルギーが宿ると信じられていたんだろう。リングとは力が集中するところだから」

「どんな力？」

「人知の計り知れない力。宇宙の力、見えざる大いなる意思とでも言おうか」

「神ということ？」

「神というのも難しい。キリスト教でいう神とは違うだろうし、他の多神教の神とも違うだろう」

「神ってどういう存在？だいたい神なんて、本当にいるのかしら」

「それは普遍的な問いだね。その謎を解き明かすべく建てられたのが、このストーンサークルさ。そして、古代から現代にいたるまで、誰もそれを解き明かした人はいない。神の存在を証明した人は一人もいない。でも、だからといって、それが神の存在の否定にはならないと思うな。「神がいなかった」と証明した人も一人もいないんだから。そうして、僕らの問いは、永遠に終わらない一つの円環となる。ストーンサークルのこのリングのようにね」

亜見はすっかり暗くなった夜空を見上げた。剣のように冷たく光る細い三日月が浮かんでいる。見ていると、死神の持つ大鎌の刃先のように見えてくる。刃先。亜見は、無意識に左手首に手をあてた。

ふと、草地を歩いてくる足音が、聞こえた。

「やあ、君も仲間に入らないかい」

ロベルトの誘い掛けに、足音が止まる。

姿は見えないが、亜見はやや離れた場所に二つの小さな火を見つけた。広司とアランチャがタバコを吸っているのだろう。ということは……。

「夜って不思議じゃない？昼間、太陽に隠されていた宇宙がまるでヴェールをはがされたみたいに間近に見える。手が届きそうだ。暗闇の中では、お互い誰が誰だかわからない。そう、肌の色も髪の色も、人種もだ。そういった外的要素を取り払って、個と個で対することができる。そう思わない？」

ロベルトの問いかけに

「ええ」

アニカの声が答えた。

「君もそう思ってくれて嬉しいよ。人種や国籍は、人を判断する基準にはならないよね」

ロベルトは、亜見にこのことを聞かせたかったのだろう。白人だから、アジア人を差別するのではない。それをアニカの口から聞かせたかったのだ。

「まあ……そうね」

「じゃあ、どうして日本人を毛嫌いするの？差別意識があるからじゃない」

思わず亜見が口をはさんだ。アニカは、初めて亜見の存在に気づいたように、一瞬言葉を失った。それから、厳しい口調で

「私は、肌の色で差別なんてしてないわ」と言い放った。

「じゃあ、どうして……」

「憎まれるようなことをしたのは、あなたたちよ！」

アニカは吐き捨てるように言うと、荒々しくその場を立ち去った。

「どうということ・・・？」

亜見は呆然とつぶやいた。横からロベルトの長い嘆息が聞こえた。

「二人になんとか仲良くなってもらいたいと思ったけど・・・」

「ロベルトが、落ち込むことはないわ。私とアニカの問題なんだから」

「違うよ。ナブのメンバーの問題だよ。チームもレオも、君とアニカのことはみんな気にしてる。張り詰めた空気は伝染するからね」

「私には、どうしようもないわ」

大鎌のような月を見上げながら、亜見は

「スケープ・ゴートだわ・・・」と、つぶやいた。

「え？」

「このサークルのどこかに生贄の死者が葬られていると言ったわね」

「ああ」

「昔も今も、みんな、誰かを血祭りにあげて、自分たちのアイデンティティを保とうとしているのよ。生贄にされる人たちは、その運命をどう変えることもできないんだわ」

「運命は変えられるさ」

「ある程度はね。でも、誰も生まれを変えることはできない。全てはそこから始まって、それは一生背負っていかなきゃならないものなのよ」

「随分、生まれにこだわるんだな。でも、それが運命なら背負うしかないだろ」

「ひとつとね」

「仕方ないよ。誰も肩代わりはできないんだから。与えられた運命が辛くても、それを投げ出すのは間違いだ。生きることを放棄するのは、罪だからね」

「・・・昔、教会の日曜学校に行ったことがあるわ。そこでは、自殺は罪だと教えられた。でも、望まれずにこの世に生まれ落ちた命だってあるのよ」

「僕は、そうは思わない。どんな命にも意味がある。僕らがそれに気づかなくても、必ず意味がある。誰でも、生きる義務があるんだ」

「義務？」

「僕はそう考えてる。生きることは、権利じゃなくて義務だと思う。権利は、自らの自由意志で放棄することもできる。でも、義務は放棄することはできない。いや、してはいけないものなんだ。だから、生きる義務を放棄することは罪なんだ」

ロベルトのきっぱりとした断定口調に、亜見の中に眠る黒い生き物が目を覚ましそうになる。

「自分の考えに自信があるのね」

「自信っていうのは、自分のことを信じるということだからね。誰も自分を信じないでは、生きていけないよ」

「自信のもてない人間だっているわ。あなたみたいに、いとも簡単に理想の極みに飛んでいけるような人ばかりじゃないのよ。地面を這いつくばって、それでも生きる意味を見つけ出せずにいる人間だって、世の中にはいるのよ」

亜見の声は、微妙に震え、それを抑えるように低くなった。喉の奥が熱くなる。

「随分、ネガティブなんだな。そりゃ、僕だって悩むことはあるさ。自信がなくなったりもする。でも、どんな状況でも、全ての命には意味がある。存在価値がある。誰でも、望まれてこの世に生まれたはずなんだ」

「意味って何？具体的に言えるの？生きる価値ってどういう価値？何で測れるの？きれいごとだわ。理屈や道理が全ての人に当てはまると思ってるの？そんなの傲りだわ。いくら上からものを言ったって、人の痛みは見えないのよ！」

亜見は、溜まっていた思いを吐き出すように一気にじゃべると、ロベルトから立ち去った。喉の奥から這い上がろうとする、あの黒い生き物を止めなくてはならない。自分を落ち着かせなくては。亜見は熱くなる手首の傷跡をおさえながら、草地を歩いた。

帰りの車の中、口をきく人は誰もいなかった。亜見は後部座席で、アランチャを真中に、アニカと座っていた。ロベルトの助手席には広司が座っていたが、誰も口を聞こうとしないので、ラジオの音楽を流した。

湖水地方の田舎道では、道路脇のライトはない。車のライトに光る路上の反射板だけが道しるべだ。目先の暗闇から、点々と反射板が浮かび上がり、誘われるように車を走らせる。周囲の黒い木々が速い速度で走り去る中、ほのかな月光を反射した湖だけが、動かぬその存在を示していた。

5月半ばの夕方、亜見がナブの前庭のベンチに座っていると、ティムとアニカがベルを連れて裏庭からやってきた。

「やあ、アミ、そんなところでボーっとしてないで、一緒にベルの散歩に行かないか」

ティムの誘いに、横にいたアニカはあからさまに不快の表情を見せた。だが、ティムの手前、何も言えずにいるようだった。

「いえ、私はいいわ」

アニカに遠慮するように亜見が言うと

「そう言わずに。別に急用があるわけでもなさそうだし、湖の反対岸まで行ってみよう。ドラゴンの棲む洞窟もあることだし」

ティムはそう言って、ウィンクした。

「いえ・・・」

亜見が断るのに困っていると

「さあ、行こう！」

ティムが、半ば強引に亜見をせきたてた。アニカもここまできて散歩を止める理由が見つからない様子で、ベルのリードをひいて歩き出した。

ティムと一緒に仕方がない。亜見もティムと共にアニカの後に従った。

ライダル湖畔を西周りに歩いていく。林の中に入ると、アニカはベルのリードをはずしてやった。ベルは尻尾を振って、林の中を駆け回った。足の長いアニカは、後ろを歩く亜見を振り返りもせず、まるで引き離すかのように足早に歩いていった。

「反対岸にはね、洞窟があって、ライダル湖に棲むドラゴンのねぐらになっているんだ」

ティムが、亜見の歩調に合わせてながら話しかけた。

「また、冗談ばかり」

「本当さ、ライダル湖に棲むラッシーさ」

ティムは、大真面目といった表情だ。ライダル湖に棲むラッシー、なんとも安直なネーミングだ。

「ネス湖のネッシーみたいね。ティムは、その・・・ラッシーを見たことあるの？」

「ああ、一度ね。夏の夕暮れにエリーとニッキーと湖岸近くで泳いでいた時に、反対岸近くに黒い影が現われたんだ。長い首と背中が少し水面に出ていたな。西日のシルエットになっていたから、鱗があるのかとかは、わからなかったけどね」

いかにも、もっともらしくティムが言った。どこまでが本気で、どこまでが冗談なのかわからないのがティムだ。

先を歩いていたアニカが、湖を見渡せる場所で足を止め、しばし景色を眺めていた。

が、亜見たちが追いついてくるのに気づくと再び歩き出した。

アニカが立っていた場所に立つと、夕陽が西の林に沈みゆくところだ。空にかかる緋色のマントの襞は、まるでターナーの絵の光だ。

しばらくその光にみとれてから、遅れを取り戻すように亜見は足早に歩き始めた。しばらく歩くと、林の中にアニカの背の高い後姿が見えてきた。斜めに差す光にアニカの栗色の髪が、やわらかな黄金色に輝いている。

ナブの反対岸へくる頃には、夕陽は山から立ち上る巨人のような暗雲にすっぽり隠されていた。ふと、ティムが立ち止まって、腕時計に目をやった。

「いけない、すっかり忘れてたよ。エリーを車で迎えに行く時間だ。ナブに戻らなきゃ」

「じゃあ、帰りましょう」

「いや、ベルの散歩はアニカと二人で頼むよ。せっかくだから、洞窟も見ておいで」

アニカと二人きりにされるのは、とんでもないことだ。

反論しようとしたが、ティムは大声でアニカの名前を呼んだ。

振り返ったアニカにジェスチャーを交えて、ナブに戻らなければならないことを告げた。アニカは、引き返そうとしたが、ティムが、そのまま反対岸を歩いてから戻ってくるようにとジェスチャーした。

「あと三分の二くらいで、反対岸をまわれるよ。洞窟も、もうすぐだ。じゃあ」

ティムはそう言うと、急ぎ足で引き返していった。

アニカも亜見も先へ進むしかなかった。どうせ歩調の違うアニカと、口を聞くこともない。

ナブの階段に飾られていた写真のように、対岸からナブ・コテージを見ても悪くないだろう。

そう思いながら歩いていくと、目の前の石に黒い染みがついた。黒い染みは、二つ三つと次々に増え、しまいにバラバラという音と共に、大粒の雨が降り始めた。

亜見は風除けに着てきたジャンパーのフードを被った。山の天気は変わりやすい。雨は意外に強く降り出した。鼻先や睫毛に雨がしたたる。

前を歩くアニカの歩調が早くなり、追いつこうと小走りに走り出した矢先、亜見は濡れた石に足を滑らせ転倒した。その音に、さすがにアニカも振り返った。

亜見は「大丈夫」と言って立ち上がったものの、左の足首が少し痛む。

再び歩き出したアニカの後を、左足をかばいながら付いていく。

一度だけアニカがちらと振り返ったが、亜見が付いてきているのを見ると、そのまま歩き続けた。

亜見の歩調が明らかに遅くなったにもかかわらず、アニカとの距離が開かないのは、アニカも歩調をゆるめたせいかもしれない。

ベルは、雨の中でさえ嬉しそうに、アニカと亜見の間を往復して走りまわっている。

しばらく歩くと、右手の山側に大きく岩盤が削り取られたような洞窟が見えた。雨脚がさらに強くなった。アニカは意を決したように振りかえり、洞窟を差しながら

「しばらく雨宿りしましょう」と言った。

堅い岩盤が、巨大な獣の牙のように鋭く削り取られた入り口は、縦15メートル横10メートルくらいの幅だ。入り口から奥までは、20メートルくらいだろうか。内部は、地面からの湧き水が浅い水溜りを作っていた。ベルがはしゃぎながら洞窟の中に入り、浅い水溜りの中を走り回った。

洞窟の大きさからして、ラッシーが棲んでいてもおかしくないと、ティムの言葉を真面目に考えている自分にふっと笑いが漏れ、同時に左足首に痛みが走った。

ジーンズの裾をまくり、靴下を下げると、足首が赤く腫れている。

アニカの視線がそこに注がれているのに気づいて目を上げると、アニカが視線をそらした。

洞窟の中で、息の詰まるような重苦しい沈黙が、二人の間に流れた。ザーザーという絶え間ない雨音だけがバックミュージックとなって、流れの止まったような時間に二人を閉じ込めた。5分、10分、いったい何十分過ぎたのか、あるいは数分しか経っていないのか。

「私がナブに戻って、ティムたちに知らせてくるわ」

沈黙を破ってアニカが口を開き、立ち上がろうとした。

「待って！」

とっさに亜見はアニカの腕を掴んだが、同時に左足の痛みに顔をゆがめた。

アニカを好きなわけでもないし、アニカが自分を嫌っていることもわかっていた。

だが、この洞窟の暗がり一人置いていかれるのもかなわなかった。

本当にアニカが戻ってくるかも信用できなかった。

「しばらく雨は止みそうにないわ。夜になってからでは、もっと足元がおぼつかなくなるわ」

「でも、アニカ、もう少しだけ待って。小降りになれば、なんとか歩けるから」

亜見の懇願に、アニカもしぶしぶ留まることにした。

亜見は雨を避け、洞窟の中ほどの石の上に腰掛けていたが、アニカは洞窟の入り口の横壁にもたれて、外の様子を眺めていた。

「あの・・・」

自分で発した声が、洞窟内に妙に大きくこだます。

「ひとつ聞きたいんだけど・・・」

アニカが返事をしないので、そのまま言葉を続けるしかない。ためらったが、話を切り出した以上、話してしまわなければならない。

「ストーンサークルで、「憎まれるようなことをしたのは、あなたたち」と言ったのは、どういうこと？」

亜見の問いは耳に届いているはずだが、アニカはしばらく身じろぎもせず、雨にけぶる林を見つめていた。

「答えたくないなら、別にいいんだけど・・・」

亜見の声だけが空しく反響して消えていく。

突然、アニカは踵を返し、水溜りに足が濡れるのも気にせず、亜見の目の前まで歩いてきて

「今、あなたのもう一方の足を石か何かで傷つけて歩けなくして、そのまま私が洞窟を出て一人でナブに戻ったらどう思う？」

早口で鋭く言い放った。

「そんなひどいこと、するはずないわ！」

亜見は、とっさに叫んでいた。

暗いはずの洞窟内で、アニカの瞳がわずかに光ったのは気のせいだろうか。

「でも、日本人はしたわ、それ以上のことをね」

アニカの瞳が大きく見開かれ、射抜くような強い力で見つめた。

「いったい誰に・・・？」

「私の祖父母と父によ。インドネシアにいたオランダ人全てによ」

「インドネシア・・・？」

「日本人が何をしたか、そんなに聞きたいんなら教えてあげましょうか」

アニカが亜見ににじり寄り、低くくぐもった声で言った。

暗闇で、アニカの瞳だけが異様な光を放っている。

そこに映るものは、氷のように冷たく尖った青白い憎しみと、何故かはわからない哀しみがひそんでいた。

それは、まるでこの世の憎しみと哀しみが、青白い雨糸となって、暗い洞窟のようにあいたアニカの心の隙間に流れ込んでいるようだった。

アニカが、洞窟を出ていった後、亜見はアニカの言葉を反芻していた。

—「だから、祖父は日本人に殺されたのよ」—

アニカの話によると、彼女が日本人を無視し続けたのは、白人優位の人種差別的観点からというような単純な理由ではなかった。

アニカの父は、インドネシアのスマランで、オランダ人学校の高校教師をしていた祖父母のもとに生まれた。

オランダは海上貿易で栄えた国だ。東インド会社を設立したオランダの管理下で、インドネシアには、長年多くのオランダ人が住んでいた。

アニカの父も、そんなオランダ人の一人だった。典型的オランダ人家庭にもれることなく、幼い父は祖母に連れられ、午前中はプールへ行き、午後は庭でお茶をし、月の照る夜はハンモックに寝転びながら、虫の音を聞いて平穏な日々を過ごしていた。

そんな生活が一変したのは、1939年、第二次世界大戦が勃発し、翌年、オランダ本国がドイツに降伏した頃だった。しかし、当時はまだ本国にたちこめる暗雲は、インドネシアまでは遠く、その身にふりかかる危機感は薄かった。

1942年、日本軍がインドネシアに上陸した二ヵ月後、オランダ軍は降伏し、戦争の渦中に巻き込まれた。

アニカの父が8歳のときのことだ。

突然、家に踏み込んできた日本軍によって、祖父は連行され、残された祖母と父とその妹は、ハルマヘラの抑留所へ入れられた。

日本軍は、インドネシア各地に抑留所を設け、敵国人を強制収容した。被抑留者は鉄道敷設や農場での強制労働に従事させられた。

そこでの生活は、毎朝、抑留所の外へ整列させられ全員の点呼から始まった。脱走者がいたグループは、そのグループの連帯責任として罰が与えられた。

食事は、一日二回、トウモロコシ粥とひしゃく一杯の野菜スープ。週一回スプーン二杯の砂糖が配られた。

狭い抑留所内には、何百人もの人々がひしめきあい、トイレもすぐいっぱいになり、ひしゃくで汲み出さなければならなかった。

非衛生と炎天下での重労働、栄養失調から多くの人々がマラリアや赤痢にかかって死んでいった。

アニカの父が10歳のとき、ハルマヘラからランペルサリ抑留所に移された後、父だけ祖母と妹と別れ、バンコン少年抑留所へ移された。

ランペルサリには、主に女性や子供が残り、バンコンには少年や男性が収容された。まだ10歳だった父も、強制労働に従事させられた。炎天下であろうと、大雨が降ろうと、少年達は早朝

から夕方まで酷使され、少しでも手が遅れようものなら、監視員に罵声を浴びせられ、地面に蹴り倒され、殴りつけられた。気を失うほど殴られても、また立ち上がって働かなければならない。そのまま意識が戻らない少年もいた。

病気になっても、休むことは認められなかった。

半死状態になって、ようやく病院へ送り込まれても、十分な治療はもちろん与えられず、死を待つだけの状態だった。

体の弱かった祖母は、たまたま病院の仕事、それも死者のための花輪作りという仕事を手に入れたため、他の人々ほど苛酷な労働ではなかったが、毎日、病室から運び出される死者の中に、変わり果てた姿の親しい者たちを何人も見つけた。

祖母の体もまた栄養失調から、見る影もなくやせ細っていった。だが、それも時間と共に、むくみに変わっていった。体がだるく、全身にむくみが広がっていく。自分の体が、どうなっていくのかわからない不安の中、それでも、子供たちを残して死ぬわけにはいかない。生き延びて、再び家族そろって暮らすことを支えに耐えるしかなかった。

あと数日、終戦が遅れていたなら、生き延びられたかはわからない。

1945年、解放は、突然やってきた。

アメリカ軍が、上空から終戦を知らせるチラシと食糧の詰まった木箱をパラシュートでばらまいた。長いこと味わったことのない野菜や豆のたっぷり入ったスープを配給された。体中に力が蘇ってくる。助かったのだ。祖母は子供たちを抱きしめて泣いた。

日本軍が撤退した後、抑留所から解放されると、祖母は幼い子供たちを連れ祖父を探した。しかし、どの抑留所にも祖父はいなかった。祖父の消息が知れたのは、解放後しばらくたってからのことだった。

祖母は、祖父がインドネシア内の抑留所にいると思っていたが、実際は、日本軍に連行された後、バタビアへ連れて行かれ、そこから船にのせられ、マレーシアや台湾を通して、日本の釜石へ行った。長い船旅の中、ここでも襲う非衛生と栄養不良で、多くの捕虜たちが死んでいった。日本に着いた祖父たちは、釜石で鉱山労働者として過酷な労働を強いられた。その過労から、祖父は終戦直前に亡くなっていた。

祖父が家族にあてた数通の葉書と祖父が肌身はなさず持っていた家族の写真、時計とライターだけが遺品として残された。祖父の葉書は、戦争中には家族のもとへ届かなかった。遺品として渡された葉書には、このように書かれていた。

「鉱山への道に行く我々は、まるで死の行進をしているようだ。仲間が次々と倒れていく。労働の必要性があつての作業というより、捕虜を正當に死に至らしめるための労働のように思える。私の命がいつまでもつのかわからない」

祖母は、祖父の葉書を抱きしめて泣いた。遺体にとりすがることさえできない。はるか遠い異国の地で、祖父の体はどこにいったのかもわからない。心の支えは失われてしまった。戦争が全てを変えてしまった。それでも、残された小さい子供たちを抱えて生きていかなければならなかった。

ところが、日本軍から解放され、再び平和が戻ってくると信じていた祖母たちは、その平和への扉が開かれたとき、オランダ領からの独立に闘志を燃やす荒々しいインドネシア人たちの姿を見ることとなった。

祖母たちは、今度は独立運動の旗を掲げるインドネシア人から逃れるために、生まれ育ったインドネシアを後にして、本国オランダへ引き揚げることを余儀なくされた。遠い親戚を頼っての引揚げ、全てを失ってのスタートだった。

祖母は、抑留所での栄養失調がたたり、もともと弱かった体をさらに悪くし、視力も弱り、無理な労働ができなくなった。親戚の家に身をよせながらも、肩身の狭い思いで貧しい暮らしに耐えた。

アニカの父は、生活費と妹の学費を稼ぐために、大学進学を諦めて働いた。妹がようやく結婚するまで、父は結婚しなかった。戦争が終って50年たった今でもなお、アニカの父は抑留所で日本兵に殴られる子供時代の夢にうなされている。

—「家族を引き裂いて、多くのオランダ人を虐殺し、残された者たちに一生消えない傷を負わせたのは、あなたたち日本人よ。だから、私は日本人を許さない」—

アニカから初めて聞く話に、亜見は一言も返すことができなかった。亜見の認識をはるかに超えていたからだ。

日本とオランダは、鎖国時代から400年続く友好国ではなかったか。

シーボルトが日本にやってきて、日本の文化をオランダに伝えたではないか。

ゴッホは、日本の浮世絵に魅せられて、“日本のような”南仏へ行ったではないか。

柔道を習うオランダ人も多いと聞いた。

大戦中、日本人がオランダ人を虐殺した話など聞いたこともない。まるでユダヤ人を虐殺したナチスのようなではないか。その非を認めまいがために、インドネシアで起こったことは、日本の歴史の中で語られることがなかったのか。

祖父母や父の身に起きた屈辱的行為を語ることは、アニカにとっても屈辱的だったに違いない。それでも、単なるアジア人蔑視をされたと思っている亜見に真相と怒りをぶつけずにはいられなかったのかもしれない。ナブに来て以来、鬱積していた思いが吹き出したのかもしれない。呆然としている亜見を一人残して、アニカは降り止まない雨の中を出て行ったのだった。ベルもアニカの後を追って行ってしまった。

随分、長いことアニカは戻ってこなかった。そのまま、ナブへ帰ってしまったのだろうか。アニカが言ったように、ナブに戻っても、亜見が怪我をして洞窟にいることをティムたちに知らせずにいたとしたら？

しだいに暗く、視界が狭くなっていく洞窟の石に座ったまま、亜見は、外を絶え間なく降りしきる雨糸をたどっていた。

どれくらい、時間が過ぎただろう。腕をひざの上に組んで頭を突っ伏していた亜見の肩を誰かがゆすった。顔を上げるが、暗がりでは相手の顔は見えない。目が慣れるとアニカだとわかった。

「ナブに戻ったんじゃないの・・・？」

アニカは亜見に答えず、ハンカチを湧き水でしぼり亜見の足首にまき、拾ってきた添え木をあてると、自分のバンダナできつく結びつけた。そして、杖がわりの長い木の枝を黙って差し出した。アニカの行動に戸惑いつつも、木の枝につかまり立ち上がってみる。時間がたち足首の腫れはさらに悪化していたが、泣き言をいってもいられない。

「ナブに戻るわよ」

アニカの口調は、先刻の怒りのこもった口調ではなかった。

「アニカ・・・どうして？私のことが・・・日本人が憎いんでしょ。それなのに、どうして・・・」

アニカは一瞬、言葉をのんだが

「そうよ。・・・でも、オランダ人は、日本人がしたようなことはしないわ」と言った。

復讐なのか。敵国人を虐殺した日本人。しかし、オランダ人は敵国人をも助ける人種だと。それがアニカの復讐なのか。あたかもオランダ人を迫害されるイエス・キリストに重ね合わせ、敵さえも救うことで迫害者の非を確実なものとし、罪の意識を植え付ける方法なのか。心の中に渦巻く疑念を抱えながら、亜見は洞窟を出た。

雨はすでに小降りになっていた。アニカが先に立ち、歩きやすい道を選びながら進んでいく。アニカより先に走っていったベルの吠える声が聞こえる。遠くでしたかと思うと、走り戻って、亜見のそばまでやってきて吠える。早くナブへ帰ろう、そう言っているようだった。雨に濡れて滑りやすくなった石の上を、一步一步注意深く進む。時折、木々がすすり泣きのようにざわめく。憂鬱な闇に林が沈んでいく。その闇にのまれまいと、アニカの後姿を目をこらしてついていく。林を抜けフットパスを通ると、やっとナブの明かりが見えてきた。いつも安らぎを感じるこのできなかったナブが、このときばかりは我が家のように思える。

ベルの鳴き声を聞きつけて、玄関のドアが勢いよく開いた。ティムが顔を出し、二人の顔を見ると安堵の表情をうかべた。

「良かった。二人があまり戻ってこないから、探しに行こうとしていたところなんだ」

「途中、雨に降られたので、洞窟で雨宿りしていたんです」

アニカが報告した。ティムの後ろからは、広司やロベルトも顔を覗かせていた。

玄関脇の居間からは、レオとマグダも顔を出した。

アニカは、みんなに心配をかけたことを謝るとそのまま二階へ向かった。

亜見は、玄関にたどり着くと、緊張の糸がゆるんだせいと足の痛みで力が抜け、腰をおとした。

「アミ！」

「大丈夫。濡れた石で足を滑らせて、ちょっと転んだだけなの」

自力で立ち上がろうとした亜見を、ロベルトがいきなり抱え上げた。一瞬のことで驚く。亜見の目の前に、こわばった表情のロベルトの横顔があった。

細身のロベルトの腕は、意外にたくましい。ロベルトは亜見を居間へ運び、長いすにおろした。おろすときのロベルトの腕の筋肉は、まるでダビデ像のように無駄がない。亜見は思わずその腕の動きに見とれた。

ロベルトと一緒に入ってきたレオに「足を見せてごらん」と言われ、亜見は左のジーンズの裾を折り上げた。

「応急手当はしたんだね」

足首にバンダナで添え木が巻かれているのを見て、レオが言った。

「ええ、アニカが」

亜見の答えにレオは、少し意外そうな表情を見せたが、すぐに元の表情に戻ると、ゆっくりバンダナをほどいた。腫れあがった足首は、やや紫色になり、内出血をしているようだ。レオがそっと足首に触れた。亜見の顔が痛みにゆがむ。

「痛むね。骨が変形しているようではないが、内出血もあるし患部が熱をもっているから、冷やしたほうがいいな」

レオとロベルトが居間を出て行き、亜見は一人残された。

しばらくすると、レオが氷水の入った器とタオルを持って戻ってきた。

その後ろからマグダが野菜スープののったトレーを運んできた。

「ソニアが作ったの。体が温まるわよ」

マグダは、ネストテーブルにスープを置いた。

亜見は、野菜スープを一口すすった。湯気のたちのぼる熱いスープが冷えた体にしみわたっていく。

レオは、氷水に浸したタオルをきつく絞り、亜見の足首に当てた。

タオルがぬるくなると、再び氷水で絞って冷やす。

タオルを絞るレオの包み込むような大きな手を見ながら、亜見はアニカのことを聞いてみようと思った。

「レオ、マグダ・・・聞きたいことがあるんだけど」

レオは顔を上げ、マグダも亜見の顔に視線を向けた。

「なんだい？」

「あの・・・、オランダ人は・・・日本人のことを嫌っているの？本当は・・・日本人のこと、嫌っているの？」

レオは、亜見の表情から、中途半端な気休めは言えないことを悟り

「中には、そういう人もいる」と答えた。

「アニカみたいに？」

レオとマグダは、顔を見合わせた。それから、レオが青灰色の瞳でじっと亜見を見つめ

「アニカは、君のことを嫌っているわけではないんだ」

と含ませるように言った。

「でも、アニカは、日本人を憎んでいると言ったわ。日本人を許さないと・・・。レオもマグダも知っているんでしょ。アニカのお父さんやその家族が日本人に何をされたか・・・」

亜見の声は、自分でも気づかないうちに興奮気味に震え、語尾がかすれた。

「ああ・・・。聞いたよ」

亜見の脳裏に、ふとアニカとレオのオランダ語の会話が蘇った。

「レオは、マグダは、日本人から・・・」

そう言いかけた時、広司が居間に入ってきた。

「湿布を探したんだけど、ちょうど切らしていて、ティムとロベルトが、この時間でも開いている薬屋がないか町まで行ったよ」

そう言ってから、居間の重苦しい空気を察したように

「どうかした？」と訊ねた。

「いえ・・・」

亜見が視線をおとすと

「第二次大戦中、オランダと日本が必ずしも友好国ではなかったという話をしてたんだよ」
レオが説明した。

「第二次大戦中？」

「ああ、コージが生まれるずっと前の話さ」

「生まれる前だけど、第二次大戦のことは、毎年語り継がれるてるよ。俺の出身は、ヒロシマだからね。ピカドンで、えーと、アミ、原爆のこと英語でなんて言うんだっけ？」

「アトミック・ボムよ」

「えーと、それ。それが落とされた場所だよ、ナガサキとヒロシマは。それが落とされたとき、すごい大きなきのご雲・・・」

と言って、広司は手で大きなキノコの形を作った。

「それから熱風が吹いた。沢山の人とその熱で焼かれて死んでいったんだ。そして、助かった人も、それから何十年も放射能、えーと・・・」

と亜見の顔を見た。

「えーと、キュリー夫人が発見したのがラジウムだから・・・」

「わかるよ。放射能（レディオアクティビティ）のことだろうね」

レオがうなずいた。

「そう、それで病気になって苦しんでるんだ。」

「僕も、以前、本で読んだことがあるよ。悲惨な出来事だ」

「そうなんだ。世界でそんな悲惨な経験したのは日本人だけなんだ。だから、絶対そのことを語り継いでいかなくちゃならないって、うちのじーちゃんが言った」

広司は、つたない英語で、それでも熱く語った。

確かにそうだ。アニカの話で、今まで全く知らなかったことに衝撃を受けたが、日本も沢山の犠牲者を出した被爆国なのだ。それでも、日本は被爆国としての戦争体験しか語らない。広司は、大戦中のインドネシアの話を知らないだろう。ここで、アニカの話をするべきだと思った。

アニカの話聞いた広司は、黙っていた。いつになく真剣な表情だ。しばらく黙っていた後、口を開いた。

「レオとマグダも、日本人に酷い思いをさせられたの？」

先ほど、亜見が質問しようとして途切れた問いだった。

「僕もマグダも、オランダで生まれ育った。だから、大戦中、日本人と直接関わりあうことはなかった。敵国同士であったことは知っていたけどね。もっとも、僕だって戦争のときはほんの子供だったよ。僕が生まれたのは、戦争が始まるほんの2年前のことだ。ほんの子供だったけど、あのころの経験は鮮烈に覚えているよ。そこだけ、くっきりと切り取られたように、いつまでも色褪せない」

亜見は、どんな経験をしたのか聞いていいものか躊躇ったが、広司が

「どんな経験だったの？」と訊いた。

レオは、亜見の背後の窓に視線を移し、時間を超えて何かをたぐりよせるように、ゆっくりと話し始めた。

「あれは、僕が7歳のころだから1944年のことだ。僕の家は農家だった。戦争が激しくなっていたが、僕たちの住む田舎では都心部ほどの被害は受けていなかった。あれは、町へ野菜やチーズを日用品に交換しに行った帰りだった。農場へ帰る一本道を5歳年上の兄と荷車を押していたとき、ドイツ軍のトラックが追ってきたんだ。トラックからドイツ兵が5人降りてきて、僕たちにドイツ語でなにか怒鳴った。その身振りから、荷物を置いてトラックの荷台に手をつけというらしいんだ。

二人のドイツ兵が銃で僕たちを見張っている間に、残りのドイツ兵たちが荷車の荷物をあさっていた。ドイツ兵は、まだ何かないかというように僕たちのズボンのポケットを探った。

それから、僕たちをどうしたらいいか話し合い、兄と僕の背中を地面に蹴り倒し、頭に銃を突きつけた。ドイツ兵の一人が、鼻で嘲笑うのが聞こえた。

カチリと銃の音がして「殺られる！」と思った瞬間、上空から機銃掃射の音が響いた。

「ころがれ！」兄の声と同時に僕はトラックの荷台の下にころがりこんだ。連合軍のスピッツファイアがドイツ軍に機銃掃射をしかけたんだ。

間一髪のところ助かった。だが、荷台の下でしばらく動けなかった。あたりが静まり返っても、しばらくは目も開けられなかった。

やっと目を開けると、目の前に血まみれの手が伸びていた。その手の先を追って、外の明るみに目をやると、死んだドイツ兵のうつろな目が僕をじっと見つめていたんだ。

やっとトラックの下から這い出すと、兄も出てきていた。トラックは無数に弾のあとがついていて、5人の死体がころがっていた。

兄は「ドイツのクソ野郎、血にまみれてころがってる」と悪態をついて、ドイツ兵の死体に唾を吐きかけた。僕も、兄の口真似をして唾を吐いた。

ひどいことだが、そういう時代だった。殺るか殺られるか。

あの時、僕は思ったんだ。あの死んだドイツ兵の見開かれた目を思い返しなが、僕はどんなことがあっても生き抜いて、この戦争の終わりを見届けるんだ。そして、戦争のない世界を骨の髄まで味わい尽くすんだと思った。それがあの当時の自分に課した義務といおうか、使命のようなものだったんだ」

レオの話が終ると、広司はマグダに視線を移した。

マグダは、躊躇うように視線を床に落とし、やがて口を開いた。

「私は、大戦中の1942年に生まれたから何も覚えていないの。後から、兄や姉から当時の話は聞いたけど。私には6才年上の姉がいるの。

姉の机の上には、いつも少年の写真が飾ってあって「これは誰？」と聞くと「ミッシェという子よ。幼馴染だったの」と言ったわ。でも、瞳のくりっとした黒髪のミッシェの写真は、その一枚だけだった。

姉は向かいの家に住んでいたミッシェと一緒に学校に通っていたと話したわ。戦争が始まってまもなくの頃、学校の帰り道に、ルピナスの花咲く野原で、ミッシェと花を摘んでいると、野原を横切るように長い列車が走っていったの。列車はところどころ板片が剥がれていて、そこから沢山の人々がひしめき合っているのが見えた。でも、姉とミッシェは、人々が何故あんな狭い中に詰め込まれているのか、その列車がどこへ向かうのかわからなかった。その異様な光景と、列車の通り過ぎた後の風にそよぐルピナスの群生が、あまりに対照的で強烈だったそう。

二人でミッシェの母親にその話をすると、ミッシェの母親は、蒼白な顔になって、その野原に二度と近づかないように厳しく言ったの。

その後、しばらくたったある日、姉は町から蒼ざめた顔で走り戻ってくるミッシェに出会ったの。どうしたのか聞くと、ミッシェの父親が仕事場から、緑色の制服を着た警官に連れ去られるのを目撃したと言っていたの。ミッシェは母親に知らせようと慌てて戻ってきたところだった。

その夜、姉たちが家で食事をしていると、向かいのミッシェの家の前にトラックが止まる音がしたの。母親が電気を消したので、姉が窓から向かいをのぞくと、トラックから数人の警官が降りてきた。彼らは家の中へ押し入ると、悲鳴を上げているミッシェの母親を引きずり出し、ミッシェは母親の後を追って、棍棒で警官を叩こうとしていた。もちろん子供のミッシェはすぐに捕らえられ、母親と共にトラックに押し込まれ、連れて行かれてしまった。姉はその一部始終を声も出せずにじっと見ていたの。道路には、ミッシェが落とした棍棒がころがっていた。

全てが終って再び静けさが戻ってくると、姉は母親に聞いたの。

「ミッシェは、どうして連れて行かれたの？何か悪いことでもしたの？」

母親は悲しそうに首を横に振って答えたの。「彼らは、ユダヤ人だからよ」と。

その後、姉はミッシェがどこへ行ってしまったのか、いつ戻ってくるのか、何度も大人たちに聞いたけれども、誰も口を閉ざしたまま答えてはくれなかったそうよ。

姉は、ミッシェの写真を見ながら、自分は成長していくけれども、ミッシェはずっと少年のまま、あの時間に止まっているのだと思うと私に話したわ」

「その後、ミッシェルの消息はわからなかったのかしら」

亜見の問いに、マグダはかぶりを振った。

「オランダにいたユダヤ人は、十万人以上殺されたわ」

「なんで、ユダヤ人っていうだけで殺されなくちゃならなかったんだろうな。悪いことをしたわけでもないのにさ」

広司が腹立たしそうに言った。

「何をしてもしなくても、その血だけで差別されることがあるのよ・・・」

亜見は、独り言のようにつぶやいた。

しばし、4人の間に沈黙が訪れた。

レオは、再び思い出したように語り始めた。

「当時、一人のイギリス兵をかくまったことがあった。

イギリス空軍はアルネムの橋を確保し、ドイツ軍の進路を絶ちドイツへ攻め込む作戦の途上だった。

その兵の一人が足に負傷し、僕たちの農場に運び込まれてきた。

彼は、ジャックという19歳の青年だった。

仲間たちは彼を残し、作戦のために川へ向かっていった。

僕の両親は、牛舎の二階に隠れ部屋を作り、干草を部屋の周りに積み重ね、ジャックをドイツ兵の搜索から隠そうとした。連合軍の兵士をかくまっているのがわかれば、かくまった一家も殺されてしまうからね。

ジャックの食事を運ぶのは僕の役目だった。

怪我が回復してくると、ジャックは僕に家族の写真を見せた。

彼には、両親と妹、それに年の離れた弟、当時の僕くらいの弟がいると言っていた。

弟の名前は、ジェームズといって、弟が生まれたとき、ジャックが名づけたと言っていた。ジャックのJをとってジェームズがいいと両親に言ったそうさ。

僕がジェームズに似ているとあって、ジャックは僕を弟のように可愛がってくれた。

彼には、母国に婚約者がいて、戦争が終って国に帰ったら、すぐに彼女と結婚するんだと言っていた。婚約者の写真は、いつも大切そうに胸のロケットペンダントに入れてあった。ジャックは、僕に英語の歌や単語、数字の教え方を教えてくれた。

だが、ある日、ドイツ兵が僕たちの農場に搜索にくることになった。今までにない人数での一斉搜索で、ジャックはもう隠れてはいられないと悟った。見つければ、必ず殺されるし、この家の人にも迷惑がかかると言って、一人で戦うことに決めたんだ。

僕たちは、なんとかジャックを逃がそうと説得したが、彼は聞き入れなかった。

例のアルネムの作戦は失敗し、数日間で8000人近くの仲間たちが死んでいた。彼は、仲間の方も戦うと決意していた。

ジャックは、僕の母にイギリスの住所を書いて、戦争が終わったら、家族と婚約者に自分の遺品を送ってこないかといって、家族の写真と自分の軍服姿の写真、ロケットペンダントを預けた

。

そして、ジャックは家の裏手から走り去った。草地で銃声が響いてジャックとドイツ兵が戦っているのがわかった。

静まってから、父が探しに行くとジャックと3人のドイツ兵の死体が草地にころがっていた。戦争が終ってしばらくして、母はジャックの家族に遺品を送った。ジャックの家族は、父と妹が戦争で亡くなっていた。

その後、僕らの農場は人手に渡り引っ越したが、何年もたってから、弟のジェイムズが家までお礼に訪ねてきた。戦没者の共同墓地に眠るジャックの墓を訪ねてオランダに来たんだそうだ。その頃、ジェイムズはとうにジャックの年齢を越していたが、写真に写っていた少し弱々しい感じが大人になってもその面影を残していた。

・・・あの頃の記憶は、今でも鮮烈に覚えている。

忘れようとしても忘れられない。特に幼い頃の体験は、深いところで残ってるんだろう。人間というものは悲しいもので、忘れちゃいけないことを忘れ、忘れたほうがいいことをいつまでも覚えている」

レオは視線を遠くに向けたまま、口をつぐんだ。

「レオは・・・ドイツ人を今でも憎んでいるの？・・・もし、銃をつきつけたのが日本人だったら？」

亜見の問いかけに、時間の彼方から戻るように遠い視線を亜見に移した。

そこにはもはや、記憶の時空に彷徨うレオの姿はなく、現在の時間に捉えられたレオの姿があった。

レオは、ふと棚にあった聖書に手を伸ばした。ページをパラパラめくると、亜見と広司に差し出した。ページの上には『ヨハネによる福音書』と示されている。

「君たちは、姦淫の女の話を知っているかな？」

広司と亜見はかぶりを振った。

「イエスが祈りを捧げているところへ、姦淫の場で捕らえられた女が引き出された。民衆は、律法に従って石で打ち殺すべきだとするが、イエスは何も答えない。彼らが問いつづけるので、イエスはこう答える。「あなたがたの中で罪のない者が、まずこの女に石を投げるがいい」と。これを聞くと、民衆は一人去り二人去り、皆いなくなってしまった。イエスは女に言う。「私もあなたを罰しない。お帰りなさい。今後はもう罪を犯さないように」」

レオは話し終わると、しばし間を置いてから

「人を殺したことの無い民族はいない。オランダ人も例外ではない。

憎しみは、憎しみの連鎖を生み出す。

そして、憎しみが生み出すのは・・・哀しみでしかない」

居間は、再び沈黙に包まれた。

門から車のライトが見え、玄関から人が入ってくる音がした。

ロベルトが居間に入ってくると

「やっぱり、この時間あいている薬局はなかったよ。明日まで様子を見て悪くなるようだったら、ティムが街の医者まで連れて行くと言っていたよ」と言った。

「そうだね、それがいい」

レオも同意して、思い出したように立ち上がった。

「もう一人忘れてやいないか」

そう言って、居間を出ていった。マグダも、スープ皿を片付けに出ていった。

「ロベルト、ありがとう。ティムにもお礼を」

亜見はロベルトに言った。

「わかってるし、当たり前のことをしたまでだよ」

ロベルトはそう言うと、レオにかわって亜見の足に絞ったタオルをのせた。

「ロベルト、この間は・・・」

亜見が言いかけたところへ、レオが戻ってきた。

「湿布があったよ」

「どこに？」

ロベルトが振り返る。

「アドルフだよ。彼に聞いてみたんだ」

「アドルフ！」

亜見とロベルト、広司が同時に叫んだ。

「よくアドルフに聞けたわね」

驚く亜见到

「何故？彼も、ナブのメンバーだよ。言っただろう、僕はなんとも思っちゃいない。それとも、彼が僕に銃を突きつけたことでもあるのかい？」

レオはそう言って軽くウィンクすると

「この間も、パブでビールを酌み交わした仲だ」

と言いながら、亜見の足首に湿布を貼り、厚くガーゼをあて、包帯で縛って固定した。

「これで明日まで大丈夫だろう」

レオの言う通り、翌日には足首の赤みはだいぶひいていた。腫れはあるものの、骨折ではなく捻挫だったようだ。ロベルトと広司が町で買ってきた湿布で手当を続け、一週間もすると痛みはほとんどなくなった。

暗がりの中、亜見は部屋を抜け出し手探りで階段を降りた。皆は、それぞれの部屋でそろそろ眠りにつく頃だろう。音をたてないように気をつけるが、築300年のコテージの階段はわずかに軋む。階下に下りるとキッチンへ向かった。階下の廊下も部屋も明かりは消え誰もいない。

亜見は心の中で、バランス棒を操りながら、綱渡りをしている。綱は、あるときは吊り橋ほどの太さになり、あるときは、針の穴を通る糸のような細さになる。支えのあるときもあり、全く支えのないときもある。バランス棒の片側に重い錘がのることもあれば、微妙なバランスの錘がのることもある。

下を見てはいけない、下を。下は、奈落の底。吸い込まれていけば楽になる。甘美な誘惑が待っている。

上を見てもいけない、上を。天の歌が心を惑わす。

生きることの「意味」と「無意味」を両天秤にのせながら、果てなく続く綱渡り。落ちるのが先か、綱がなくなるのが先か、いずれにしてもたどりつく先は闇……。

暗闇の中、月明かりをたよりにシンクの蛇口をまわす。グラスに水が満たされる。水泡が、月明かりに一瞬きらめいて消えていく。儚い命のように。

パキシル錠を手に取り、しばらくその白い錠剤を見つめる。

それを口に運ぼうとして手を止めた。

もっといい方法がある。薬よりももっと楽になれる方法が。

左手首を見つめ、月明かりにかざす。薄い皮膚に真横に一直線、太い蚯蚓腫れのように白く盛り上がった傷跡。一番太い傷跡。細い傷跡がそのまわりに幾筋も伸びている。

亜見は、ふっと微笑んだ。

美しい絵のようだ。手首の白いキャンバスにナイフの筆が刻み込む美しい絵のようだ。

—アナタサエ ウマレテコナケレバ……—

初めて傷つけたのは中学一年のとき。血のついた包丁が床に落ちた。その音に我にかえると、白い手首から蛇が赤い舌をのぞかせている。大きく裂けた口から赤い舌は盛り上がり、のたうつように滴り落ちる。

体中を駆け巡る毒、忌まわしい血が体の外へ流れ落ちていく。全てが浄化される。これで全てが浄化される。血など全て体から抜けてしまえばいい。

なぜ？ワタシガ、イッタイナニヲシタノ？なぜ、ワタシダケ、サベツサレルノ？ニクイ。ニクイ。コロシタイ。ダレカ、アイシテ。ワタシヲ、アイシテ。シニタイ。サムイヨ。サムイ。タスケテ。シニタイ。コロシタイ。

シンクに立てかけてあったナイフに手が伸びる。殺らなければ。刺さなければ。私を憎む彼女を刺さなければ。

腹の底から突き上がってくるあの黒いモノ。

亜見を追い立て、狂気へと駆り立てるあの黒妖犬。

ダメ。何をする気？

刺せ。

ダメ。

刺してしまえ。

ナイフの刃先が左手に振り下ろされようとした瞬間、強い力で手を抑えられた。

「ロベルト・・・！」

ロベルトが、険しい表情で亜見を見据えている。

「離して！」

亜見の言葉に、ロベルトの手にいっそう力が入る。全身の力でロベルトに抵抗を試みる。

「刺してしまう。止めないで。止めたら、私は彼女を・・・アニカを刺してしまう」

黒い犬が吠え立てながら、体中を駆け巡る。

刺せ。早く刺せ。誰でもいいから刺すんだ！

血を見せろ。生贄の血を見せろ。

止めて。誰か止めて。

止めないで。誰も止めないで。

誰かを傷つけてしまう。私を憎む誰かを傷つけてしまう。

そうなる前に、自らを傷つければ。

生贄の血を黒妖犬が待っている。

「刺せよ。かわりに僕を刺すんだ、アミ！」

「いやっ」

「君が刺さないなら、僕がやる」

ロベルトが、ナイフを取り上げようとする。

「やめてっ！」

もみあう二人の手からナイフが床に滑り落ち、冷たい音を響かせた。

ロベルトの手から銀色の液体が流れ落ちる。

月明かりに光る銀色の血。

「あぁっ・・・！」

亜見が床に腰をおとした。

手で顔を覆い、肩が小刻みに震えている。

ロベルトがかがんで亜見の肩に手をやると、亜見は電気ショックを受けたように、痙攣した体を

ロベルトから離れた。

ずっと怖れていた。

誰かを傷つけることを。

なにかを傷つけないで生きていけない。

心に棲むあの黒い犬が、なにかを傷つけるまで私を追い立てる。

自らの血であの犬を今までおとなしくさせてきたのに。

「アミ」

ロベルトの声は落ち着いていた。

亜見はまだ顔を手で覆っている。

「・・・なさい・・・」

「聞こえないよ、アミ」

「ごめんなさい。・・・とうとう傷つけてしまった」

「違うよ、アミ。君が傷つけたんじゃない。ナイフが滑り落ちるとき、切れたんだ」

「そんな慰めはいいわ。誰かを傷つけないで生きられない、そういう人間なのよ。本当にあなたを切ってしまった・・・ごめんなさい、本当に・・・」

「アミ、目を開けて。僕の言っていることが本当だって、わかるから」

ロベルトのなだめるような声に、ゆっくり手をおろして目を開ける。亜見の手が、ロベルトと同じ銀色に光っている。

「君の手も切れてしまった。ナイフが落ちるときに。誰が切ったんでもない」

ロベルトがハンカチを出して、亜見の手に巻こうとした。

亜見は、すばやく手を引く。

「放っておいて。もっと切れれば良かった、あなたの分まで」

「アミ、どうしてそんなこと言うんだ。どうして自分を傷つける？どうして君は、自分を大事にしないんだ」

「・・・生まれてこなければ良かったからよ・・・」

「どうして、そうネガティブに考えるんだ」

ロベルトの口調は、怒りを抑えた、くぐもった声になった。

「私がネガティブだと、どうして決めつけるの？私が言った言葉じゃないわ。私が言われた言葉よ」

「いったい誰に？」

「祖母によ」

亜見の中の黒いものがもやもやと湧きあがる。

「4歳のとき、祖母に言われた言葉よ」

ーアナタサエ ウマレテコナケレバ ヨカッター

亜見はふっと笑い出し、その自嘲的な声はキッチンの冷たい床に響いた。

「アミ、何が可笑的い」

「だって、可笑的いんだもの」

亜見はくっくっと笑った。

「可笑的いじゃない。アニカは、日本人が憎いといって私を憎む。まるで私が日本人全てであるかのように。生贄がほしだけなのよ。私は、何もしていない、何もしていないのに。アニカの親を傷つけたのは私じゃないのに。私は、日本人じゃないのに」

亜見の顔が、一瞬ゆがむ。

「日本にいれば「おまえは日本人じゃない。野蛮人の子供だ」と言われる。私はいったい誰？」

亜見は、こぶしで床を叩いた。再び手から血が流れる。

「野蛮人って・・・？」

亜見は、心の傷口に、ゆっくりとメスを入れる。再び傷口が開き、押しとどめていた言葉が溢れ出す。

「タイ人との混血なのよ。母は、親兄弟の大反対を押し切って、留学生だった父と結婚した。私はタイで生まれ、そこでは「日本人の子供」と言われたわ。親が離婚して日本に戻ると今度は「おまえはタイ人の子供、野蛮人の子供だ」って言われる。日本人の中には、日本人がアジアで一番優秀な民族だって思っている人がいるのよ。だから、その家系に「野蛮人」の血が混じることは一家の恥なのよ。

母は、勘当寸前の状態で家を出たにもかかわらず、その結婚に失敗して、混血の子供を連れて帰ってきた。

祖母や親戚には、受け入れがたいことだった。

祖母は、母を再婚させたがったけど、子供が障害になったわ。

私を見るたびに、祖母は母の失敗を現実として突きつけられるのよ。

日本人ではない血の子供。

「あなたがいるから、あなたのお母さんは再婚できないのよ。誰がタイ人の混血児の父親になろうなんて思う？あなたさえいなければ。あなたさえ生まれてこなければ良かったのに」と言われたわ。

実際、母親の恋人になった人は、そのことで結婚に踏み切れなかった。私は、あの家でいつも異端だった。どこにも帰る場所はなかった」

「そんなの全部、偏見だよ。偏った見方の人間の言い分だ」

「ええ、そうかもしれない。でも、言ったでしょ。みんな、誰かを血祭りにあげて、自分たちのアイデンティティを保とうとしているんだって。たとえ、それが偏見に満ちた差別であっても、自己の確立していない子供にとって、周りの大人、特に身内の言葉は、絶対的意味をもつよ。自己存在の否定の中で、自分の命に意味があると、4歳の子供がいったいどうやって信じればいい？誰が私を肯定してくれるの？」

「僕は肯定するよ。君の命には意味がある」

ロベルトの言葉に、あの犬が目を覚ます。

「無責任なこと言わないで！あなたは全ての命に意味があると信じているから、ついでに私のことも肯定してくれるっていうの？慈悲深いのね。あなたが言ってるのは理想論よ。自分が望まれた命だと確信できる人間の言うセリフだわ。誰からも愛され祝福され、周りも自分も、自分のことを肯定できる立場にいる人間のセリフだわ。でも、望まれないで生まれた人間だって、この世の中にはいるのよ。そういう人間に残された道は、この世からいなくなることだけだわ。それができずに生きている人間の気持ちなんて、あなたにはわからない。決してわからないわ！」

「ああ、わからないよ！僕は、誰が肯定しようが否定しようが、命には意味があると言ってるんだ。アミ、人の言葉じゃなくて、自分を信じろよ。自分一人で立てよ」

「お説教なんて結構よ。もう私のことは放っておいて！」

亜見の中の黒い犬が叫び声をあげる。

黒妖犬が体の中を駆け巡り、亜見はそれに引きずられるようにキッチンから飛び出した。

「アミ！」

ロベルトが、亜見の腕を捕まえようとする。

敏捷な獣のように、亜見の体はロベルトをかわして駆けていく。

ナブの門を走り出て、ライダル湖の東側の草地をまわる。

夜露に湿った草が足を撫でていく。息が切れる。太い木の幹に手をつけて息を整える。幹についた手は、乾いた血の跡が見える。

体につく傷など大したことはない。血が止まり傷がふさがってしまえばそれで終る。

目に見える傷より目に見えない傷のほうがもっと深い。

心に突き刺さった言葉の刃。一生癒されることのない傷。

ふさがったと思っても、ある時突然開いて、中からどす黒い血とドロドロした膿が溢れ出す。その裂け目から生み出されるあの一匹の黒い犬。あの犬が体中を暴徒のように駆け巡り、体を突き破ろうとする。激しい痛みが心を突く。あの痛みを忘れるために必要なものは、新しい傷。

新しい傷は、古傷を癒す唯一の鎮痛剤。

亜見は、湖畔の草地をゆらゆら彷徨った。体を求めて墓場を彷徨う幽霊のように。

湖が、月光を映して輝いている。

突然、どこからか澄んだ音色が響いてきた。

静かな湖面に人影のようなものが浮かび上がる。

ぼんやりとした姿は音もなく湖上を滑り、亜見のいる湖岸にまで滑りくる。

長い髪が月光に照らし出され銀色に輝いている。その顔は逆光で見えない。

澄んだ音色はその顔から、あるいは顔の周りから聞こえてくる。

音色に誘われるように、湖に足を近づける。

一歩踏み出すごとに、人影は少しずつ岸から離れ湖の奥へ滑っていく。

さらに一歩踏み出す。

その瞬間、ずるっと足を滑らせ、亜見は腰から地面に落ちた。

その音と共に、澄んだ音色は止んだ。

湖を見ると、人影は消えていた。

亜見はしばらく湖面を見つめつづけたが、静かな湖面が光を反射してかすかにゆらめくだけだった。

亜見は、急に寒気を感じ身震いした。

湖上の麗人一

人を湖の暗い水底に引き込む精霊。

底のない闇に飲まれる自分が脳裏に浮かんだ。

亜見は、迫りくる闇をふりきるように、林を抜け草地を走った。

ナブの門につくと、反対方向からくる人影が見えた。ロベルトだった。亜見を追ってきたのは覚えていたが、門を出た後、追ってくる気配がなくなっていた。反対方向へ行ってしまったのだろう。

ロベルトは亜見を見つけると走り寄り、玄関先で亜見の腕をつかんだ。

パンッと乾いた音が響いて、亜見の頬に痛みが走った。

ロベルトが不安とも怒りともつかない表情で亜見を見つめ、それから亜見を離すと、階段を上っていった。

階段の踊り場で、降りてこようとしたアニカにぶつかりそうになった。

アニカは、二人の様子に一瞬戸惑ったように立ちすくんでいた。

亜見は、踵を返して庭に出た。

ロベルトに叩かれた頬に手をあてる。

裏庭にまわり、ベンチに座って気を落ち着けようとする、パイプの赤い火が見える。

レオが座っていた。

「やあ、夜の散歩はどうだった？」

レオは、亜見に勧めるようにベンチの半分を開けた。

亜見は黙って座った。

しばらく黙ったまま、レオはパイプの煙をくゆらせていた。

「君に謝らなくちゃならない」

「え・・・？」

「君たちが、キッチンにいるときから、僕はここにいた。ちょうど庭で一服しようとしてここへ来た。誰もいないと思ったんだが、パイプをふかそうとすると、君たちの言い争うような声が聞こえたから、ベンチを立とうとすると、君が飛び出してきた。続いて、ロベルトも走り出してきた。二人とも、僕に気づくことなく、前庭のほうへ行ってしまった。すまなかったね。立ち聞きをするつもりはなかったんだが・・・」

「レオの体験したことに比べたら、ささいなことよね。馬鹿みたいだと思うでしょ」

「人の苦しみは、他人と比べるものじゃない。苦しみや痛みは固有のものだ」

固有の痛み。レオの痛み。アニカの親の痛み。そして・・・。

「私、どうしたらいいかわからないの。ロベルトと話をしていると、どうしても自分を抑えられなくなってしまう」

「・・・それは、君が真剣だからだよ。そして、彼も真剣なんだろう」

「真剣？いいえ、自分の中にひそむ、抑えられない衝動のせいなのよ。どうすることもできないの。いったん、それが目覚めてしまったら、もう自分ではコントロールできないのよ。他の人は、どうやってるの？どう自分をコントロールしてるの？誰かを傷つけてしまいそうなの。止められないの。だから・・・」

亜見は手首に視線を落とした。

「・・・ゴッホみたいだな」

「え？」

「自らの耳を切り落とした。いや、誤解しないでほしいんだ。決して、狂人扱いしてるんじゃないよ。芸術家的だという意味で言ったんだ」

「そんな天才とは違うわ」

「でも、芸術家とは才能だけじゃない。どうにも抑えられない衝動が彼らを突き動かす。他人から見れば、狂気とも思えるほどのパッションだ」

レオはそう言って夜空を見上げた。

断頭台からころがり落ちた頭部のような完全な満月が煌々と夜空に輝いている。

満月は、人の心を狂わすという。

狂気の月が、耳を切り落としたゴッホの自画像と重なる。

緑色の影を帯びた黄色い顔の狂人。

芸術家の理想郷の夢と現実の狭間でもだえ挫折した画家。

誰も理解しない、彼の絵画へのパッション。

収入がなければ、仕事とは言わない。

絵が売れなければ、画家ではない。

人々の無理解と蔑みの中、行き場のない魂の叫び。

信じていた仲間の裏切り。

相手を傷つける前に、自らを傷つけるしかなかった。

全ての憎しみ、全ての怒り、全ての哀しみを鋭い刃にして自らに突きたてた。

耳が切れ、血が頬をつたい落ちる。

血が浄化する。

全てを浄化する。

そして、再生する。

自らは、再生する。

最も神聖な狂気の世界の中で。

外側は全て剥ぎ取られ、ただ一個の魂の塊となって、絵筆をキャンバスにぶつけていく。描くこと。描きつづけること。

狂気の月が光を放つ。

天空を見渡すと、今まで気づかなかった星の明かりが見える。東京では、満月の夜、星は見えなかった。ふと、東京の夜景を思い出す。あの夜空にも、星は光っていたはずだ。だが、まばゆい街の明かりにかき消されて、星はひとつも見えなかった。

真実の光は、どの光？

今ここでは、地上の闇を覆い尽くすように、名もない無数の星が光の海となって夜空に瞬いている。

「夜を昼に変える力は、人にはない。だが、闇を照らす星の一つを生み出すことはできるかもしれない。たとえ、それが小さな取るに足らない不完全な星であっても」
レオはそう言ってパイプから煙を吐き出した。
細い煙が満天の星空へ吸い込まれていった。

スパイクニッセから北東へ車で2時間。クローラー・ミュラー国立美術館は、デ・ホーヘ・フェルウェ国立公園の広大な敷地の中に建っている。園内は荒涼とした原野が広がり、赤紫色のヒースの花だけが荒野を覆っていた。

車を止め、外に出る。乾いた荒地を覆うように赤紫の波が力強くうねりながら、遠くのアカマツやニレの林に打ち寄せている。

マグダはかがんで赤紫の花をつけた枝を折ると、亜見に渡した。

「強い花よ、ヒースは。どんな枯れた土地でも根付いて花を咲かせるわ」

マグダはそう言って、立ち上がった。

再び車に乗り、美術館へ向かう。

「この国立公園のそばには、第二次世界大戦で激戦地になったアルネムという町があるのよ」

マグダが言ったアルネムという町の名に、亜見はレオの話を思い出した。

「レオが話していたイギリス兵が向かった町の名前だったように記憶してるけど」

「ええ、ネーデルライン川にかかるアルネムの橋をイギリス軍が確保しようとドイツ軍と戦った場所よ。作戦は失敗し、ここにきたイギリス軍は、ほとんど全滅してしまったわ」

レオが語った戦争体験の地の近くまで亜見はやってきた。

今はもう、どこにも戦争の名残はない。

ただ、物言わぬ木立だけが、その年輪に隔ててきた時間を刻んでいる。

マグダが車を止めた先に目をやると、シンプルで近代的な外観の美術館が、森の中に静かに佇んでいた。美術館の周りは、近代彫刻の数々が木立に溶け込んでいる。

「ここは、ゴッホの絵が多く展示されているのよ。アムステルダムのゴッホ美術館についてコレクションが多いわ」

都心から離れた森の中の美術館ということもあり、観光客の姿は少ない。知る人のみが訪れる隠れ家的美術館だ。

すっきりと清潔な館内を進んでいくと、ゴッホの絵に出会う。

ゴッホといえば、目の覚めるような色彩の絵を思い浮かべるが、亜見が最初に目にしたのは、又エネン時代の暗い色調の絵だった。『馬鈴薯を食べる人々』と書かれている。

ジャガイモ料理だけが並ぶ貧しい食卓には、ごつごつした顔立ちの粗野な農民たちが、笑顔もなく集っている。食卓の上のランプだけがわずかな光をともし、その光によって周囲の闇が一層暗さを増す。農民たちの貧しく苦しい生活を暗色で描き出すことで、心の内側の闇をも表しているようだ。

ところが、続いて亜見が目にしたのは、『アルルのハネ橋』だった。正確な構図、青やオレンジや黄色の明るい色調で描かれている。

オランダを離れ、フランスへ行ったゴッホの作品は全く変化する。

突然、彼は色にとらえられた。

ものは光によって見ることができる。

そして、その光は、ゴッホに全てのものには、色が在ることを教える。

この世界は、色に満ちている。

芥子の花の赤、矢車草の青、バラのピンク、向日葵の黄色。

暗闇を彷徨っていた盲人の目が、突然視力を取り戻したかのように、ゴッホは色に執り付かれ、キャンバスを色で満たしていった。

続いて目にしたのは、花咲く桃の木の絵だった。青い空に、ピンク色の桃の花が枝いっぱい咲いている。

「これは・・・」

亜見は、その絵から喚起される一枚の絵を思い出した。

「これは、レオの好きだった絵よ。私もこの絵が、とても好きなの。これには、『マウフェの思い出』という副題がついているの」

「マウフェ？」

「ええ、ゴッホに絵を教えた従兄の画家よ。でも、二人は仲たがいをしてしまって、その後、ゴッホが和解しようとしたけど、マウフェは許すことができなかったそうよ。ゴッホは、この絵をマウフェに捧げる思いで描いたのね」

湖水地方にいたときのレオの言葉を思い出す。

—「いつか君もオランダにくるといい。そして、この絵に似た、いやもっと素晴らしい絵を見においで」—

「レオ・・・。私にとって、あの絵はレオの思い出だわ」

亜見は、心の中でつぶやいた。

人間関係の修復を試みながらも、孤独に落ちっていくゴッホ。

続く作品は「夜のカフェ・テラス」だ。

明かりのともる夜のカフェのテラス席には、人々が楽しげに集う。

しかし、それを描く画家は、人々から遠く離れている。

画家の孤独を分かつのは、夜空に浮かぶ星々だけだ。

カフェの人々が遠く描かれ、遠い夜空の星々が、接近するようにまたたいている。

最後に目にしたのは、晩年のサン・レミ時代の『イトスギのある道』だ。

燃え立つイトスギの巨木が夜空に緑の炎を巻き上げている。

大気は渦を巻き、星は二重三重の光を放つ。

ゴッホは、地上のあらゆるもの、目に映る全てのものに色を見出そうとした。すると、彼の目は、濃紺からコバルトへ変化する夜空の青をとらえた。渦巻く大気にも色がある。星の光にも色がある。世界は、肉眼でとらえる以上に多くの色が存在している。

—「本当のデッサンとは、色彩を用いて造形することなのだ」—

亜見は、ゴッホの色彩への回心の言葉を思い起こした。

ゴッホは、オランダを離れ、伝統的絵画の枠を離れ、異国の地で独自の色彩画法を見出した。伝統を逸脱すること、社会の枠を離れることは、自らを荒海に投げ出すようなものだ。亜見の目の前に、孤独と狂気の荒海が渦を巻いていた。

翌日、夕食が終ると、リズがみんなに向かって言った。

「急なことだけど、ロベルトが明日帰ることになったわ」

「え？」

「本当？」

アランチャと広司の声が、同時に響いた。

「どうして？」

「さっき電話があって、叔父が亡くなったんだ」

ロベルトが沈んだ口調で言った。

「あのカメラマンの・・・？」

亜見の言葉にロベルトは答えず

「そういうことで、みんなとは急に別れることになって残念だけど、いろいろありがとう」

「がっかりだよ」

広司がうなだれた。

「また、戻ってくるんでしょ？」

アランチャが残念そうに言った。

「後のことは何も考えてないよ。とにかく、葬式にでないと・・・」

「いろいろ大変だね」

レオが声をかける。

ロベルトは、少し笑って

「大丈夫です。みんなと一緒に過ごせて楽しかったですよ」

「飛行機のチケットは取れたの？」

広司が聞く。

「ああ、明日の朝一番にここを出発する。名残惜しいけど、そろそろ支度をしなくちゃならないんで」

「そうね。明日は、ティムが駅まで車で送っていくわ」

リズが言うと「ありがとう」と言って、ロベルトは席を立った。

亜見は動揺した。

ロベルトが帰ってしまう。こんなに突然。

昨夜のことを謝りたい。

だが、ロベルトの後姿は、亜見を拒否しているようだった。

ロベルトが部屋へ戻ってしばらくしてから、亜見はロベルトの部屋をノックした。広司が顔を出した。

「ちょっと待って」と言ってから、「ロベルト!」と呼んだ。

ロベルトが顔を出す。

「あの・・・」

話そうとするが、うまくしゃべれない。そんな亜見の様子に、ロベルトは少しイラついているようだ。

「ちょっと、下へ行ってくるよ」

広司が気をきかせて、部屋を出ていった。

ロベルトは、ドアを開け放したまま、部屋に戻って支度を始めた。

「あの、ロベルト・・・叔父さんのこと、残念に思うわ・・・とても」

「・・・僕も、残念さ」

亜見に背を向けながら、ボソリと言った。

「あなたが憧れていたカメラマンの叔父さんでしょ・・・？」

「ああ、スイスに高山植物の写真を撮りに行って転落したそうだ。まだ若かった。エリーとニッキーくらいの年の娘がいる」

「・・・なんて言っているのか・・・」

ロベルトは黙って、シャツをたたんでスーツケースに詰め込んでいる。

「あの・・・こんな急に帰るなんて思わなくて・・・。昨夜は、ごめんなさい」

「・・・何故、僕に謝るの？」

「あなたが・・・色々、気遣って言ってくれたのに、私・・・」

「僕は、僕の信念で行動している。君を気遣ったわけじゃない。僕の考えを君に言っただけだ。君には、いらぬお節介に聞こえたかもしれないけど。そして、君は、君の信じるとおりに行動してるんだろ？だったら、それでいいじゃないか。謝る必要なんて何もない。用事は、それだけ？」

ロベルトの言葉はきつかった。

何も言えなくなってしまった。

「邪魔して、ごめんなさい」

亜見がそう言って部屋を出ようとする、ロベルトが大きな溜息をついて振り返った。

「アミ、謝るなって言ってるんだ。僕に、謝るなよ」

ロベルトの顔は、怒っているのではなかった。やるせないような表情だった。

いたたまれない気分だ。亜見は、ロベルトの顔を見ていられず部屋を出た。

翌朝早く、車のトランクにスーツケースを積み込むと、ロベルトは皆と別れの挨拶をした。それぞれと抱き合っ、頬に軽いキスを三回交わす。アランチャは「スパニッシュ、フォー!」と言って、四回キスをしていた。広司とは、堅く抱き合ってから

「コージ、僕はストレートだからな」と言った。

「ストレートじゃなきゃ、俺が困る。手紙かけよ」広司も言う。

最後にロベルトが亜見のところに来ると、亜見は抱き合う気になれず、握手をしようと手を差し出した。ロベルトは差し出された手を握ると、亜見を抱き寄せ、頬に軽くキスをした。ロベルトの柔らかい髪が初めて、亜美の顔に触れた。

一瞬の後、ロベルトは体を離し、皆に手を振って車に乗り込んだ。

窓から「チャオ！」と言うと、車はナブの外へ走り去っていった。

―「世の中で一番怖いものは？」―

子供の頃、その質問に答えられなかった。おばけ？へび？ライオン？それとも、人殺し？
クラスメイトはみんな、そんな答えだった。

今なら、こう言うかもしれない。

一番怖いものは？

愛。

愛する人から愛されないこと。愛する人の愛情を失ってしまうこと。

はるか昔、誰からも愛されていると信じていた。

―アナタサエ ウマレテコナケレバ ヨカッター―

その一言で、信じていた世界が音をたてて足元から崩れ去った。

信じていた世界が崩れ去るのなら、何故、人は人を信じてしまうのだろう。

それ以来、亜見は言葉を失った。しゃべることはできる。だが、話すことができない。

喉の奥に溜まっている言葉の塊、本当に話したい言葉がでてこない。

あまりに長い間、話されなかったので、それがどんな言葉だったのかさえ、もうわからない。出口を失い、形を失った言葉たち。

ロベルトは、去って行ってしまった。繋がりがけた心の糸は切れてしまった。それを修復しようにも、もうロベルトはいない。また、喉の奥に言葉が溜まる。

なにが話したいの？私は、いったいどうすればいいの？ロベルトと会うことは、もう二度とないだろう。亜見もあと数日で帰国する。

ナブ・コテージという桃源郷で、ひとときを共に過ごし、それぞれの場所へ戻っていく。生まれた場所も、生まれた時間も、言葉も文化も違う人々がやってきては、すれ違っていく。人生のある一点の繋がりを残して。

亜見は、ロベルトをのせた車の去った方向を見つめた。

「アミ」

ふと後ろから呼び止められた。

振り返ると、レオが立っていた。

「これを君に……。グラスミアの画材屋で買っておいたんだけど、君に持っていてほしいんだ」

そう言って、スケッチブックと水彩絵の具を差し出した。

―「絵はもうやめたんです」―

その言葉を飲み込んで、亜見は受け取った。

「……ありがとう」

亜見は、スケッチブックと絵の具を持って通りを渡り、ライダグ湖の東岸の草地を歩いた。おとといの晩の迫りくる闇は、どこにもない。

麗人の湖は、波ひとつなく穏やかに静まり返っている。鏡のような湖面は、どちらが真実の世界で、どちらが鏡に映された幻影なのか？

亜見の心は、湖岸の洞窟のように穴が開いていた。そこに湧き水のようになにかが沸きあがってくる。

グラスミア途上で、地図を手に歩いてきた彼。亜見を見つけて嬉しそうに笑った彼。ワーズワースの墓の前で「ワーズワースってだれ？」と聞いた彼。ロゼイ川の見えるカフェでお茶をしたときの彼。ライダグ・マウントの展望テラスで写真家への夢を語ったときの彼。ナブの裏山に亜見を追いかけてきた彼。ストーンサークルでギターを弾き、古代ロマンを語った彼。怪我をした亜見をすばやく抱き上げた彼。ナイフを取り合いもみあったときの彼。亜見の頬を叩いたときの彼。不安とも怒りともつかない表情の彼。帰り支度をして背をむけていた彼。別れ際、亜見を抱き寄せ軽くキスをした彼。手を伸ばせば触れられる距離にいた彼。彼の声、彼の腕、彼の笑顔、彼の険しい顔、彼の怒った顔、彼のやるせない顔。全てが、鮮やかに心に沸きあがる。

大切なものに気づくのは、いつも手のひらからこぼれ落ちた後。

声にならない嗚咽が喉の奥からあふれ出る。

涙は出ない。乾いた目からは、なにもこぼれない。

いつの頃からか、亜見は泣くことができなくなった。

言葉を失い、涙を失った。涙の代わりに流す血だけが心を救っていた。

再び、もやもやと黒いものが心の中に、湧き上がってくる。

血だ。全てを浄化する血が欲しい。

ふと、横に置いてあった絵の具に目をとめた。

血のような赤い絵の具。

キャップを開け、チューブから絵の具を搾り出す。指で絵の具をぬぐい取ると、手首に塗りつけた。

水で溶かされていない絵の具は、生々しい血のようだ。

目覚めたあの黒い犬が、亜見を責めたてる。

あの晩、月明かりに光ったのはこれではない。

スケッチブックを開いて、手首の絵の具をこすりつける。

黒い絵の具を手首にのせる。

違う。

青い絵の具をのせる。

それでも、違う。

紫を加え、緑を加え、黄色を加える。

まだらになった手首をスケッチブックにこすりつける。こすりつけた色が意味のない曲線となって、スケッチブックに広がっていく。その線をつなぎ合わせていくと、何かの形が浮かび上がる。苦悶する、声のない叫びをあげる人の顔のようだ。

黒い犬が熱い塊となって体を駆け巡り、指先に向かっていく。

チューブから絵の具を指で取り、直接スケッチブックに塗りつけた。

黒い憎しみが人の顔を取り巻き、青い哀しみが目からこぼれ、赤い血に変わっていく。黄色い形のない言葉が飛び出し、紫の畏れに顔を歪ませている。

亜見は、我を忘れて色を塗りつけた。

ぽたりと水滴が落ちた。

我に帰る。

雨かと思い空を見上げるが、一点の曇りもない。

ところが、また水滴が落ちる。

汗でもかいたのかと手で顔に触れようとしたとき、頬をつたいくる水に触れた。

まさか。

亜見は驚いた。まるで汗でも落ちるように、ただ瞳から涙がつたってはスケッチブックの上に着てくる。

泣くという感覚すらない。まるで、この湖の水が大地をつたって、足の裏から体の中に染み込み、瞳をつたって再び大地に帰ろうとしているかのようだ。

水が、光が、空気が、自分を取りまく全てのものが、内側から湧き上がるものと融合していく。

心の奥から流れ出す熱い奔流が体中を駆けめぐり、指先からつたい落ちる。

指が動いていく。色づけられたスケッチブックに降り注ぐ水滴を指がなぞってゆく。紙の上の顔が滲み、歪み、色の洪水となっていく。

ナブへ戻ると、広司が亜見を手招きした。玄関脇のダイニングルームへ呼び寄せる。

「どうしたの？」

「あのさ、ロベルト・・・随分、気にしてたよ」

「え？」

「亜見を叩いたこと」

「あ・・・」

「おとといの夜、部屋に戻ってきたロベルトがイラついてたから、どうしたのか聞いたんだ。イラついてるのに、落ち込んだりしてさ。女性に手をあげたのは初めてだって。何があったのかは知らないけど。結構、自己嫌悪になってたよ、あいつ」

「・・・」

「それだけ、真剣だったんだらうな」

「レオと同じこというのね」

「おい、そんな意外そうな顔するなよ。ロベルトとは、二ヶ月近く同室だったんだ。少しくらい、あいつの気持ちはわかるさ。そうだ、亜見、これ見てみるよ」

そう言うと、電話の置いてあるテーブルにあった台帳を開いた。

宿泊客が、自由にメッセージや住所を残せるものだ。

一番新しいページを開くと、そこにはロベルトの字で住所と電話番号が書かれ、その下に「手紙を待ってる（ウェイティング・フォー・ユア・レター）」と書かれていた。

「ロベルトに、手紙書いてみたら」

「私からの手紙なんて待ってないわ」

「“Your”って便利な単語だよな。複数と単数が同じだから、みんなにあてたメッセージにも読めるし、特定の誰かからの手紙を待っていると読める」

「・・・」

広司は、亜見を横目でちらっと見ると

「あいつとは、友達であってライバルだったな」

「ライバル？」

「そ、恋敵」

広司は冗談めかしてニッと笑い、それから真面目な顔で

「でも、あの夜のロベルトを見た時、あいつの気持ちには勝てないと思った。かなわないよ、ヤツには」

「私もよ・・・」

「え？なんだよ、それ」

「今の私には、ロベルトに手紙を書く資格なんてないってことよ。でも、ありがとう、広司。あなたはやっぱりCozyだわ」

亜見は、広司に微笑んだ。

ナブでの滞在もあと一日となった。このところ、亜見はアニカの微妙な変化を感じていた。あの洞窟の夜以来、アニカの亜見に対する拒絶するような空気がわずかばかり変化してきていた。あの日以降も、アニカは亜見と必要最低限の会話しかしないし、それは以前と変わりはない。だが、それが亜見に対する嫌悪感からというより、アニカ自身がなにか混乱しているような印象だった。亜見が部屋にいるときも、意図的に避けているような態度は薄らぎ、ただ考え込むように窓の外を眺めていることが多くなった。

アニカの微妙な変化に気づきつつも、亜見は今までの距離を保ったまま、最後の荷物をスーツケースにつめていた。

アニカは、亜見の存在を気にとめていないかのように、アルコーブのクッションにもたれ、窓の外を眺めていた。

亜見は、ひととおり荷物をつめ終わると、空になったチェストの引き出しを一段一段開けておいた。アニカは手帳になにかを書きつけている。

亜見は、サイドテーブルにあった詩集に気づいた。借りていた詩集をマグダに返しにいかうと部屋を出ようとする、ふいにアニカが亜見の名前を呼んだ。

ナブに来て以来、アニカが亜見の名前を口にしたのは初めてのことだ。

驚く亜見に、アニカは自分の行動にやや困惑したように顔をそらした。

呼び止めたものの、アニカが口をきかないので、亜見はしばらく黙ってアニカを見つめた。やがてアニカは意を決したように立ち上げると、亜見の前まで歩いてきて、手帳から破った紙切れを差し出した。

紙には、アニカの名前と住所、電話番号が書かれてあった。

「・・・これは・・・」

「・・・もし、気がむいたら、手紙書いて・・・」

アニカの言葉に亜見は返事をできず、ただ驚いたままアニカを見つめた。

「ナブにいる間、お互いのこと、ほとんど話せなかったから・・・」

アニカの口から出る言葉は、亜見を驚かさず言葉ばかりだった。

なぜ今さら。

「でも・・・アニカ、あなた、日本人が嫌いなんですよ。なのに・・・どうして？」

「・・・そうよ、日本人がしたことは許せないわ。でも・・・」

アニカはそこで言葉を切ると

「それは、あなたがしたことじゃない」

アニカは、ようやく亜見の目をみつめた。

そこには、以前のような冷たく突き放すような拒絶の色はなかった。

困惑と懐疑の中で沈黙している亜見に、それ以上の言葉が探し出せない様子のアニカは、先に部屋を出ていった。

アニカの心の壁にわずかな穴が開き、その穴から流れる水が壁を押し崩し、ライダル湖からグラスミア湖へ注ぐ水流のように透明な水を亜見にむけて注いでいる。
その水の流れをどう受け止めるべきか混乱したまま、亜見は部屋を出てマグダのところへ向かった。

レオとマグダの部屋をノックすると、中からマグダが顔を出した。

「あの、借りていた詩集を返しにきたの。長いこと、ありがとう」

マグダは微笑んで、詩集を受け取った。

「明日、ナブを出ます」

「残念だわ、もうお別れなんて」

「ええ、私も。でも、あなたたちに会えて、本当に良かった」

自分で発した言葉が呼び水となって心の奥から溢れそうになる感情を、亜見は堰きとめようとした。マグダは深い青い瞳で亜見をじっと見つめると

「亜見、あなたは特別な人よ。私も、あなたに会えて嬉しかったわ。今度は、オランダの私たちの家に遊びにいらっしやい。レオも私も大歓迎よ」

そう言うと、メモ用紙に連絡先を書いて渡した。

「ありがとう」

「そうだわ。レオがあなたに渡したいものがあると言っていたわ」

「渡したいもの？」

「ええ。レオは今、ライダル湖の東のほとりで絵を描いているはずよ。私も、あとで行くけれど」

「じゃあ、レオにも挨拶してくるわ。ありがとう」

亜見は、階段を下りた。

玄関脇の居間のドアが開いている。

居間には誰もいない。猫のソルティだけが、長いすに体を伸ばし、あくびをしていた。

初めてレオとマグダに会ったのもこの居間だった。

夜遅くに居間の窓を叩いていたレオ。

不安そうなマグダの顔。

グラスミア散策の帰りに居間に顔を出したレオとマグダ。

亜見の捻挫の手当てをしながら、戦争体験を語ったレオとマグダ。

亜見は、それらを思い返ししながら、玄関から前庭へ出た。

芝生の間には、黄色いバターカップの花が暖かな陽の光をうけて、妖精の黄金の冠のように輝いている。対岸のなだらかな山並みを眺めながら、亜見はライダル湖畔を東へ歩いた。

岸から湖にせり出す大木の近くでレオの後ろ姿を見つけた。絵を描いているレオに初めて会った場所だ。

創作の邪魔にならないように、亜見は大木の斜めの幹に寄りかかって、レオの後姿を見つめた。レオが筆を置き、休憩のためのパイプを口にくわえたとき、声をかけた。

レオはふり返ると、青灰色の瞳を優しく細めた。

「マグダから、ここだと聞いたの」

「ああ、ここの景色が好きでね」

「私も……。この間、あなたが私に絵の具とスケッチブックをくれた日、私もここへ来たの」

「そうか。なにか描けたかい？」

「いいえ」

亜見はそう言って、間を置いてから

「あれが「描く」という行為なのかわからないわ」と付け加えた。

レオは無言のまま、それでいて促すように亜見を見つめ、亜見が話し始めるのを待った。

「長いこと、描くことから離れていたの。昔、美術の先生から「美大に進むための指導をしてあげる」と言われたけど断ったの。「もう絵は、やめたんです」と言って。才能がないとか、絵では食べていけないとか、そういうことだけじゃなくて……。自分の描く絵が嫌いだった。今思うと、絵って描き手の内側が表れるのかもしれないわね。自分の中にある、受け入れがたい何か絵に表れていた。それが嫌だったんだと思う。描いては破り捨て、描いては破り捨て、そしてもう筆はとるまいと決めたの。

正直、あなたから絵の具をもらったときも、もう描くつもりはなかった。

でも、ロベルトが帰ったあの日、ここであの夜のことを思い返したら、自分の中からもやもやとした黒いものが湧き上がってきた。

他の人にはわからないかもしれないけど、ずっと昔から、私の中に一匹の荒々しい黒い犬が棲みついていると感じているの。それがなんなのか、いまだにわからないけど。

そして、いったんあの犬が心の奥底から姿を現すと、自分をコントロールできなくなってしまう。主の私をのっとして、体中を暴れまわり駆け回る。なにかを求めて暴れまわる。それを止めるには、いつも生贄の血が必要だったのよ。

でも、あの日は、ナイフがなかった。

そばにあった絵の具の血のような赤色を手首に塗りつけていた。そして、それをスケッチブックにこすりつけたわ。熱い塊が体の奥から次から次へと湧き上がって、体中の血が指先にむかって流れていくようだった。

あの黒い犬が、私を責めたて追い立て、轟音となって、私を描くほうへ描くほうへ押し流していった。

そうすると、私の指は、もう私の意思など無視して、勝手に白い紙に色を重ね、なにかの形を描いていたの」

亜見の話を、レオは黙って聞いていた。

「何がどうなっているのか、わからない。わからないことばかり・・・」

「他にも、なにかあるみたいだね」

「・・・ええ。アニカが、あんなにも日本人を嫌っていたアニカが・・・さっき、私に連絡先をくれて「手紙を書いて」と・・・。いったいどうして・・・」

「アニカは、君のことを嫌っているわけではないんだ」

「あなたは、前にもそう言ったわ。なぜ？」

「彼女には、憎む対象が必要だったのかもしれない。でも、それは彼女自身をも苦しめることだったんだろう」

「彼女自身を苦しめる・・・？」

「アニカも、全ての日本人が悪いことをしたわけではないことはわかっている。彼女のお祖母さんやお父さんを苦しめたのが、君ではないことも勿論わかっている。だが、それを認め許してしまうことは、お祖母さんやお父さん、それに亡くなったお祖父さんに対する裏切行為になると感じていたんだろう。彼女なりに葛藤があったのかもしれない」

アニカの葛藤。アニカの苦しみ。

—「人の苦しみは、他人と比べるものじゃない。痛みや苦しみは固有のものだ」—

レオの言葉がよみがえる。

アニカにとって、日本人と親しくなることは、祖父母や父親の苦渋体験を踏みにじり裏切る行為だったのだろう。一方で、日本人を敵視することに不条理も感じていたのかもしれない。実際、アニカは戦争体験者ではないから、日本人に憎しみをもついわれはない。親の憎しみの代弁者として、亜見に怒りや憎しみをぶつけていたのかもしれないと亜見はふと考えた。

亜見との会話を避け、拒絶することで亜見との距離を保ってきた。だが、洞窟で亜見に、大戦中、祖父母や父が日本人から受けた行為を堰をきったように語り、憎悪の感情をぶつけたあの日以来、アニカの中で葛藤が大きくなっていったのかもしれない。亜見がナブを去る日が近づくにつれ、アニカは自分の中の矛盾に困惑していたのかもしれない。

亜見は、初めてアニカの立場に立ってアニカの心を思った。

「事実を事実として認めることが一番難しいし、勇気がいることだ。人は自分の都合にあわせて、ものを見ようとするものだから。僕も含めてね」

レオが語り始めた。

「アミ、人は、いつも多くの矛盾を抱えて生きている。

混沌とした世界の中で、答えはいつも霧の中だ。

そして、人は沢山の「もしも」を抱えながら生きている。

もしも、こんな国に生まれていたらとか、もしも、こんな親のもとに生まれていたらとか、もしも、こんな環境で暮らしていたらとか・・・。

しかし、誰も生まれを選ぶことはできない。草花が風に飛ばされ、種が落ちたその場所で花を咲かせようとするように。

君がオランダ人になることはできないし、僕が日本人になることもできない。

そこには、確かに外見的な違いはあるだろう。肌の色、目の色、髪の色。

だが、それだけのことだ。

事実は事実であって、それ以上でもそれ以下でもない。

それなのに、人はそこに優劣をつけたがる。

ユダヤ人がユダヤ人という人種だけを理由に迫害されてきたように。

君が混血だということだけで差別する人もいるだろう。

でも、僕らが何人であろうと、今ここに広がる景色を見て感じることは、人種には関係ないだろう。魂を突き動かす衝動に、人種や国籍は関係ない。ボーダレスだ。

言葉の違いも文化の壁もとりはらわれた世界の中で、自分を表現していくこともできる。そして、自分の中にあるネガティブな感情も否定する必要はない。

怒りも憎しみも哀しみも全て人間の感情のひとつだ。

アミ、君はそれを向ける方向を見つけられるだろう」

「それを向ける方向・・・？」

レオは、ゆっくりうなづいた。

「戦争によって無残に破壊されたものを再構築するように、自己の中で破壊されたものを芸術として再構築していくことができるかもしれない。ワーズワースの言葉のように、僕らが「内なる目（インワード・アイ）」で、ものを見るのなら。

そういった自分だけの魂の仕事を見つけられる人も、案外少ないものだよ」

魂の仕事ー

湖面に水鳥が舞い降り、波紋を描きながら泳いでいった。

「レオ、もし、もう一度人生を選べるなら、あなたは本当は何をしたい？」

「もう一度、人生を選べるならか・・・」

レオは、そう言ってふっと微笑んだ。そして、ゆっくりと答えたー

羽音がして、水鳥が飛び立った。

「そうだ、これを君に」

レオは一枚の絵を亜見に渡した。

「これは、・・・」

淡い水彩で描かれているのは、澄んだ空に濃いピンクの花を咲かせている一本の木だった。亜見が、4月末にライダル・マウントに行く途中で目にした花一輪だ。

日本からヨーロッパへ渡り、そこに根付いた花。

「この花を見た時、君のことが思い浮かんだんだ。出会えた記念に君に持っていてもらえたら嬉しいんだが」

「ありがとう。嬉しいわ」

「いつか君もオランダに来るといい。この絵に似た、いや、もっと素晴らしい絵が、オランダにあるんだ。君がいつか、自分のいるべき場所に根付いて、花を咲かせられると信じているよ」

「レオ・・・あなたに会えて良かった」

レオは優しく微笑むと、亜見を軽く抱き寄せた。

父親の胸に抱かれるのは、こういうことなのだろうか。

亜見は、そっとレオの背に手をまわした。

水鳥の描いた輪が、ゆっくりとライダル湖にひろがってゆく。

翌日、亜見は二ヶ月過ごしたナブを去った。

マグダの家で過ごす最後の夜、亜見は夜中に異常な暑さに目を覚ました。汗でパジャマがぐっしょり濡れている。外気温のせいではない。時折起こる自律神経の問題だろう。しぼるほどの汗をかくこともあれば、逆に、体がガタガタ震えるほど、寒気を感じることもある。

子供の頃、恋人のもとへ行って帰らない母を眠らずに待っていたことがあった。

暗闇の中、布団にくるまりながら目を開けていると、天井の染みが奇妙な形に見えてくる。黒い染みは移動し、互いに引き合うように集まり、黒い塊になっていく。黒い塊に何本もの足が生え、巨大なクモのような形になる。頭上の巨大グモは、餌を探すように、大きな足を動かし、亜見を捕らえようと伸びてくる。クモの口から吐き出された粘性の糸が、体に巻きついていく。

タスケテ、ダレカタスケテ。

声のない言葉を発する。

一ダレモ、タスケニコナイ。ヤバンジンノ コドモハ ウマレナケレバ ヨカッタノダカラー
底知れない闇が、大きな口を開け亜見を飲み込もうとする。

必至にもがいて抵抗を試みるが、ついには闇の中に飲み込まれていく。

気づくと、再び一人きりの闇の中で目覚める。汗をびっしょりかいていた。

孤独な長い夜が亜見を覆っている。汗が冷えたのか、外気が寒いわけではないのに、寒気を感じる。サムイヨ。サムイ。タスケテ。

あの頃とは違う。亜見はそう自分に言い聞かせた。ベッドから起き上がり、パジャマを着替えた。喉の渴きを感じる。

水を飲もうと階下へ降りていくと、キッチンの小さな明かりが見えた。

マグダが立っている。

斜め後ろからでも、マグダの表情は読み取れる。

それは、ロセッティの『ベアトリーチェ』だ。

この世界を離れて、かの世界を彷徨っている恍惚のベアトリーチェ。

「マグダ・・・！」

亜見は呼び戻すように叫ぶと、マグダの腕をつかんだ。

「・・・アミ・・・！」

「マグダ・・・どうして・・・」

マグダが手にしているのは、タバコではないことは明らかだ。

それが、何を意味するのか亜見にでもわかる。

ソフトドラッグは、オランダでは合法化されている。

だが、亜見はマグダから、それを取り上げた。

「アミ、お願い、わかって・・・！耐えられない、耐えられないのよ」

マグダは亜見の手をふりほどくと、居間へ行った。後姿のマグダの肩が震えている。

泣いている。

レオを捜し求めて、心が泣いている。

この世ではもう二度と会うことはできないレオを求めて。

レオを失ってこの一年、癒されることはなかったのだ。

いや、日々欠けていくのだろう。

昼間は、平静を保ち、立ち直ったかのように見えるが、夜がくれば、あの闇が襲ってくる。レオを奪い去ったあの闇が。

二本の足ののように、二人はいつも一緒に歩いてきた。嵐の日も日照りのときも、片時も離れずに歩いてきた。

ある時、突然、片方の足がもぎ取られた。相手を失った片足は前に進むこともできず、後ろに戻ることもできない。

マグダの中の時は止まったままだ。

いや、もっと酷い。

喪失の闇が心を蝕んでいく。

レオのいない世界にたった一人で生き続けることほど残酷なことはない。

たとえ幻の中でも、レオと再びあいまみえたい。

レオを失って以来、マグダは夜毎、悲しみの淵をこうして彷徨っていたのだろう。

誰に言うこともなく、たった一人で。

マグダの痛みを分かつことなどできはしない。ましてや慰めることなど、とうていできないだろう。

ただ亜見は言葉なく、マグダを後ろからそっと抱きしめた。寒い心を暖めてくれる誰かの腕を求めていたあの頃を思い返しながら。

しばらくして、マグダの震えが少しづつおさまってくると、二人は居間のソファに腰をおろした。

「ごめんなさい・・・取り乱してしまって」

亜見は、かぶりを振った。

「何もできなかった私のほうこそ謝らなくちゃ」

亜見は台所に戻ると湯を沸かし、コーヒーを入れてマグダに渡した。

マグダはコーヒーを一口飲むと、カップを見つめた。

「レオは・・・心臓病だったの。でも、ずっと調子は良くて、お医者様にも心配ないと言われていたの。ただ空気のいいところで歩いたり、ストレスのない生活をしていればいいと。

湖水地方は、彼が以前からスケッチ旅行をしたがっていた場所だったわ。自然の中で景色を見ながら歩くのも、彼の心臓にはいいと思ったし。教職を定年退職してからは、あちらこちら一緒にスケッチ旅行に行ったわ。去年、キプロス島へ行ったのが、最後になってしまったけど・・・。

レオは自分の本当にやりたかったことを諦めて、長い間、私との家庭を守ってくれたの。だから、退職後は絵を描くことに専念させてあげたかったの。でも、もっと前からそれができていたら・・・」

亜見は、マグダの言葉にレオの最後の言葉を思い出した。

「ねえ、マグダ、湖水地方を去る最後の日、私は、レオにこんな質問をしたのよ。「もし、もう一度人生を選べるなら、あなたは本当は何をしたい？」って。

レオはふっと微笑んで「もし、もう一度、人生を選べるならか・・・」と言った後、ゆっくりこう言ったの。

「もしもう一度、人生を選べるなら・・・やっぱり同じ道を選んだだろう。ゴッホのような天才に生まれなかったことを残念には思わない。僕は、画家にはなれなかったけれど、ずっと絵描きとして生きてきた。そして、僕にとって、マグダとの結婚生活が、僕の最高傑作、人生で一番美しい絵なんだ」」

暗い部屋の中で、マグダの瞳に水晶のように澄んだものがにじみ光った。

「レオはその後、「これは、マグダには内緒だよ。僕が臨終の床で、マグダに言うつもりだからね。だから君は、少なくともあと半世紀はこの秘密を厳守しなくちゃいけない」そう言ってウィンクしたのよ」

マグダと亜見は泣きながら笑った。

レオは、マグダに別れを言う間もなく、突然逝ってしまった。永遠の彼方へ。

今、レオの口には永遠が覆い、あの言葉をマグダに語ることはない。

亜見はマグダの手に自分の手を重ねた。

「マグダ・・・ドラッグはやめて、薬をもらいましょう」

マグダは小さくうなづいた。その夜、二人は寄り添いながらソファで眠った。

翌朝、目が覚めるとマグダはもう起きて、朝食の用意をしていた。

「おはよう、マグダ」

「おはよう、アミ。昨日は、ソファだったから眠れなかったでしょう」

「いいえ、一番ぐっすり眠れたわ」

マグダは、いつもと変わらない笑顔で微笑んだ。

亜見は、マグダが朝食の用意をしている間に、二階へ行って荷物をまとめた。

長年、レオとマグダが暮らしたこの家も、10月には売りに出される。

この部屋を見るのもこれで最後だろう。

ベッドの棚の上の写真を手にとった。

暗い海を眺めているレオの後姿の写真。レオの最後の写真。

亜見は、そっと元に戻すと、スーツケースとナイロンバッグを持って部屋を出た。

朝食を終え、飲み終えたティーカップを置くと、亜見は、ナイロンバッグの中のスケッチブックにはさんであった絵を取り出した。レオの描いた湖水地方の桜は、絵の中で今も満開の花を咲かせている。

「ずっと持っていてくれたの？」

マグダの言葉に、亜見は静かにうなづいてから言った。

「確かに、レオは、有名画家にはなれなかったわ。そう、無名の美術教師、絵描きだった。職業として言えばね。でも、レオの残した一枚の絵は、一人の人生を変えることになったんだわ。レオがいなければ、私はここにはいなかったでしょう」

マグダは、レオの絵をみつめ、いとおしそうに触れた。

「この花のように、あなたがイギリスで花開くことを願っているわ」

マグダは、書棚に置いてあった一枚のポストカードを取ると、亜見に渡した。

そこにはブリューゲルの有名な絵が印刷されていた。

「バベルの塔・・・」

「ええ、本物はウィーンにあるけれど、縮小版がロッテルダムの美術館にあって、この絵は縮小版のほうよ」

創世記によれば、昔、世界は同じ言葉だった。人々はバベルの塔を築いて、その頂きを天に届かせようとした。神はそれを見て人々を全地に散らし、言葉を乱し、互いに言葉が通じないようにした。

「昔は一つだった言葉を通じないようにしてしまったなんて、神様って少し意地悪ね。一つ言葉だったら、もっとあなたと分かり合えるかもしれないのに」

亜見の言葉にマグダは笑いながら「そうね」と言った後、言葉が続けた。

「でもね、私はこう考えるわ。言葉が通じないからこそ、お互い意志を伝え合おうとするんじゃないかって。分かり合えないからこそ分かり合おうと、バラバラだからこそ近づこうと努力する、それを神様は私たちに望んでいるのかもしれないって。アミ、あなたと私のようにね。

ねえ、アミ、人間はこの地上で最も無防備な生き物だと思うわ。だって、身を守るための牙や棘もないし、鱗や硬い皮膚にも覆われていない。でも、人は生きていくための知恵を与えられたわ。その知恵をどう使うかも人間次第。悲しいことに、人間はお互いを傷つけ殺しあう武器を作ったわ。でも、争いを始めるのも人間なら、争いを止めるのも人間。互いに奪い合い殺し合って獲得するのではなく、言葉の違いを超えて分かり合おうとする意思によって、私たちは一つになることができるかもしれないわ。そして、いつか人種も国籍もない彼方の世界で、私たちは一緒になるでしょう」

そう語るマグダの瞳は、出会った頃のままでの深い海の色をしていた。

荷物をトウインゴに積み込み、マグダの運転でアムステルダムに向かった。

アムステルダムに着くと、初日に泊まったホテルのロビーに荷物を置き、フロントで部屋の鍵をもらった。

「あとは、大丈夫よ。色々ありがとう」

お礼を言った後

「マグダは・・・大丈夫？」

と訊くと、マグダはうなづいた。

「10月には、新しい町で息子夫婦と一緒に暮らすわ」

マグダと亜見は、言葉なくお互いを見つめた。

湖水地方で別れたときのことが蘇る。

出会えば必ず別れはやってくるものだ。

二人は、軽く抱き合った。

「別れを惜しんでいると悲しくなるから、もう行くわ」

マグダは亜見から離れて、ドアへ向かい小さく手を振った。

「きっとまた会いに行くわ」

亜見の言葉にマグダはうなづいた。

マグダが車に乗り込み、トゥインゴが見えなくなるまで、亜見は手を振った。

荷物を部屋へ運び整理を終えると、再びロビーへ戻った。
待ち合わせまで20分ほどあったので、亜見はソファに座って待つことにした。
しばらくマグダと過ごした数日間を思い返していると、フロントに背の高い栗色の髪の女性が現われた。
フロントの男性に示されて亜見のほうへ振り向いたのは、まぎれもなくアニカだった。
栗色の豊かなウェーブヘアが肩まで伸びて、少しばかり大人びたアニカが亜見を見つけると、わずかに微笑んだ。
懐かしさより初めて出会う人のように新鮮な思いで、亜見はアニカを見つめた。

「久しぶりね」

アニカが、亜見に歩み寄った。

「ええ」

亜見は、続ける言葉が見つからなかった。
ナブにいた頃、一度も親しく口をきく機会はなかった。
たった一度だけ、あの洞窟でアニカは亜見に感情を吐露した。
そして、別れの直前、アニカは亜見にわずかに心を開いた。
そのアニカが6年ぶりに、今、目の前にいる。

「外に出ましょう」

亜見の緊張を微妙に感じ取ったのか、アニカは亜見を外に誘った。

外は、初秋の空が高く広がっている。黄色い路面電車の走るシングル運河沿いを歩くと、重厚なレンガ造りの国立博物館が見えてくる。

「オランダで一番大きな博物館よ。中には、レンブラントの『夜警』やフェルメールの『牛乳を注ぐ女』の絵があるわ。でも、今日は時間がないから、ゴッホ美術館にしぼるしかないわ」

「ええ。とても数時間で二つの美術館はまわれそうもないわ」

「そう。特にゴッホ美術館は、ちょうど来週から改装工事のために休館になってしまうのよ。本館のほかに新たに新館が建てられる予定だけど、日本の建築家が設計するのよ。何といったかしら。そう、キシヨ・クロカワだったかしら」

「黒川紀章ね。有名な建築家よ。でも、ゴッホ美術館を日本人が設計することに意義はなかったのかしら」

「本館はオランダの建築家が改装するのよ。まあ、中にはいまだに日本人にオランダ文化の一部を担われるのを反発する人もいるわ。でも、ゴッホは浮世絵に惹かれ、日本に関心を示した画家だから、そういう縁があるのよ」

ゴッホ美術館は、国立博物館の目と鼻の先にあった。灰色のコンクリート壁の近代的建物だ。中へ入ると、ガラス天井から光が差し込む吹き抜けがあり、それを取り囲むように白壁の展示室がめぐらされている。改装工事にむけて、いくつかの作品はすでにほかの美術館に移されていて、客の数もまばらだ。

2階の常設展示室は、年代ごとに作品が展示されていた。ヌエネン時代の初期の作品は、クロラー・ミュラーで見た『馬鈴薯を食べる人々』のように暗い色調で描かれている。

次いで、パリ時代の作品は、印象派とジャポニズムの影響を受け、明るい色調に変化していく。

「ここには、ゴッホが収集した浮世絵が400枚所蔵されているそうよ。日本人のあなたから見て、彼の模写はどう？」

アニカはそう問いかけながら、『雨の大橋』の模写を見上げた。

「ええ、よく表現できていると思うわ。みようみまねで漢字まで描いているし」

「浮世絵って、明暗や遠近感があまりなくて平坦な感じがするわ。でも、構図は面白いわね」

アニカの言葉に

「そうね、今見ても古びない大胆な構図だと思う。明暗や遠近感ではなく、色彩のコントラストで描いているから、ゴッホは惹かれたのかもしれないわ」

亜見は言った。

日本への憧憬を胸にゴッホは「日本のような」南仏アルルへと赴く。

アルルの明るい陽光のもとで、ゴッホは色の洗礼を受ける。

光が色となって彼に降り注いだのだった。

イエローオーカーとレモンイエローで描かれた『ひまわり』は、アルルの太陽そのものであり、輝く命の象徴だった。ゴーギャンを待つゴッホの心は期待に膨らみ、鮮やかな黄色で自室を描く。

。

ところが、画家の理想郷を思い描いたゴッホの期待は、ゴーギャンとの決裂で打ち碎かれる。

『カラスの群れ飛ぶ麦畑』の絵の前に亜見は立った。死の直前に描かれた作品だ。

黄色い麦畑の間に道が左右に分かれ、さらに麦畑を裂くように真中に一本、道が奥へ向かって伸びている。

だが、道の先は麦畑にさえぎられるようにして消滅してしまう。

もはやどこにも行けない完全な閉塞状態の中で、そこにあるのは救いのない絶望だけだ。空は青黒く塗られ、不吉の象徴のようなカラスが飛び回っている。

空に光を描こうとするが形にならず、ぼやけた黄色い輪はなお一層救いがたい。

牧師の長男としての両親の期待を裏切り、家族に見放され、唯一の理解者であった弟の援助に頼っての貧しい生活。描いた1600点の絵の中で、生前に売れた絵はたった一枚。

ゴーギャンとの再起を賭けた理想郷の実現も幻と消え、耳を切り落としたゴッホは周囲から狂人とみなされ、精神病院へ入る以外に逃れる先はなかった。

全てのものに背をむけられ、生きることの意味も、自身の存在価値も見失った。

そのゴッホが、孤独と狂気と絶望の淵で描いた作品。

絵筆がもたえ苦しみ、声にならない悲痛な叫びが、画面の奥から聞こえてくる。

なんという皮肉だろう、と亜見は思った。

およそ、この世の幸福と名のつく全てのものから見放された絶望の淵にあって、その最晩年の作品が、至高の芸術となったのだ。

生涯最高の作品を描くために彼が支払った代償は、死だった。

ゴッホにとって、死に至る瞬間が、芸術家として最も高みに昇りつめた瞬間だったのだ。亜見の中で、底のみえない不安の中から、熱い何かがわきあがってくる。

自らが飛び込んだ荒海の中、たどり着く先がどこにあるのかもわからず、それでも魂の小舟は漕ぎつづけなければならない。

海図も羅針盤もなく、進んでいる方角が正しいのかさえわからない。

吹きすさぶ懷疑の嵐にもまれ、たとえ小舟が座礁し難破しようとも、そのときまで進みつづけなければならない。

いったん岸辺を離れた舟は、安全な湾に二度と再び戻ることはできない。

自らを救うのは、ただ描くこと、描きつづけることだけだ。

美術館を後にして、亜見とアニカは近くのカフェに入った。背もたれのある籐椅子に深く腰をかけ、ガラス貼りの窓から通りを眺める。石畳の通りを背の高いオランダ人が行き交っている。「今日、私と会うことをあなたのお父さんは知っているの？」

亜見は、ティーカップを口元に運びながら聞いた。

「ええ、言ってあるわ」

「大丈夫だったの？」

「父はやはり、いい顔はしないわ。日本人と聞くだけで、昔の記憶が蘇ってしまうらしいの。理屈ではなく、生理的に受け入れられないのよ。そういう訳で、あなたを家に招くことができないの。あなたには悪いと思うわ」

アニカが謝罪すること自体が、亜見の知っているアニカとは別人のように思えた。

だが、この6年間で、お互いの関係は確かに変化していた。

「でも、父は私がこの6年間、あなたと手紙のやりとりをしているのは知っていて黙っているわ」

アニカはそう言うと、鞆の中から何かを取り出した。

見ると、写真立てのような小さな額の中に日本の切手が貼りつめられていた。

浮世絵、神社仏閣の切手など、亜見がアニカに宛てた手紙に貼ったものだった。

「素敵でしょ、この額絵」

「アニカったら。私も、日本の私の部屋に同じようなものがあるわ。コルクボードにあなたからきたポストカードや切手が貼ってあるのよ」

「同じようなことをしてるのね」

二人は、顔を見合わせて笑った。

「でも、お父さんはそれを見たら、気を悪くするでしょうね」

「ええ、おかげで私の部屋に勝手に入ることもなくて、ちょうどいいわ」

アニカが、いたずらっぽく笑った。

「お祖母さまは、お元気？」

「ええ。今年で90歳になるけど元気よ。祖母にも、あなたの話をしてるのよ。あなたが、大戦当時の本を随分読んだことに感心してるわ」

「私の話なんて気を悪くするわ」

「いいえ、あなたと付き合うことを一番喜んだのは祖母なのよ」

「え？」

「祖母は言っていたわ。大戦中の経験は辛いことで、今思い出すのも辛いけど、日本人を恨んだことは一度もないって。ずっと父から、日本人についての悪い印象を聞かされていたから、祖母の言葉は意外だった。祖母は、逆の立場になったらオランダ人も同じようなことをしたかもしれない、戦争とは人間の心を狂わす非常事態だと言っていたわ。

抑留体験をしなかった人だったら、いくらでもそういうことが言えるかもしれない。でも、実体験をして、祖父の命を奪われたにもかかわらず、そのことをきっぱり言える祖母は、公平な人だと思うわ。

祖母は、いがみ合うことより、共に生きることを望んでいるのよ。

父にも何べんもそう言ったけど、父は頑固者だし生理的な拒絶反応はどうしても消し去れないのよ。人によって感じ方や受け止め方はそれぞれだから、誰もそれを変えることはできないわ。祖母は、だからこそ、わだかまりのない私たちの世代が、互いを理解し合い、認め合えるようになることを願っているのよ」

亜見はふと思い出して、バッグからポストカードを取り出した。

「今朝、マグダからこれをもたらったの」

「ブリューゲルの絵ね」

「ええ。マグダは、この絵を人々が神に散らされた天罰の絵ではなく、言葉の違いを超えて私たちが近づくための神の願いの絵だと言うと言ったわ。実は、あなたのお祖母さんのように、私の母も、そんな思いで私に名前をつけたのよ」

「Amiね。その通りになったんじゃない？」

アニカの言葉に亜見は微笑んだ。

母は、いつか亜見に話した。日本人の名前でありながら、いつか世界に出ていくときも通じるようにと、フランス語で「友達」を意味するアミと名づけたのだった。

「レオのことは残念だったわ。レオは、ナブで、あなたのことと私のことも受け入れてくれたわ」

アニカが言った。

「ええ」

二人の間にしばし沈黙が流れた。

「あれからロベルトとは連絡してないの？」

ふいの質問に、亜見は一瞬戸惑った。ロベルトの名前が話題にのぼるとは思わなかったからだ。

「実は、日本を発つ前に手紙を出してみたの。ナブ以来、初めてよ。返事は期待していなかった。ただ、またイギリスに行くことを伝えようと思って。そうしたら、出発直前に返事が届いたの」

亜見は、ロベルトの手紙を取り出してアニカに見せた。

水色の薄い便箋に、判別しがたい不器用な文字が並んでいる。

「親愛なるアミへ

君からの予期しなかった手紙が届いた。君を覚えているかだって？忘れるわけないよ。信じないかもしれないが、君からの手紙をずっと待っていた。（もっともここ数年は、諦めていたけれど）ナブにいた頃、僕は君の心にあるものを受け入れることができなかった。今でも、僕は自分の考えを信じている。でも、君のような感じ方の人もいるということを今なら受け入れられる。イギリスに絵の勉強をしに行くそうだね。イギリスならイタリアもそう遠くない。ローマまで足をのばさないか。君を案内したい。ローマは芸術の都だ。きっと新しい発見がある。君がローマに来ることを心から待っている。チャオ。ロベルト」

「行ってらっしゃいよ、ローマに」

アニカが手紙を折りたたみながら言った。

「そうね。イギリスで少し落ち着いたら・・・」

「ロマンス復活かも」

アニカがひやかすように言った。

「何言ってるのよ、アニカったら」

「あなたたちのことは、ナブでは公認のことよ」

「誤解しないで。ロベルトには彼女がいたのよ」

「でも、別れたわ」

「それは・・・ロベルトの彼女に好きな人ができたからで、ロベルトから別れようとしたわけじゃ・・・」

「可能性としてはあるでしょ。彼女に好きな人ができたんなら、ロベルトにそういう人ができることだって。話を切り出したのが、どちらが先かというだけのことだってね。

それを心変わりと考えないほうがいいわ。終るべくして終る時期にきていただけのことよ。ま、本当のところはわからないけど」

「ええ、わからないわ。それに、あれから6年もたってるのよ」

「そうよね。新しい彼女もいるかもしれないわね。でもね、アミ、これだけは言えるわ。別れるべきものは別れるし、出会うべきものは出会うのよ」

出会いと別れー

人生の中で、何度くり返していくのだろう。

アニカ言葉を垂見は心の中で反芻した。

「いいじゃない。もし、そうなったら、いつか二組でナブに行きましょ」

「二組？」

「そう。私、来月には引越して、パートナーと一緒に暮らすのよ」

「そうだったの」

アニカは新しい住所を書いて、垂見に渡した。

「仕事場からも近くなるし」

「ホスピスの仕事を続けているのね」

「ええ。今は研修期間中だから、月給はタダに近いけど、やりがいはある仕事よ」

「あなたは、現実社会の中で人の役に立つ仕事をしていて立派だわ。私は、本当に先の見えない不安定な世界に足を踏み入れちゃったわ」

「せっかくここまできたのに後悔してるの？」

亜見はかぶりを振った。

「いいえ、それは全然」

「なら、いいじゃない。アミ、芸術が非現実的なものと考えたとしたら、それは違うと思うわ。また戦争中の話になってしまうけど、祖母は抑留所の中で、まだ比較的規制が緩かった頃、絵を描いていたの。親子別々の抑留所へ入れられてしまうことが多かったから、子供と別れる母親に頼まれて、子供の肖像画を描いていたのよ。人のためにしたことだったけれど、絵を描いている間だけは、抑留所の現実を忘れることができたと言っていたわ。それから、こんな話も本で読んだわ。ドイツの収容所にいたフランス人のある男性が、男性ばかりの汚い収容所で、一人の美しい女性がいると想像しようと言い出すの。そうすると、その女性に恥ずかしくないように、身の回りを整理したり、身ぎれいにしようとする。生活に活気がでてくるの。

男性たちが生き生きしているのを見て、監視員がその男性を独房へ閉じ込めてしまう。

気が狂いそうになる独房で、彼はそこがアフリカの大草原だと想像する。サバンナの中で、彼の心は自由に飛びまわることができる。そうして、彼は絶望しそうな収容所生活を生き抜くことができたの。

現実生活が直視するには厳しいものであればあるほど、想像力が救いになることもあるのよ。

ハングリーであればあるほど、新しい世界を見つけることができるかもしれないわ」

亜見は、アニカ言葉を聞きながら、この6年間のことを思い返した。

ナブを去り、日本へ戻ると再就職をした。社会の枠の中で働きながら、再びデッサンを始めた。2年間絵の勉強を続け、美大の通信教育部に入り4年が過ぎた。

今、亜見は奨学金を得て、ロンドンの芸術大学へ向かおうとしている。

イギリスの桃源郷で過ごした短い日々が、ライダル湖の煌きのように、心の奥で光っている。

翌日、ホテルからタクシーで空港に向かった。KLMのカウンターで手続きをし荷物を預けると、出国審査の列に並んだ。

搭乗ゲートが開くと、亜見はボーディングパスに示された窓側の席に着いた。

飛行機は、定刻通り、まっすぐな滑走路を滑り出した。

大きなエンジン音と共に、機体がゆっくりと上昇し、オランダの大地を離れていく。

斜めに旋回する機体の窓から、スキポール空港が眼下に見える。

19世紀半ばに干拓される以前、ここはハーレム湖という大きな湖だった。

その昔、スペインとオランダの大海戦があり、多くの船が沈んだため、“スキポール”―「船の墓場」と呼ばれるようになった。

船の墓場を眺めながら、亜見は、マグダに再会した日のことを思い返していた。

「あなたが、レオの眠る地へ行きたいと言ってくれたから、そこへ行きましょう」

マグダと亜見は、荷物もそのままにトゥィンゴに乗り込んだ。トゥィンゴは、二人を乗せて海へ向かった。

オウドオーブの岸辺へ。

レオは、今、灰となってこの海に眠り、よせては返す波となって、いつか遠い東の国へまで辿りくのかもしれない。

海から吹きつける強い風を受けながら、限りなく広がる海岸線を二人は、どこまでも歩いていった。

高く澄んだ蒼い空を見上げると、カモメが一羽風にあおられ高く舞っていた。

「きっとレオは私たちのことを見ているわ」

マグダがぼつりと言った。

この海にレオの灰を撒いたときのマグダの胸のうちを思うと、亜見はどんな言葉も言えなかった。亜見の胸のうちを知ってか知らずか、マグダは亜見の肩を抱きながら、砂浜を歩いた。

遠い国に住む二人は、あの短いひととき、肩を並べて二組の足跡を砂浜に刻んでいた。

だが、その足跡もやがて強い風に吹かれ、波に洗われ消えてゆくだろう。

人の軌跡もまた、時間の波に洗われ、永遠の海に流されてゆくものなのかもしれない。

亜見をのせた飛行機が、ゆっくりとスキポールから離れていく。水底に沈む無数の船の亡骸を残して―

完